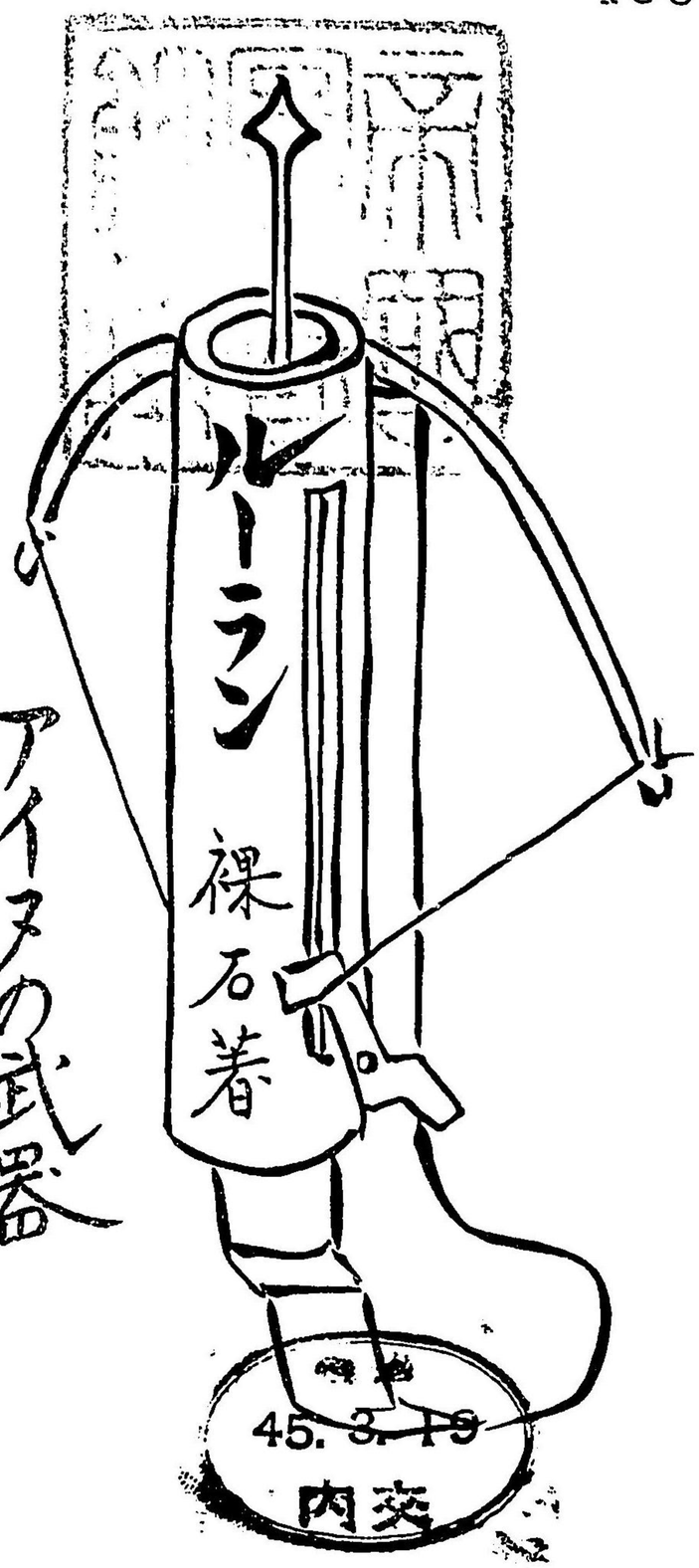
特20
488



アイヌの武器

AMAPOO

45. 3. 19
内交

自序

▲北海の山水皆怪異。就中其尤なるを我がルーランとなす。蓋ルーランとはアイヌ語にして。懸崖の意なりとぞ。

予。ルーランに親みてより爰に八年。莽蒼跌宕の氣深く予が骨髄に沁み入りて。予をして異變を愛し。破格を好み。奇怪を喜び。天馬空行的の遊行を趣味となすの變物漢と化せしめたり。

▲本書に收めたる文章は。曾て一たび新聞雜誌に現れたるもの也。今其雜文中より。比較的適意に近きもののみを拾ひ集め。名づけてルーランと稱したり。これルーランの山水の怪異なるが如く。予の文章も亦奇怪なりてふ意味を寓したるつもり也。

▲予の文章は。興の湧くに任せて一氣に書き飛ばし。措辭造句を顧みざること天下無敵也。是では。團子の如く。岩の如く。味噌の如く。糞の如き奇怪なる文章の出來上るも無理なし。

かほどの馬鹿々々しき文章を。世に問ふなぞとは烏滸も亦甚だしき業に似たれども。たゞ熊吼ゆる北海の天地には。こんな氣狂ぢみたシャモがアイヌと雑つてゐますと。世間に吹聽するに過ぎざる也。讀者宜く。予が狂態を嗤へ。

四十四年初冬

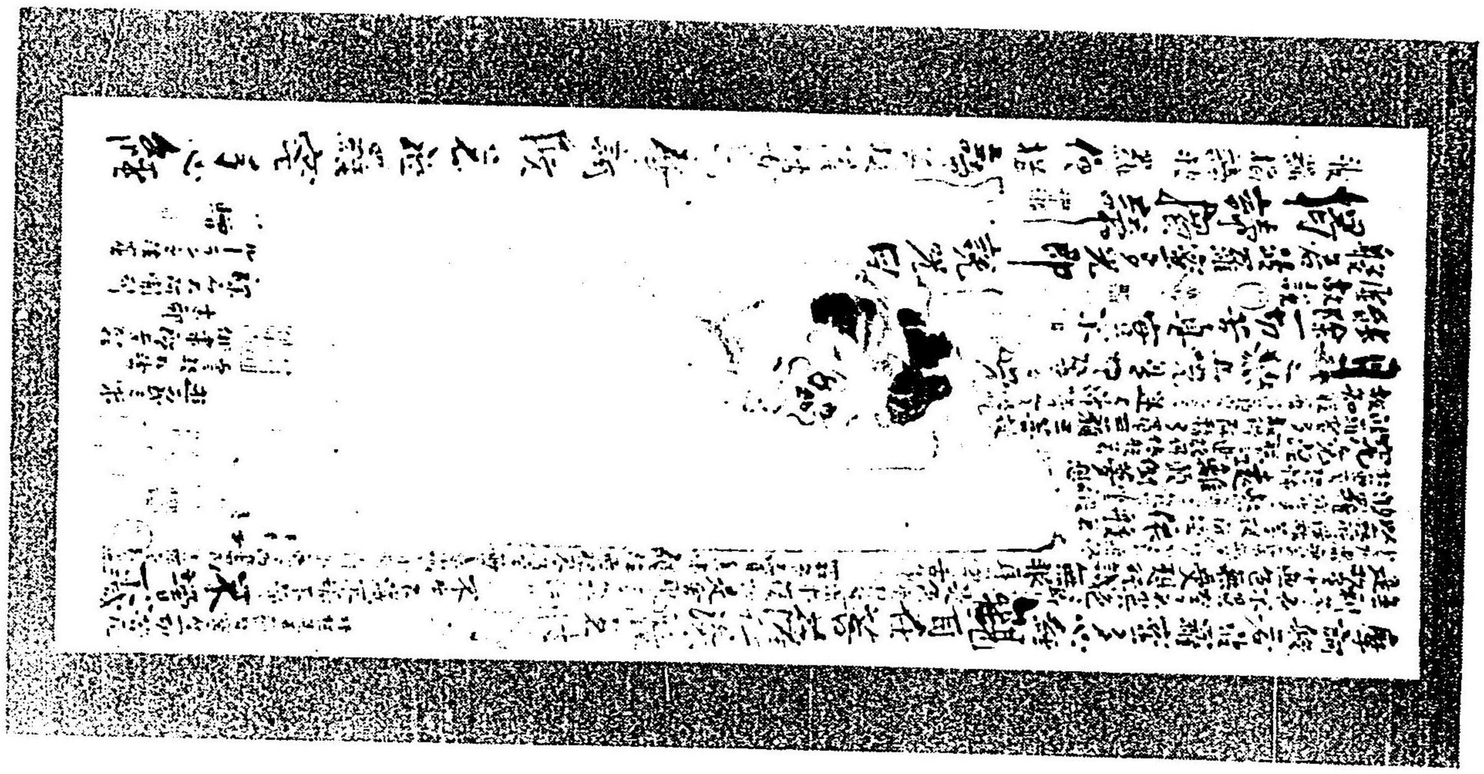
ルーランの法窟に於て

裸石狂生識

掲載したる新聞雑誌は

北海タイムス。探檢世界。旭川毎日新聞。

北世界、さつぽろ新聞等也。



目次

乾編　ルーラン

ルーランの奇勝……一
ルーランの紅葉……七
一、一大植物園——二、天地渾て錦繡——三、絶大無限の壯觀——四、豪傑の來るべき所
ルーランの佳人……一二
一、石狩深山の春色……天下無雙の櫻樹——二、六百尺の絶崖……怪鬼の叫聲——三、鬼の如き大男……涙への下り路——四、幽寂の境……戰慄すべき女性——五、ヒリカメノコ……物凄い笑顔——六、寂寞不動の窟……イモシツポ——七、刃の如き一語……尾を捲きて逃ぐ
ルーランの卷狩……二九

一、破天荒の怪文字……奇を愛する人——二、闘雲長的人物……意外の男——三、卷狩の説明……四個の壯士——四、平行四邊の地……奇なる兵法——五、大修羅……大叫喚——六、法窟内の大騒亂……兎公駭然

秋の感興……四〇

ルーランの豪傑汁……四〇

秋夜良人を想ふ……四二

虎杖の趣味……四四

ルーラン蛇龍ケ窟……四四

一、神秘靈怪冤城の所在——二、雪を捲きて下る千仞の谷——三、一頭顱を越えて又一頭顱——四、鐵杖を抑ふて探る蛇龍ケ窟——五、芳醇を鯨飲す洞奥の庭——六、燐光閃き怪蛇躍る——七、斷崖を震はす奔馬の怒濤

深夜ルーランを踰え……五六

ルーランの蛇……六〇

一、大トコタンの概觀……蛇類のパラダイス——二、踏み迷ふルーランの幽谷……絶谷を彷徨する猛熊——三、知らずや此處北海の大冤領……脚下一面蛇の海——四、寒毛林立……蝮蛇の大群——五、山妖？狐狸？……あらず小國民——六、豪快なる蝦夷ッ子……征蛇將軍——七、奇絶怪絶……蛇の山……毒血の川

カナ蛇の奇……七〇

坤編　北海の自然と人

濃畫の奇燕……七一

一、北海有數の險道……趣味深き哀史——二、茫然たる一大洞窟……紅頭の奇燕——三、夜半の警報……戰慄すべき女性——四、やまと神の子……吐味波勢の愛嬰——五、飛び來る二個の怪物……ヒリカメノコ

山賊の一夜……八〇

一、洞山翁……赤禿の谿谷——二、巨熊の哮咆冷雲を裂く——三、凄絶奇絶。人間の仕事に非

ず——四、狐啼狸躍の場——五、駭然として猛く爆發の音

無縁の濱……八九

一、戚慄すべき波動——二、鬼哭啾々——三、老法師——四、一視平等の佛眼——五、振鈴の響——六、暗寂佳境に入る

膽振行脚……九八

一、昔の先生……おかしな女……羊蹄の山——二、颯風颯々……黄粉餅……飄顛街——三、五人殺し……眞狩の村……さのさ節——四、羊蹄の麓……物識り爺——五、洞爺の湖……有珠の山……異邦人——六、靜寂の夜……人三化七——七、ベーツ君……戀情禁ぜず……壯豁の瀧——八、紋蹴の村……千潮の難

絶壁を下る北海の猛熊……一一五

奥尻奇譚……一一七

一、奇なる知友……毛脛の舅左……嶼島……クレオパトラ——二、佳人久代……鮫の餌食……不屈至極の奴……龍飛の岬——三、配所の月……仕末にゃ負ひぬ……孤島の夜……大蛇の怪——四、逆の末……親の仇……寛島の子孫……高價なる奇譚

鰊漁夫の山間生活……一二四

一、山上り……奇なる行列——二、深山の春……ホッタテ小屋——三、斧の音……ソマートー——四、猫に睨まれた鼠……古びた毛布——五、奇拔な碁石……河童の子

行雲はがき便……一三四

猛熊海上に躍る……一四七

一、月下に聽く沈痛悲愴の嘶……爪牙鋭くして敵し難し仔馬の嘆——二、銃聲頻に起る別狩の山……唯見る丈餘の猛熊——三、突擊は猛也、吶喊の聲……空中より降り落つ黑色の物體——四、水煙海を蔽ひ天日暗澹……肉中に藏す十八個の彈丸

鰊　來……一五四

一、北海の寶魚……連鎖の漁船——二、規律正しい習性……大騷ぎの心配——三、閃光陸離……群來……壯美の極點——四、荒くれ男……寶來々々——五、龍神躍る……弘安の海戰……蛸

先生——六、プラチナのピラミット……抹香臭き頭——七、死を喜ぶ……萬朶の櫻

洞爺の湖と有珠の嶽……一六二

一、隠れたる名勝——二、洞爺湖の生成——三、探勝の道順——四、湖の外貌——五、湖の内容——六、快絶なる湖中の游泳——七、有珠嶽と湖畔の風物——八、壯麗の瀑布——九、洞爺湖の價値——十、勝景保護

春信申上候……一七七

目次終

ルーラン

ルーラン

河合裸石、著

ルーランの奇勝

夏期休暇も追々近いて來たので。學生諸君はそれ〳〵旅行に。海水浴にと種々の銷夏法に就ての攻究はあるてあらうが。自分は爰にルーランの風光を諸君に紹介して銷夏がてら、探勝に出かけては如何と勸告するのてある。

◎ルーランの奇勝

◎ルーランの奇勝

北海の奇勝たるルーランは、石狩國厚田郡厚田村から北へ去る一里の處から始まつて、行程五里に連る海岸を言ふのてある。札幌を基點として汽車て行くなら、朝の一番に乘つて輕川驛て下車し、直ちに石狩行きの乘合馬車て平坦砥の如き花畔街道を馳せること五里にて石狩の町に着する。浩蕩として海の如き日東帝國隨一の長流石狩川を舟て渡つて、玫瑰の花の莚を敷いたやうな一里の沙路を川畔に沿ふて、邂逅として行くと聚富と言ふ村がある。

聚富からは五里の間、山路を歩かなければならぬが、道は至極呑氣て下駄がけて十分てある。左に海色の變化を眺めつゝ、望來。古潭等と言ふ小部落を通り越すと。溷然として開けた厚田村に入るのてある。村の前面に突兀として聳ゆる、幾多摩天の綠山は既に尋常の山姿ではない。

此日は此村に一泊してアブラコの鹽燒に旅の勞を慰めて、萬端の用意をなさねばならぬ。旅裝は最も身輕に仕立てるのは勿論だが、特に注意を要することは、少なくとも草鞋を三四足と、約五尺許りの太き杖とを携帶することてある。草鞋の多き

は火成岩を踏むの用意、杖は巖から墜落するを防ぐ爲の道具てある。

奇景を探るには、此村から舟を傭ふて沿岸五里の風光を坐ながら眺めるもよからう。然し海上から遠く眺めた位では、たゞ絶景！絶景!!と云ふ聲が出るばかりて、到底眞味を解することはできぬ、眞に奇景の味に醉ふと思ふなら、多少の難儀はあるとしても、宜しく陸行すべしだ。

さて、翌朝未明に床を蹴つて宿を發したならば、其邊に漁網を修理してゐる親爺を捕へて『ルーランに行く道は、どつちだ。』と、訊ぬるが宜しい。すると『鎭守樣の左に就て曲らつしやい。』と、質朴な言葉て親切に敎へてくれる。未明だから人が未だ寢むつて居るだらうなどゝ云ふ餘計な心配はいらぬ。此邊の村は古代から朝起きの遺傳性を帶びてゐて、吾人が夢暖かな午前三時頃から働いて居るら何處にても人の姿は見える。聽て敎へられた道に就て行くと。半里にして足指漸く仰ぎ。勾配は次第に急峻となり。はては全く欹立するが如き峻險となるのてある。

◎ルーランの奇勝

此處ぞ名に負ふ北海有數の險道、濃霧の關門てある。行程五里の間に亘つて山妖

◎ルーランの奇勝

海若の輩が巨斧を揮ふて快斫したやうな、日本海岸の一特色たる莽蒼跌宕たる懸崖は雲を刺して欹づてゐる。前にも述べたるが如く岩質は總て火成岩であつて、外皮一帶には白楊、羅漢松、蝦夷松、オンコ等の衣を纏ふてゐる。絶壁に佇立して海を望むと紺碧の色、物凄い程濃厚で、岸からして直ぐと二仭三仭の深さで、そして女の頭髪を梳つたやうな、茶褐色の藻が奇礁に纏ふてゐる。前は積丹の鼻から、藻岩山に連る約五十里の長汀曲浦幾灣の風煙、甚だ明媚で、若し閑人あつて此處に一ケ月も居を構えてゐたならば、必ずや仙骨がメキ〳〵と發育するのであらう。

海山の風光は歩一歩に面目を更めて來るのであるから、それ毎に絶景〳〵と歩を停めて居やうものなら、序幕の中に日が暮れて了ふから、サッサと急がねばならぬ。かくて大澤と云ふ一大谿谷に達したなら谷へ下りて、勿體ない程澄み切つた清瀨に沿ふて濱へ出るのだ。すると仰ぐばかりの蒼巖が斗出してゐて、盡頭は直ちに海であるから、何處から行くのか一寸方向が解らなくなる。此處は是非とも海を渡渉せねばならぬ。然し蠻的だなどゝ云ふて氣取る貴公子は、お氣の毒だが此處から歸つて貰はねばならぬ。渡渉すると云ふても、僅か二間許りの短距離で、而かも岩を飛び〳〵行くのであるから、滿潮の時でも膝まで濡らす度胸があれば澤山だ。

ルーランの景は是から始まる。

愈々渡渉して向ふの濱に着くと、あゝ奇觀やな。五百尺、六百尺の火成岩が截然として屹立し、岩壁の各所に幾多の奇怪なる巨巖が恰も金剛力士を横隊に整列せしめたかのやうにクッツイてゐる。仔細に岩面を觀察すると、其紫褐色の肌膚には、百合、石竹、玫瑰等の花草が點々として生えてゐる。濱には奇巖數ふべからず、或るものは猛虎の一群大舉して雲を呼び雨を起さむと欲するが如く、或るものは數千の獅子集りて舞踏をなすが如く、或るものは麟鳳の來りて戯るゝが如きもの等、千態萬狀巉巌崔崒。唯々絶妙絶妙の聲を發するのみである。

最も奇怪なるは、ブトシマナイの龍拔け窟である。宛然艨艟を斜に傾けたやうな高さ三丈、長さ十丈餘の峭巖が岸を去る約五尺の海中にあつて、トンネルの湧出たのではあるまいかとも疑はれる。若し舟で來たなら此の中を通過して見るもよから

◎ルーランの奇勝

◎ルーランの奇勝

う。黄昏時の如き洞中に舟はスーッと進むで行くと、死よりも冷たい風が洞口から吹いて顔を掠め覺えず幽遠凄陰の氣に魅せられる。此の洞崛に入つたなら、舟が通り拔けるまで決して聲を出してはいかぬ、萬一片言隻語でも聲を發するものなら、其反響が忽ち洞崛一杯に擴がつて、周圍の巖面からケラケラと言ふ魔のやうな物凄い笑聲が聽えるので、氣の弱い者は必ず氣絶して仕舞ふからである。

洞崛を出たならば、舟を捨てゝ赤脚で數歩北すると怪獸が口を開帳し、碧膏の如き水を吐呑してゐるに似た巨大の洞窟がある。大さ十五方尺、蛇龍が窟と云ふのは即ち是れである。舟を洞内に進めると、海氣は天井と左右との石膚に凝つて、自ら佛魔神鬼の態をなしてゐて、轉々凄愴の感を催し、魂戰ひ身縮みて到底其奥を究むることはできぬ。近くの漁翁の語る所に由れば、洞に入ること一町ばかりて南に岐を生じ、段々と窄くなつて遂には冥漠として奥の奥は不可解であるさうな。

以上は其奇景の最も卓逸せるものの見本を擧げただけに過ぎないが、此の他、チャラッナイの廻廊、底なき崛、千壓ケ崛、腥血巖、神霧の瀧、カモイ岩等皆神工鬼斧の妙に人を驚かしめてゐる、若し一々是等五里の間にある奇景の特色を記するならば、恐らく萬本の筆を禿ならしめても足らぬであらう。急ぐ人は突貫的に見て歸るもよからうが、然らざる人は十日なり二十日なり此の濱に宿つて大に探勝し、大に仙骨を養ふべしである。海水を吐呑せざる洞窟は十指を以て數ふる程あるから、人數に比例しお望みの崛を占有することができる。人類の往還絶無の海岸なれば魚は常に潑として波間に躍つてゐるから、いかな都人士でも容易に捕ふることができる。

夏期休暇將に來らむとす『如何にしてこの夏を送るべきか?』てふ問題に惱める人は、奮つてこのルーランに遊び、暫し人間世界を逃れ給へ。(四十年七月稿)

◎ルーランの紅葉

ルーランの紅葉

(一) 大植物園

◎ルーランの紅葉

晩秋の候、ヤンスケ、チャラッナイの峠を經て、ルーランの山嶮を横ぎる人士の先づ狂喜するは餘りに紅葉の美壯なるが爲め也。

由來、觀楓の位置は其四邊の山水風物と至大の關係を有するものにして、茫々千里尾花が末に月ぞ入る底の平野にあるの紅葉は、縱令其色素美なりと雖も頗る平凡のもの也、紅葉と山水とは恰も刺身に於けるツマの如し、ツマありて始めて刺身の味を美ならしめ、山水ありて始めて紅葉の美を煥發せしむる也。

我ルーランは以上三拍子の最も完備整頓せる地也、旅人が其美に狂喜するも無理なき次第也。

海拔一千尺乃至二千尺の嶮峰、蜿蜒として走すること五里、山皆火成岩、西は直ちに日本海の波瀾に沈み、渺茫遠く水は遙かに西伯利亞の雲に入り、北にはシリナイ、雄冬の翠巒逐次斗出して日夜怒濤と相鬪ひ、水光嵐色馳望甚だ豪爽。滿山の火成岩は太古より水蝕風化の作用によりて三分は皮肉を裂かれ、稜々たる山骨露出し、頗る奇拔の觀あり、殘れる七分の山塊は多少樹木の衣を纏ふ。紅葉の壯觀を覓めむ

には、尚ほ暗き密林を選ばざるべからず、異種の葉は色の配合を豐富ならしめ、且つ人をして單調に飽かしめざるが故也、此の理由によりて雄大なるルーランの中、最も如上の條件に適合せるの地は、蓋し大曲りの谿谷也。楢、椴松、白楊、楡、山櫻、朴、辛夷、イタヤ、山胡桃、シウリ、アララギ等、數百種の樹木は參差として殆ど一大植物園に入りしかの感ある也。

（二）天地渾て錦繡

月に嘯く巨熊の聲、一度北海の秋を報ずるや、雲の錦は先づ最も海岸に接近せる谿より棚曳きはじめ、漸次幽谷に擴張し行きて、或は蒼巖に跨つて紅帷をかかげ、或は曲れる溪間に懸つては黃幕を繞らし、斯くて長さ三里の一大谿谷は全く紅雲に鎖さるる也。此の谿谷の樹葉をして、かく色染の期を速かならしめ、壯美ならしむるものは日本海より間斷なく蒸發する鹽分多き水蒸氣の仕業也、この特種の水蒸氣を含有したる空氣は、峯巒に接觸して冷却し、凝結して霜となり、霧となり、露となり、雨となりて、樹葉を或は雌黃に、或は燕脂に、或は洋紅ならしめて、色素の配合に

◎ルーランの紅葉

千變萬化の呼吸を鹽梅す。斯くて滿山の雜樹爛然として霜に飽き、艶色を爭ふは毎年十月の初旬也。

見渡せば奇峯谿谷。縱に、斜に、横に數里の間、天地渾て錦繡、楢の燕脂、ヤチダモの黛赫、イタヤの渥丹、綺分繡錯無限の艶麗、いかなる嚴格親爺も一望直ちに狂舞すべし。左の方ブトシマナイの山腹に、椴松、アララギ、カヤの綠、波狀線をなして紅葉の間を縫ひ、その椴松の老幹にまつはれる山葡萄の葉の特に濃紅なる、紅綠の調和眞に恍然として人を魅せむとす。彼方紅雲深き所に、突兀として立ちたまふ閻魔大王の如き奇巖も、奈良の大佛の兄の如き怪巖も、皆やさしき龍田姫の丹精を凝して織りなせる錦繡の衣を纏ふて。今にも踊り狂ひさう也。

（三）絶大無限の壯觀

苦滑かなる谿路を東へ進むこと半町弱にして、此の地有名なるゴタロー澤に達す。巨巖高く欹ちて削成すること十數丈、横ざまに萬株の楓樹廂の如く斜垂し。（清冽晶明なる水は其下を流る。水流頗る激越。幾多妙巖の間を白蛇の如く盤渦し。迂折し。

龍蟠虎踞の態をなせる岩に咽びて忽ち一大飛躍を試み、更に吼り狂ふて崖の紅葉を漂はし、碧紅相爭ふて奔流するの奇觀。寔に人の目を奪ふばかり也。水源より川口まで二里、左右の懸崖皆謦絶、楓樹空外に懸りて萬段の金襴を繞すに似、其壯美なる遙かに神居古潭の上に出づ。

ルーチヤペコタンの絶壁に佇立して海を望めば、山を燒き天を焦すの錦繡は紺碧の海面に映じて、珊瑚の森林俄に海底に生ぜしにはあらざるかと疑はる。若し夫れ、夕陽遠くシヤコタンの洋に沒せむとして、一としきり殘照の之れに掩映するとき、北の方、ビシヤベツの岬より、呷軋の櫓聲、高低の欸乃、歸帆を急ぎて此の浦に漕ぎ來るや、倏忽として朱殷の波光は舟を包みて、舟赤く、帆赤く、櫓を推す舟子の全身赤く大千世界今大火焔に裹まれやしけむと思はる。噫、何等絶大無限の壯觀ぞや!! 見よ、看よ、爛るゝ紅葉、耀く波、光れる岩、閃く巖、燃ゆる横雲、火の子の飛ぶが如き岩燕、空も水も岩も鳥も恍惚として皆醉ひるを。

（四）豪傑の來るべき所

◎ルーランの佳人

總じてルーランの地たる、美と奇との精粹を鍾めし所にして、其美其奇は到底人間の形容し能はざるものに屬す。奈何せむ僻地にありて都市を距る甚だ近からず。而かも道は名に負ふ濃畫の山險なれば、紳士、式部の如き貴尊の士女は、とても來觀覺束なし、されど頭大の握飯を腰にし、五寸の青鞋を結ぶを屁とも思はざる豪傑肌の男女には、道さのみ困難ならざるべきを信ず。

秋深うしてルーランの紅葉愈々奇也、來れよや、來れよや、其美絶壯絶の底は、君等の敲くに放任す。（十月四日稿）

ルーランの佳人

（一）石狩深山の春色——天下無雙の櫻樹

照りもせず、曇りも果てぬ朧なる一夜、泰西の名畫その儘なるルーラン一帶の風光は、今や春の新粧を凝して居るのであらうと、獨りボクサナイの高原に佇むで、崇高壯嚴夜目にもしるき秀峰天を摩するなる北斗の空を望むで、戀慕の情に憧憬れた其翌朝のことである、マシケ山を生命の獵師から、ルーランの櫻が老いたぞ老いたぞとの知らせがあつた。自分は今が今まで彼の地の春は未だ若かるべしと信じてゐたのに、今この蠻カラなるエンゼルの警告は吾をして『それや大變だ!!』との語を發せしめ、千金にも換へ難い天下無雙のルーランの櫻花を、あたら見遁してよいものかと倉皇としてルーランを飛び出した。

チトカニの連山から、遠くペッチャロヌプリの麓へかけて、長閑に霞む春の帷幕は緩く繞つて、綠若き峰頭だけは藍色に澄み渡つた空に聳えて、そたが宛も雲に浮べる尖つた島のやうに見える。山が日夜に化粧する雪解水は、深きポロナイの谿間に落ち潺湲たる流となつて、春を石に私語き、幾多の笑渦を湛えて白蛇の如くに流れ去る畔に、耳と目とを樂しませながら、行けども行けども、紫の色香に鼻を躍らする菫花十里の小徑を逶蛇として進むに、身は何時の間にか淡紅色をなせる、屯雲閣中の人間と化した。

◎ルーランの佳人

◎ルーランの佳人

雲か霞かと云ふも陳腐なる。日出國の名花は、成程老いに老いて。綏く吹く一としきりの風に、蝶と舞ひ雪と亂れて、海を拔く六百尺の斷崖の絶巓から、紛紛として藍碧の海上に降り行くのである。頭を回らせば波濤の如き數里の高原。眸の達する限り悉く萵朶の櫻をもて飾られてゐる。それが皆鐵に似たる火成岩に根を擴張してゐて日夜一種の色を帶びた西伯利亞風と奮鬪して居るのであるから、幾百年の老櫻にして幹の周圍漸く八寸乃至一尺に過ぎぬ。然し花の數と大いさとは幹に反比例をなしてゐる。而も其花瓣と、色と、香とは優美卓絶、眞に天下無雙の種屬と云ふも斷じて誇張の言ではない。思ふに網の如き無數の根は、多量の養液を獲たる枝幹に供給するけれども、枝幹は暴戾なる風伯の迫害に遭ふので、樹は全力を擧げて其養汁を花に注いで居るらしい。

（二）六百尺の絶崖——怪魔の叫聲

自分は暫し櫻の雨に撲たれて、其花の精にチャームされてゐると、不圖怪しむべき奇聲が耳に入つた。息を殺して凝然と耳を澄まして居ると、再び人間の音色を帶

びた聲が明瞭に聽えた。聲は正しく懸崖の下からである。恐いもの見たさに、自分は匍匐して斷崖の最ッ端から、高さ六百尺の深崖を覗くと、坐ろに身柱寒く覺ゆるのである。

眼下には幾十の巨人が佇むで居るやうな、眞黑な怪巖が錯峙してゐて、藍を溶したるが如き物凄い深潭は、其周圍に毛筋程の波をも見せずに湛えてゐる。と見ると其奇巖の蔭に方つて、あな不思議や!!岩の如く、人間の如く、鹿の如く、海坊主の如き一個の怪魔が衝立つてゐる。先程から奇聲を發して居るのは、こ奴に相違ない。

他目もふらず、此異樣の怪物を凝視してゐると、亦もや帛を裂くが如き沈痛悲壯なる聲を放つた。其の音色は明かに人類であることを確めた。爰に至つて讀めたり『ははあ、彼は沖の船を呼んでゐるのだなあ?』と。眸を渺たる海原に轉ずれば、臥牛の群に似たる、古平、余市かけて、忍路、高島の翠巒も今日は、どんよりと霞の薄帛に包まれて、更に指呼するよしもない。漁師は時化て來るとても見たのか、洸洋たる日本海上一葉の舟影をも認めないのである。されば怪魔の呼びは敢て舟を呼

◎ルーランの佳人

◎ルーランの佳人

ぶ爲めの聲ではないので、疑問は愈々加はつた。何んにせよ、彼の怪魔の顏を一目見たいものだと怒鳴つたり、騷いだりして頻りと牽勢運動を試みたが、何等のオーソリチーをも値せぬのである。

人類の往還絶無なる、此處天鹽の國境に近きルーランの鬼界が濱、人間の居るべき筈はない。すると彼は人に似て非なる或種の動物ではあるまいかと、亦もや疑問は疑問を生じて果てしもない時、卒然として自分は古い記憶を喚び起した。それは何日ぞやルーランの老漁夫から聽えた話——ルーランの奥濱には、昔からアイヌが居ます——である。或はそれ等の殘族ではあるまいかと、想像は幾百年の昔を辿り始めた。

風は少しく暴れて、落花は益々降り頻り、奇聲は斷えゝに聞える。

（二）鬼の如き大男——濱への下り路

由來、奇を愛し異變を喜ぶシタタカ者の自分は、彼は何者であらう、そして何故あつて、あんな奇聲を發して居るのであらうとの疑は、層一層發揮して、最う正體

◎ルーランの佳人

を見屆けたくて矢も鐵砲もたまらなくなつたので、四顧徘徊して濱へ下る道は無いかと搜索したが見當らぬ、只徒に岩燕の飛び交ふのを見て舌打ちして嫉ましく思ふばかりである。

時に俄に彼方の谿谷から熊笹に波立ち騷せて、何者か登つて來るらしい不穩の氣配がする。獸か？人か？と路傍の楢の木蔭に身を忍ばせて居ると、忽ち身丈六尺近き鬼の如き大男の郵便配達夫がヌツト現れた。彼も餘程驚いたらしい顏色を見せたが、それも『ア、人間か！』と意識した刹那に彼の眼は柔和の光を湛えて、なつかし相に予の身近く寄つて來た。實に人跡稀なる深山や幽谷で、人に逢遭する程戀しく嬉しいものはない。遞送夫は瀧のやうに流るる汗を忙しげに拭ふて

『お前さん、何處から來られたのけえ。』と、腰のズンギリ（煙草入）を拔き取つた。

『アツタからルーランの春を見に來たのだ。』と、正直に答へ、そして濱への下り路を問ふと、道は職業柄、地の理には委しいものだ、此處から彼處の巖を曲つて、左へ降るのであると叮嚀に敎へて呉れた。

斯くて約半時餘も話を交へたかと思ふ頃。彼は胸に垂れたる長い革のサックに包まれた時計をチラと眺めて

『おう最う二時だ!! いや話が豪う長うなつた。これてお別れしますべえ。氣を附けて行かつしやれ。』と云ひ捨てて。温和な遞送夫は高原の方へと立ち去つた。

人の『運命』を封じた荷を背負ふた彼は。宛全『天路歴程』の旅人を聯想される。行襲の表は防水布で包まれて。其黑い色が。淡紅の櫻のトンネルの中を進み去るのである。

（四）幽寂の境——戰慄すべき女性

遞送夫に教へられた通りの小徑を縫ふて行くと。鱒て椴松の大樹が疎らに茂つた岩多き所に來た。身の毛もよだつやうな絶壁を下瞰すると。路と云ふは名のみなる螺旋狀をなした幅の狹い兵古帶程の徑がある。然しアバタ面の火成岩であるから。メツタに滑落する恐れはなからうと。一歩一歩念を入れて足を其皺文に突込み。玉乘りのやうに兩手で體の中心を取つて。戰々競々脂汗を流してヤツト下つた。ホツト

息を吐き仰いて來路を望めば。懸崖の表。神が鬼を役して刻めるかとばかり疑はる斧鉞の痕は深く骨に入つて。岩皺宛然鬼佛の模樣を現し。中央にあるは仁王に似たる絶大の面相。其左に列べるは閻羅大王の笏を振ふて立てるが如く。其右に座せるは閻魔大王の齒をむきて百鬼を叱咤するが如き物凄い狀をなしてゐる。思ふに予は今この佛魔等の頭から肩の邊を蹴破りつつ下つて來たのであらう。知らぬは佛と云ふものの。罰が當らぬこそ儲けものであつた。

磯の奇巖は鯛の鱗とばかり降り積つた落花の衣を纏ふてゐる。岸近くの海は靜かに凪いて。紺青深き所。アブラコ。ガヤ等の磯魚が落花を食餌とや見誤りけむ。岩を出て。高く跳ねて白い波紋を畫いては藻に隱れたり。また出たりしてゐる。ふと空を仰ぐと。今何處からか一羽の鷲が。傘のやうな翼を翳して大きな輪を作りつつ悠々と舞ふて來た。鷲の眼には人類を目擊すること稀なるこの仙境に。嘸や予を異樣の怪物と映じたのであらう。時々糞をひり落して。其音がペチャンと巖面に響き渡るので深潭の魚族は驚いて水面を騷すのである。

◎ルーランの佳人

さき程から奇なる聲は更に聞えぬので。何處を目的とも定め兼ね。只瓢々然として髪を散じ。風に御して虚明を渡るやうな感想を抱いて。勿體ない程美しい落花の上を靜かに逍遙するのである。

あゝ何んと云ふ幽寂の境であらう。晝てすらこの樣な神寂の感に撲たるるのだもの若し明月が嫦娥の峰から出て。此處ルーランの海に呀え渡る夜は。そも什麽な心地がするのであらうかと。只管詩味に耽つてゐると。突如後方の踞象の如き岩蔭から。戰慄すべき女性が現れた。

（五）ピリカメノコ——物凄い笑顔

自分は尠からず荒膽をひき拔かれて。物をも言はず其怪異の女を熟視した。歳は二十四五位であらう。顔の色は稍蒼白を帶びてゐるが。濃厚なるアイヌ民族特有の眉は凄い程美しく生えて。張りある眼光は人を惹き付けるが如き媚に潤ふて。下腹れの頰には無限の愛嬌ある所謂上乘のピリカメノコ（美人の意）であつた。アイヌである。人間である。かう自分は口の中で連呼して。聊か心臟の鼓動は鎭靜したが。

◎ルーランの佳人

さて了解せぬのは。果して此メノコが先程の聲を放つた主であらうかと云ふことである。て自分はズカ〳〵と彼の近くに進むで

『お前か？先程妙な聲をだしたのは！』

と。傲然として問ふた。すると彼は美しい刺繍のある。ムジリ（筒袖）の襟を搔き合せながら。

『ニシバー（旦那の意）然うだてや。シャクラ（櫻）散るものよ……。』

と言ひつつ、メノコは段々自分の方へ近寄つて來て。ニヤリ〳〵と笑ふのである其笑顔の物凄さ。口の周圍に入墨がしてあるので。笑ふ度毎に耳の邊までも裂けるやうに見える。

彼とて矢張人の子。美を愛する念は吾人シャモ（日本人）と何も變らぬ。北海の春逝かむとして。今この落花を惜むべく。人類最高のインスピレーションは端なくも彼の胸の琴線に觸れて。さてこそ感嘆痛切の奇聲を放たしめたことが了解された。薄氣味惡ろさ彼の笑顔は際限もなく繼續し。愈々予に肉薄して來て。果ては熊の

やうな毛の生えた手で。遠慮もなく吾輩の手を痛い程握つて。

「ニシバー。家さ來ないかよ!!』と。膽消えるばかりの高い聲を出した。是も何かの功德になることであらうと。無理に面白い事にして了ひ。自分は彼の爲すが儘に敢て手を振り拂ふともしない。

家に來いと云ふけれど。左は絶壁。右は海。磯は亂巖。何處にそんな家屋があるのか見渡す所自分の眼には映じないのである。何が何んだかサッパリ譯が解らぬが。兎に角自分はメノコに拉せられて。無意識に歩を運ぶのである。恰度姫に連れられて龍宮へでも旅行するがやうに……。

(六) 寂寞不動の窟——イモシッポ

落花が髪に降り懸ると云ふので。メノコは手拭を冠むつて猿のやうに巖を跳び越えて行くので。自分も後れじと兎のやうにピョン〳〵續いて進むのだ。

聽て蒼巖の前に來ると。メノコは立ち停つて

『ニシバー。此處だよ。』と云ひ捨てて。怪獸が口を開けてゐるが如き洞窟に姿は消

えた。自分は聊か臆病風が吹いて。直ちに入る勇氣を出せないので。暫し躊躇してゐたが。洞窟の中から佳人が促して止まないので。例の『什麼するもんだい。』と云ふ氣になり。ツト窟内に進むだ。

寂寞不動の暗黑の内に歩を運ぶと。まづ冷やかなる異臭が鼻を衝いて不快の感を與へた。約二間も來たかと思ふ頃。忽ち奥の方から凄陰なる一道の燈火が蛇の如く長く横はつたのに力を得て。少しく急歩すると。俄に廣々として可厭な所に來た。此處が彼のスウキトホームらしい。鮫の子の光りて(鮫の子を乾燥して製したもので アイヌの蠟燭である)室の樣子を見ると。眞中に爐があつて。樹の枝を利用したカギに。馬の頭程の鐵瓶が掛けられてある。爐の四周には生々しい巨大の熊の皮が一面に敷きつめられ。左の方の一段高い岩の上には。獸類や鳥類の骨? が堆高く積まれてある。メノコは今何物かを探すが如く。恰も其骨と骨との間に手を入れて居る。斜に鮫の子の光を浴びた彼の横顏は。さなきだに青白い色を一段の凄さに見せた。

耳を欹てると。沖近の海はだいぶ荒れだしたと見えて。波濤の音はド。ド。ドウと

海魔の鳴喚くやうな恐ろしい響が聞えてきた。什麼やら奈落の底にても落されたかのやうな心地がする。

ルーランの奥濱には昔からアイヌが居ます。

と云ふた老漁夫の言は遂に予を欺かぬのである。自分は創世紀時代の生活を想像して、無限の興味に醉ひ、默然として語なきこと鐵の如き人となつた。

メノコは煤けた木製の德利らしい容器を耳近く振つて

『ニシパー、シャケ(酒)飲むか。』と、問ふのである。

何んだか正體が判然せぬので、腹の蟲がグー〳〵と喜び狂ふのを叱り付けて

『有難いが、僕は酒が一口も飲めぬから心配して呉れるな。』

『弱いシャモだなあ、一口飲めてや。』

とて、木の皮を曲げて造つた盃に似たる容器と、赤黑くして毒々しい生血の滴る獸肉の一片を予の前に並べて、再び予に飲酒せよと促し、己れ先、木の瘤をくり拔いた巨大な容器に溢るるばかりに注いで、盃上に二本の箸を架した。何をするかと

見てゐると、彼は雙手を揚げて何物かを捧ぐるが如き舉動をなした後、徐に其半を呷つた。これ所謂『おんかみ。』の禮を行ふたのである。三度『ニシパー飲めてや。』と薦むるのでソツト一口甜むるが如く味つて見ると、恰もアルコール分に勝つたブランデーを飲むやうな風味である。箸を採つて眼前の肉を突いて見ると、木のやうに堅い、轉がして見ると、裏の方は黑光りする毛が一面に生えて、物凄い血がヌラ〳〵と箸を染めた

『これは何の肉だ?』

『おやじよ。』

『熊の肉か?』

『む。』

彼は美醉正に佳境に入つて、顏面朱よりも赤くなつた。

『おい、イモシッポ(寶物)を見せて呉れ。』

『何も無いもの、着物ならあるてや!!』

メノコはツト起つて。奥の方の薄暗い處から。黑色の箱を出して來て。中から樣々な美しい衣服を予の前に陳列した。刺繍をした羽織のやうなものもあれば。獸皮で作つた陣羽織のやうなのもある。自分は甚大なる興味に撲たれて。其衣服の名稱や着用の場合などを仔細に訊ねた。

『衣服は九種あるてや。シヤランペ。ケラ。チミツフ。アツトシ。イタランペ。シツトク。ラブリ。ウリよ。』

『シヤランペか。シヤランペはシヤモの女が織つた木綿に。刺繍したもので。チミツフはシヤモの衣服と何も變らない。アツトシ。イタランペはオヒヤウ(楡)の皮を續いで刺繍したものよ。』

箱の底を覗いて見ると。鵰の羽翼や。狐や水豹の皮を縫ひ合せた、外套のやうな珍無類の衣服がある。

『是は何んと云ふのか。』

『水豹ののがモウリ。鵰ののがラブリ。狐ののがウリよ。』

『この中に蝦夷錦と云ふのは無いのかネ。』

『あるてや。』と傍の衣類の中より一枚の衣服を指ざし

『この事よ。エゾニシケとはシヤモの付けた名だてや。』

『大層奇麗なものだネ。一體何物で製作るのか。』

『マツカツ(靺鞨?)からバクツタ(交易)ものよ。』

と説明して。冠婚葬祭の場合には。以上の衣服中シヤランペ。チミツフを着用するのだと附説した。この問答によりて。自分はアイヌの。衣服に關しての。得難い智識を學んだ。

（七）刃の如き一語——尾を捲いて逃ぐ

話が中絶すると。窟内は亦もや舊の寂寞に復つて。ジジーと物言ふ魚火の光が。忙しさうに瞬いてゐる。

メノコは熊の生肉をムシヤ〳〵と喰つては。酒を呑むのである。入墨をした口のほとりからは。熊の血がダラ〳〵と流れてゐる。それが半ば死した青白い爐の火に

照らされて、形容すべからざる凄味を覺えしめる。

『ニシバー、おやじを喫いてや!!』

酒が助くる彼の意氣は頗る豪氣を發揮せしめて、聲は一段の鋭尖を加へて來た。

『この熊は誰が捕つて來たのか?』

『トランケよ。』

『トランケとは誰のことか?』

『これのことよ(親指を見せて)』

『お前の亭主のことか、何處へか行かれたのかネ』

『今朝からポンケヒラの澤さ、ヤマベ釣りに行つたてや、最う直きに歸るべえさ。』

夫がおつつけ歸宅すると云ふ一言は、針の如く刄の如くに予の胸を刺した。元來アイヌ民族は嫉妬心の頗る深甚な人種であるから。萬一、ヒョット今にても夫が歸つて來たら、由なき疑ひから什麽殘忍酷迫の處置に遭ふやも知れぬ。若ず片時も速く逃げばにはと、メノコが腕力を以て止むるをも聞かず。尾を捲いて飛鳥の如く逃げ

出した。

最早五時過ぎてもあらう、しめやかな春の夕暮は迫つて來て、蜿蜒たる增毛山道の邊は靜かに朧の帳を下ろして來た。海は涙が高ふなつて、鞳鞳の聲は依然として落花を舞はしめてゐる。(五月二十二日稿)

ルーランの卷狩

(一) 破天荒の怪文字——奇を愛する人

增毛棧道隨一の難險として、幾多往還の旅人の心膽を寒からしむる、チャラツナイの絶壁に、頃日來、何人の仕業ぞ、其銀雪晶々として、白光を放てる巖脚の表面に、木炭を以て大書したる破天荒の怪文字あり、曰く、

黑雲東半球の空より馳せて、將に近日大吹雪襲來の兆あり、乃ち此機に乘じルーランの谿谷に於て、豪快なる兎狩を爲さむと欲す。奇を愛し冒險を好む壯

◎ルーランの卷狩

士は來りてこの慈天動地の豪遊に參加すべし。時日は豫め爰に告白せずと雖も

ルーラン第一の奇峰の絶巓に、黑雲低く垂るるを見ば、敏速此地點の直上たる斷崖に集合して、予が姿の出現するを待つべし。服裝は各自隨意たるべしと雖も、石油の空罐一個と、米噌若干、山刀及びマッチの携帶を忘るべからず。

と。以上の奇文は棧道去來の少なき旅人の眼より、村里の多くの耳へと傳はりて好奇心に富める人々の心を煽動せしめぬ。

兩三日を經れども何人の仕業とも判明せず、疑心は愈々增長して、甲は山賊の戲書なるべしと云ひ、乙は天狗の仕業なるべしと云ひ、諸說紛々として未だ一人の信賴すべき言を發せしものなきに、獨り奇癖家として日頃蠻勇の功名を誇れる、法學士熊穴の茂君（此人曾て單身洞穴に入りて、熊と共に一夜を明せるを以てこの名あり。）曰く。この上は終日北斗の空を觀測して、彼の奇峰に黑雲垂下するを待ちて、指定せられたる地點に行き、果して揭示に誤りなかりせば、我輩乃ち其擧に加はり、以て諸君の迷を解かん、之より以上の名案なかるべしと云ふ。人皆然也とて只管北方の空を仰望して黑雲の流れ來るを待つ。

然れど本年は、風伯雨師のいかなる算違ひにや、未曾有の薄雪にて、晴天うち續き碧藍色の空、卯の毛のさき程の雲も漂はざれば、徒に焦心して、早く吹雪の襲來あれかしと祈りける。

斯くて七日目の拂曉、茂君は鋭き寒氣を冒して、鼻孔を北方の天に朝し居けるに、忽ち彼の顏面は蔽ふべからざる喜悅の色を呈して、家へと走り入りぬ。遙望すれば洋燈を潑せるが如き暗澹たる一團の黑雲は、吹き荒む西伯利亞風に馳せて、今や彼の奇峯目がけて一直線に突進し來りぬ、と見る間に、茂君は赤毛布の防寒外套を着し頭に大道手品師の使用せしが如き、古びたる帽子を頂き、背に奇異なる大荷物を負ひ、狂氣せる人の如くルーランさして急ぎ去りぬ。

（二）關雲長的人物——意外の男

◎ルーランの卷狩

斯くの如き半ば狂氣じみたる事業を爲すは、茂君一人と思ひきや、彼より先き既に異裝せる三個の健兒、岩塊に腰を掛け、悠々煙草を輪に吹いてあらむとは、此三人、茂君とは孰れも顏を知り合へる中にて、背高く、眼光明星の如きは、豫備步兵

曹長也、鐵牛の如く肥滿して、長き銀髯を懷に入れ、右手にて其携へ來れる三尺の氷刀を以て空を斬りつつあるは、平常酒ならば三升請合だと喝破し玉ふ漁業家の大王也。兩人の間に蹲り、雪上に梵語を樂書せるは、法華宗の和尚也。茂君は更に近寄りて曰く『未だ本尊は出現せざるか。』と。漁業王米の袋を背上より下ろしながら『然り未だし。予等或は狐狸に魅せられ居るなるやも計り難し。』とて笑ふ。

此地、海拔三千尺、眼界頗る壯大、山海の觀雙眸の中にあり、紺碧の海上遙かに白鶴の群居せるが如きは、忍路、高島の連山にして、長鯨白毛布を被りて横臥せるに似たるは、積丹の半島也、長岬盡くる處、水は直ちに雲に入り、微茫として際限あるべからざる也。

四個の人、互ひに風光の秀麗なるを讃美し居ける折しもあれ、ルーラン洞窟の邊なる、奇巖の間より一點の動ける黑塊現れ、刻一刻其影は鮮明し來るを凝視すれば、紛れもなき人類の歩行する狀也、さては彼の怪物こそ大將軍に相違なし、各々眉に睡して化かされなと、一分の油斷も怠らざる程もなく、唯見る一個の巨漢は近づけ

り、背に獵網を負ひ、左手に丈餘の槍を携へ、右手に大螺貝を握り全身渾て鵰の羽翼にて綴り合したる外套を着したり。四人八個の眼は、等しくこの關雲長の如き奇怪なる豪傑の身邊に直射し、呆然として聲なきこと數分。聽て彼の怪しき男は狐の皮の頭巾を脱却して、漁業翁の傍に進み寄るに及むて、忽ち異口同音の叫びは起りぬ、曰く『計らざりき君ならむとは!!』と。

讀者よ、抑もこの男を誰と想像し給ふ、こは決して山賊にもあらざれば、素より妖怪變化の類でもなし、彼のルーランの法窟に、年久しく棲める、有名でも何んでもなき、斯く申す、拙者、僕、我輩、身共、裸石也。

(三) 卷狩の説明——四個の壯士

各々方、遠き雪路を冒し、本日の擧に御光臨の榮を得しは、裸石がルーランの海よりも深く感謝する所也、所もあらうに態と人跡稀なる斷崖に告文を書ししは全く柔弱なる男子の應募を防ぐ手段に他ならざる也、果然、予が目的は到達して、諸君の如き豪傑の士を得たるは眞に滿足に堪へざる次第也、諸君も知り給ふが如く、晴

◎ルーランの卷狩

天の日、而かも平凡なる原野などにて兎狩をなすは、貴公子の齒搔き遊戯にして、決して我等の如き梁山泊的人物の爲す業にあらざる也。然れば我等は宜しく豪壯なる方法に從はざるべからざる也。由來兎に限らず獸類は谿谷の地を撰み、天候將に險惡ならむとする機に乘じて爲さば、一舉して多數の獲物を得るは容易の業也。此の理由によりて場所をルーランの谿谷と定め、時日を吹雪の襲來する折と待ちし也。諸君彼方を看よ、先程より奇峰の上天に纏綿卷舒せる幾百萬の斷雲は合着して既に半天を蔽へぬ。いでや出陣の途に就かむ、と顧みれば四個の壯士皆舞躍して壯快となし、唯々として一列縱隊に進む。

見下せば、日本海の波瀾雪と散り花と亂れ、或は狂ひ或は舞ひ或は碎けつ千變萬化頻りに紛爭すれども、波うち際に散在して氷衣を着せる寂然不動の奇巖怪石は、惑はず、怒らず、爭はず、屹然たること恰も高僧智識の勤業今や最中なるものに似たり。見上ぐれば、骨ばかりになりたる樹枝は交互紛亂して虛空に一大鐵條網を架しにはあらざるかと疑はる。

一隊五個の健兒が吐く息は、劍の如く鋭き寒冷なる空氣に凍結して、綠濃きカイゼルも忽ち銀の針と化しぬ。

（四）平行四邊の地＝奇なる兵法

前進三時、漸くにしてゴキビルの一大谿谷に到達す。前面を仰げば直立二千八百尺のゴキビル山、頭に椴の綠髮を頂き、巍然として天に怒起し、東より南の一帶は、嵯峨重疊たる千仞の奇峰怪峭高く雲際に聳立し、遙かに一と際高く、一と際雪膚皎潔なるブトシマナイの靈峰は銀光燦として秀麗の氣滿峽に溢る。げにや此の山の風光は古來より增毛棧道を橫ぎる者の一人として感嘆の辭を拂はざるものなく、奈何なる大魔王と雖も、一度此の英姿颯々たる山貌に接しなば、必ずや其の山嶽の偉大なると、崇高なるとに驚嘆感激措く能はざるべし。

◎ルーランの卷狩

要するに此の地四周皆山を以て環擁せられ、中に略〻平行四邊形をなしたる平野を有する也。

手を翳して盈大の空を瞻上ぐれば、暗黑色の雲は四方の喬峰峻嶂の絕巔を掠め、

更に南北の山より雲又雲を呼び、混沌として今や大吹雪と化せむず氣配となりぬ。時に漁業王大喝して曰く、兵は神速を尙ぶ。何ぞ躊躇するの甚だしきと。予乃ち部隊を定めて曰く、和尙は北方の山に、曹長は東方の峰に、學士は南方の嶽に各自石油罐を携へて登らるべし。而して予が螺聲を聞かば、三軍齊しく相鼓躁し短兵急に攻め立て此の谿谷に追ひ落さるべし。其の時、翁と裸石とは、網を張りて一個も逃さず捕虜の任に當らむ。乞ふ努力せよと。

既にして三壯士、各々分擔の方向に去りぬ。翁と裸石とは方十八間に餘る大獵網を張り了り、戰鬪の準備全く整ひぬ。

(五) 大修羅——大叫喚

望見すれば前面に攀ぢ登りたる和尙の身軀は蚤くも雲に入りて大さ豆の如く、他の二健兒は更に和尙より高き地點にあること一粁許。僅かに蟻の動けるが如き一小黑點を認むるのみ也。

須臾にして雲湧き、勁風俄然として吼え發するよと見る間に、殷々たる大螺聲の

音は谷を渡り山に入りて、物凄き反響を傳ふる刹那。果然！果然!! 席捲ける吹雪は、我身を軸として渦旋き起りぬ。此の時早く、彼の時遲く、天外忽焉として湧き來る大音響は、萬雷の一時に碎け、百鬼天地を揉まむと欲するが如き凄然たる音を發し、峰又峰、谷又谷、皆呼應して耳を聾するばかりに聽えぬ。

驚破や三軍罐をうち鳴し、肉薄突貫し來りたるぞ、翁奮立せよ、裸石猛奮せよと互ひに罵り警戒頻りに加はる。

吹雪の攻鼓益々激しく、今は山も人も岩も獸も樹も微塵に碎き盡くさねば歇まぬと見えたり。されど素より危險を屁とも思はざるシレ者共の事なれば、何ぞこの如き吹雪の目潰に恐れむや。三軍の罐を鼓する音は秒又秒に增大し、宛然奔雷の如く螺聲は頻りに吠え、颯々たる風に樹木の枝を裂かれて悲鳴を上ぐる音、交々相和して山谿を撼はし、世は今や大修羅道大叫喚の巷と變じぬ。

鼓躁の音愈々接近し來り、地軸爲めに碎けしかと覺ゆる咄嗟、忽ち晦冥の中に聲あり、曰く『逃げた。兎。拔かるな。網。』と未だ其の何者の片言なるやを意識せざ

るに、突として夜叉羅刹の如き四人の黑き影は、横に、縱に、斜に、左に、右に、前に後に神出鬼沒、千變萬化、殆ど端倪する能はざる大活劇は演ぜられたり、裸石ここぞと、渾身の力艨艟を曳くが如く强網を把持すること最も力む。時に戰鬪休止の螺聲はすべてを喝破しぬ、總軍等しく獵網を檢するに、肉肥え大き豚を欺く八個の兎、潑々として冥濛の中に身を藻掻きぬ、五個皆快哉を絶叫し、中にも漁業翁の如きは吹雪の中を跳躍して喜ぶ態、天眞小兒の如し。

荒める大吹雪は何時止むべくも見えず、再擧到底企つべくもあらず、加之も今は午後三時に近し怪境久しく駐まらば、妖齒魅涎の厄免るべからず、若ず裸石が宿に向はむにはと、衆議一決乃ち各々捕獲せる兎を負ひ、ルーランの法窟さして走りぬ。

（六）法窟内の大騷亂——兎公駭然

法窟に着したるは、世は既に漆の如き闇を以て其の八分を領せる頃也。急き天魔のうち拔ける洞窟に入れば、吹雪を外の別天地、風聲濤聲を知らず、寂絶として鬼腥まづ人を襲ふ。山なす榾に點火すれば一大猛焰十間平方の窟に照り渡りぬ。

曹長は遂くも五個の兎を倒まに吊し、殘れる三個に對つて今や山刀を下さむとし、僧は各自の嚢を搜りて米を集め、學士は半ば剝げたる赤塗の大德利より酒を移さむと苦心し、裸石は味噌汁を製さむとて馬鈴薯の皮を剝きつつあり、四個皆多忙を極めつつある中に、獨り漁業翁のみは猛火に對して胡座し、巖面の反響が面白しとて豪傑笑を續發し銀髯を撫すること頗る叮重也。

馳て飯も、酒も、兎も、汁も食ふばかりに出來ぬ、いざとて爐を圍み、爰に豪飲暴啖の大宴會は始りたり、暫しが程は鯨の水を吸ふが如き音と、虎の狼を啖ふが如き音とのみ聞えて、一語を發する者なし。

沈默は何ぞ永く保たるべき、翁まづ怪音を揮ふて秋田音頭を謠ふや、忽ち僧は皺くちやになりたる空罐を鼓して之に應じ、曹長躍り、學士跳ね、裸石螺聲を吹いて舞躍すれば、窟内の大騷亂殆ど名狀すべくもあらざる也。

既にして酒は盡き、火は消え、飯も乏しくなるに及びて、さしもの荒くれ男共も漸く疲勞を覺えけむ、海豚の如く伏して、夢はいつしか蒙古の野に馳せぬ。

◎秋の感興　ルーランの豪傑汁

翌朝早起して窟内を見るに。吊せる兎公の片影だもなし。さては昨夜の馬鹿騒ぎに長耳の君。駭然として縛を斷ちて逃走せしものならむとて、口惜く罵るかと思ひきや翁まづ笑ひ。裸石笑ひ。遂に皆大に笑ひぬ。

四個の歸るを送らむとて窟を出づれば。夜來の大吹雪忘れだるが如く止みて。蒸々たる紅日。今し靈府より出でむとして。水天の色彩ルーラン一帶の連山に榮えたり。

秋の感興

ルーランの秋、暮るること早くして、雲霧常に停滯するチヤラツナイの峻峰、既に紅葉、黄葉の美裝を凝せり。山には胡桃肥え。コクワ甘く、葡萄紫也。林間酒を煖めて三尺の鮭を炙れば、秋の感興轉た切なるを覺ゆる也。(十月十一日)

ルーランの豪傑汁

ルーランは常に無代價にて山海の珍味を吾人に供給す。珊瑚の色せる鱒、林檎の如き日和貝。桃の如きコクワ等。己が欲求する佳肴は何等の勞力と金錢とを消費せずして手に入る也。就中美味にして予の最も好めるはガヤの豪傑汁と云ふ物也。されどこの汁を作らむと欲せば。少々の勞働を要する也。

幸に自己の經驗を語るを恕せ。

渚に繫げる葉舟に棹さして怪獸の游泳せるが如き岩礁の間を縫ふて航すると五米突。綠色の藻類美しく叢生せる海中を亂すは勿體なしと感する氣を忍び。大膽に錨を投じ綸を垂る。素より人間など知らぬ太古の氣風を帶びたる魚は。更に恐怖の色なく忽ち水面に小皺を寄せて群集し來る。釣道具は細き金屬を曲げたるもの數本を。女の髪の毛の如き。細長き海草の先に結び付けたるもの也。あまり無造作過ぎて嘘のやう也。岸に欲つ巉巖に咲き誇る黑白の百合に恍惚たること約二分時。忽ち强大なる力を以て綸を曳き去らむとするが如きを意識す、刹那、ソラ來たと靜かに綸を上ぐれば。約七寸餘のガヤは鈎と云ふ鈎を悉く呑み。潑溂として板子に躍る音急霰に似たり。

◎ルーラン豪傑汁

◎秋夜良人を想ふ

斯すること兩三回に及べば、優に十數人の口を飽かしむるに足る、よい加減にして錨を拔き、洞窟に返りて山刀を執り、揮ふと數次、鮮血淋漓として滴る魚の胴腹を海水にて洗ひ去り、衆ねて準備し置ける大鍋に、雹の降るが如く其の肉片を投じ、之に馬鈴薯、茄子、葱、牛蒡、胡羅の類を木材の如く積み重ね、猛火に包めば須臾にして豪傑汁は出來上る也、蓋を取れば香氣鼻を劈き、魚肉飛舞せんとして細脂珠を浮ぶ、其の味の美なる、到底人間世界にては食ふこと能はざるものに屬する也。

秋夜良人を想ふ

夕べかなしき秋の村雨は亦しても、しと〳〵と降り出しました。

寶珠山、瑞龍寺の鐘でしやう、滅入るやうな響が、秋の夜の歌を謠ふて流れ行く里川を越えて悠やかに窓から這入つて來ました。あれまた凧が一と頻り！雨は凋落の音樂でも奏づるかのやうに、庭前の楓葉は宛も物の怪の跫音を忍ばせて寄り添ふ

が如く雨戸に觸るる音が聽えます。

夫は未だルーランより歸りません。この物寂しい秋の夜を、布子一點寒晒しの着物を纏ふて、あの冷たい洞窟に今宵も宿る決心でしやうか、何んと云ふ好奇心の强い人でしやう、自分では世の中は河童の屁だなどと壯語して呑氣に構えて居られるけれど、三界に家なき妾は、夫の樣に平氣ではとても居られませぬ、殊に今宵のやうな寂滅しさうな夜などは、只管夫の身を案じ煩ふのです、嗤へ給ふな纖弱い女氣は皆かうですよ。

樣々な事を思ふてゐる中に夜はいたく更けました。戸締りを爲さむとて、ふと外を眺めますれば、雨は何時の間にか止むで、脚速き雲の裂け目に、二つ三つの星低う瞬いてゐます。水のやうな夜氣が慄然と襟に吹き込みました、途端『郵便』と云ふ寒げな聲が門口に聽えたので、急ぎ行つて、土間に零るるを拾ひ取りますと、一は札幌新聞、一は倉田松濤ぬしよりの葉書でした。裏面にこのやうな句が書いてありました。

◎秋夜良人を想ふ

◎虎杖の趣味　ルーラン蛇龍ケ窟

行く秋を熊に一偶の裸石哉。

村の若い衆が湯の歸りてありませう、口三味線を吹て、カラ〳〵と小刻みに行く足駄の音が漁師町の方へと消え去りました。室内は死したるが如く靜かて、ただ鐵瓶の沸え立つ音が、時々思ひ出したやうに笛を吹いて寂寞を亂すのみてす。

ああ、今夜も良人は歸らぬのてしやうか？

虎杖の趣味

虎杖は北海の名産也。

四月山野の雪消ゆるの時、春の精に蒸されて淡紅色の蕾非を地面に現はし、數日にして、竹の如く成長し、すに及び、尺に及ぶ。初夏雲雀老い、鯨川に躍るの頃、既に丈餘に達し、其廣大なる綠葉の蔭に鶯を宿らしめ、蛬を啼かしめ、熊を潜ましむ。

人は知らず、予は是れに對して、莽蒼たる北海道趣味に醉はむとする也。

ルーラン蛇龍ケ窟

◎ルーラン蛇龍ケ窟

（一）神秘靈怪魔境の所在

旅人若し增毛棧道を踰えて、石狩國厚田の郡境に入らば、忽ち前面に方り萬仞の懸崖雲を摩して連亘するを仰ぎ見るならむ。これぞ乃ち北海有數の奇勝、ルーランの關門也。

予が今回探檢せしは、全境十有八個の怪窟奇洞中、最も高價なる傳說を有せる蛇龍ケ窟也。

元來この蛇龍ケ窟の附近は、既に神秘鬼界の領分に屬し、前世紀の民が最も恐怖し到底人類の近づくべからざる一大魔境の地と信ぜし也。げにや四周靜寂として歷史以前の荒を留め、終日眼に觸るるものは、巨魔が絕大なる斧鉞を以て一氣に裁斷せしが如き、鮮血滴るばかりなる赭き絕崖と、其の絕崖の頂上より神仙戲れに懸けしかと疑はるる、銀箭並び落つる瀑布とにして、耳に入るものは海魅の喃々私語するに似たる底鳴りの波動と、海拔千八百尺の絕嶺に在りてランサースを爲しつつ、己が友を呼ぶ猛熊の吼聲とのみ也。窟は乃ち此の絕壁の直下に呀然として打ち拔か

◎ルーラン蛇龍ケ窟

我輩この日の扮装は、メノコより到來せる高尚なるアッシを着し、上に熊の皮の大外套を纏ひ、背に二升の白餅と、三斤の豚肉と、赤垣式の德利とを包みたる大風呂敷を斜に結び、右手に重量九百匁の鐵製の長杖を携へたり。道未だほの暗く、見上ぐる空には凍るばかりなる銀漢闌干として萬顆の球の垂れたるに似たり。ヤソスケ山道に出てける際、予を蜂須賀式の曲者とや見誤りけむ、三個の豪犬吠えに吠え、雪を捲きて疾風の如くに驅け來る。勁敵御座んなれと鐵の長杖を振り上げて其の中の最も巨大なる猛犬を骨も碎けよと打擊すれば、悲鳴を上げて毬の如く疾驅し去り、他の二個も到底敵し難しとや思ひけむ、續きて逃げ去る樣誠に小氣味よし。

ボロナイ峠にさしかかる頃、遠くハッタリの空少しく紅くなりゆきて、金輪將に七色の彩雲を吐かむとせり。寒冷なる曉風は東より西の方へ吹き過ぎるよと見る間に、波頭雪よりも白き、淼漫たる日本海の夜は今明けむとする也。

行くこと十數町、峰勢咄々天に迫らむとする大澤山の絶嶺に達す。見上ぐればゴキビル峠の瑠璃峰、凍雲を刺して欹ち、見下ろす千仞の谿谷雪は數丈の樹木を蔽ふて針程の枝をも餘さず滿目唯々一白也。谿谷へ下る道を搜索徘徊すれども見當らず、若かず、笹の曲藝を演じて下らむにはと、乃ち四邊に茂れる丈餘の熊笹を掘り來り、束ねて風流なる橇を製し、是れに我輩の尻を載せ兩脚を伸べ、大聲一呼山谷を震はすよと思ふ一刹那、怪風一陣、雪を捲きて千仞の谿底に滑り下りぬ。其の愉絶快絶、到成人間の製造し文字にて形容すべき範圍のものに非らざる也。されどこの曲藝、危を愛する豪傑にあらざれば斷じて行ふべからず、歌がるたに憂身を窶し玉ふ公達等が、そは面白しなどと思惟して、この雪滑りを演じ玉はゞ、生命は亡きものと承知召さるべし。

◎ルーラン蛇龍ケ窟

谿底に憩ひ一腔の英氣を吐くこと雲時、ふと左に欹つ巨巖の傍に熊糞點々たるものあるを認む。近寄りて仔細に檢するに、糞悉く凍りて石の如く、四周には盆大の足跡明かに印せるを見る。思ふに巨熊去りてより、さのみ時刻の經過せざるものならむ。左して海濱に出て、猿の如く輕捷に岩塊を跳ね行くこと二十有八にしてルーランの門戸に入る。

れたる也。蛇龍ヶ窟!! 既に名を聞くだに何人も戦慄の感を催すべきに。其の窟内には實に神秘靈怪。得て解すべからざる歴史を有し、鬼怪を有す

乞ふ先づ刮目して以下の記事に注視せよ。

窟は深さ或は十町位なるべしと云ひ、或は半里以上に及ぶべしと云ひ、或は無限也。知れざる也と云ふ。是れ未だ曾て、人命を要求するてふ恐ろしき大魔窟を探究せむと欲するヒーローの出でざるが故也。入口の大さ直徑六尺位なれど、一歩は一歩に其の圓周を増加し、進みて約一町の所に達すれば、優に五千俵の穀類を積み重ね得べき廣袤を有す。洞奥素より陰暗寂滅として開闢以來闇の帷幕を垂れ、恰も人類全滅後の靜默も斯くやと思はるる凄冷の氣を湛えたり。自今數萬年の後か、地殼に一大變動を來たすにあらざれば斷じて光明の達するを許さざる也。

試に其處に佇むで、耳を傾け、眸を凝らして前面黑暗々の一點を熟視すれば、初めには洞奥の方より一味の凄風颯々として吹き來るに覺えず龜の子の如く頸を縮むる刹那、こは何事ぞ、青白き燐火星の如く輝き、朦朧として灰白色をなせる第三紀

層岩の周壁を照らす變幻の不可思議なるに愕然たる折しもあれ、遙かにケラ〳〵と笑ふが如き聲頻りに起りて凄怪今や絶頂に達する頃、蒙勃たる不平を抱ける冤鬼の切齒するが如き音響も聽えて、立ち迷ふ一縷の燐火低徊して消ゆるが如く、消えざるが如く、今は明るく、今は暗く、明滅殆ど間斷なし。此の奇怪なる聲と光とは、近き過古より發生せしには非らずして、太古より同一の現象を繰り返しつつある也。

以上の傳說は數年前より予が好奇心を刺戟して、一度探檢せばやと焦心し居たれども、奈何せむ蛇龍ヶ窟は常に進水深く、委曲の洞奥は普通の小舟にては操縱頗る困難を感じ、到底奥深く探入するを許さざれば、常に其の入口より無念の嘆を洩して引し返しける也。其の後予はふと案ずるに、彼の地の冬は極めて嚴寒なれば、冬の最中に至りなば、或は洞中の海水氷結して、氷上を渡りつつ洞奥に行けるやも計り難しと、即ち探檢の時期を特に冬期と定めし所以也。

（二） 雪を捲きて下る千仞の谷

いてや蛇龍ヶ窟の奥深く探らばやと、去ぬる紀元節の午前五時厚田村を發す。

◎ルーラン蛇龍ケ窟

我輩この日の扮装は、メノコより到來せる高尚なるアッシを着し、上に熊の皮の大外套を纏ひ、背に二升の白餅と、三斤の豚肉と、赤垣式の德利とを包みたる大風呂敷を斜に結び、右手に重量九百匁の鐵製の長杖を携へたり。道未だほの暗く、見上ぐる空には凍るばかりなる銀漢闌干として萬顆の球の垂れたるに似たり。ヤソケ山道に出でける際、予を蜂須賀式の曲者とや見誤りけむ、三個の豪犬吠えに吠え、雪を捲きて疾風の如くに驅け來る。勁敵御座んなれと鐵の長杖を振り上げて其の中の最も巨大なる猛犬を骨も碎けよと打擊すれば、悲鳴を上げて毬の如く疾驅し去り、他の二個も到底敵し難しとや思ひけむ、續きて逃げ去る樣誠に小氣味よし。

ボロナイ峠にさしかかる頃、遠くハッタリの空少しく紅くなりゆきて、金輪將に七色の彩雲を吐かむとせり。寒冷なる曉風は東より西の方へ吹き過ぎるよと見る間に、波頭雪よりも白き、淼漫たる日本海の夜は今明けむとする也。

行くこと十數町、峰勢咄々天に迫らむとする大澤山の絶嶺に達す。見上ぐればゴキビル峠の瑠璃峰、凍雲を刺して欹ち、見下ろす千仞の谿谷雪は數丈の樹木を蔽ふて針程の枝をも餘さず滿目唯々一白也。谿谷へ下る道を搜索徘徊すれども見當らず、若かず、笹の曲藝を演じて下らむにはと、乃ち四邊に茂れる丈餘の熊笹を掘り來り、束ねて風流なる橇を製し、是れに我輩の尻を載せ兩脚を伸べ、大聲一呼山谷を震はすよと思ふ一刹那、怪風一陣、雪を捲きて千仞の谿底に滑り下りぬ。其の愉絶快絶、到成人間の製造しし文字にて形容すべき範圍のものに非らざる也。されどこの曲藝、危を愛する豪傑にあらざれば斷じて行ふべからず。歌がるたに憂身を窶し玉ふ公達等が、そは面白しなどと思惟して、この雪滑りを演じ玉はゞ、生命は亡きものと承知召さるべし。

◎ルーラン蛇龍ケ窟

谿底に憩ひ一腔の英氣を吐くこと霎時、ふと左に欹つ巨巖の傍に熊糞點々たるものあるを認む。近寄りて仔細に檢するに、糞悉く凍りて石の如く、四周には盆大の足跡明かに印せるを見る。思ふに巨熊去りてより、さのみ時刻の經過せざるものならむ。左して海濱に出で、猿の如く輕捷に岩塊を跳ね行くこと二十有八にしてルーランの門戸に入る。

◎ルーラン蛇龍ヶ窟

（三）一頭巓を越えて又一頭巓

先づ膽驚く。氷を塗りつめたる高さ三百尺、長さ數里の絶崖は海に枕して聳立し、殆ど氷城の壘の如き一大奇觀なるに、只疑ふ、テラ遊星上隨一の巨瀑ナイヤガラの氷結して我がルーランの海濱に湧出しにはあらざるかと。眼を轉ずれば澎湃と狂ひ激する波うち際に散在する幾千百の怪巖奇礁、皆清淨たる氷の鎧を纏へる有樣は、宛ら寧樂の大佛然たる巨僧が、白衣を着し、大擧して此處に法會を營むものに似たり。是れよりチャラッナイの濱に行かむには、是非ともこれ等氷造の巨僧が頭上を渡らざるべからず、乃ち鐵杖を揮ふて氷塊を粉碎し、以て足場を作り、蝸附して躋登す、足屢々滑達して身を怒濤の鬼に化せむとす。一頭巓を踰えて又一頭巓、忽ち上れば忽ち滑り、一歩一悚、骨幾度か驚き流汗瀧の如く、うたた人間の冬を忘る。

既にしてチャラッナイの濱に達す。仰げば有名なる廻廊、前日來の大吹雪に埋もれて僅かに其の欄干のみ現はるるにより、漸く其の所在を知ると雖も、容易に攀登すべくもあらざれば、斷崖千尺の下、常に奔雷の響を發する怒濤の油斷を窺ふて、

脫兎の如く此の難關を過ぐ。過ぐれば即ち浪靜かなるルーチャベの磯。忽ち見る、數百の朱蟹、人間の近づく音を聽き、狼藉として戟を揚げ沫を吐きて皆逃げ去るの容姿甚だ愛すべし。此の邊海色の風光頗る佳也。遙望すれば白皚々たる石、後、膽三州の諸山、石狩の碧灣に環拱起伏して銀浪の湧くが如く、右の方長鯨の浮ぶに似たるシャコタンの盡頭、水は直ちに馳せてシベリヤの雲に入る。

（四）鐵杖を揮ふて探る蛇龍ヶ窟

斯くて午後一時、プトシマナイの蛇龍ヶ窟に着す。

果せる哉、呀然たる巨口呑吐の潮水を悉く氷結せしめて、宛然鐵板の如し、試に雙手力をこめて、醬油樽大の岩を拋てば、氷面平然として毛筋程の龜裂も見せず、却つて岩の二個に破れたるを見る。企足して洞内を窺ふに氷は餘程奥の方までも張りつめたるが如し。裸石忽ち小兒の如く雀躍し、獨語して曰く『神秘靈怪の魔境、蛇龍ヶ窟、今將に汝が化けの皮を引きむさくれむず。』と。直ちに鐵杖を突き鳴して洞内に入る。昏黑漆の如く、常闇なること古往將來幾萬歲、長へに日月の光達せざる

◎ルーラン蛇龍ヶ窟

洞奥、果して何者か潜める?!

進むこと百歩許りにして洞は左に曲る。燭を點じて前方を睨むに、潮水漸く盡き小石交りの沙汀ありて前途尙ほ奥床し。浮き世の水と、鬼界の地との接觸點を跳び越して汀を歩むに、石は鑿々として聲あり、森寂の氣凝つて一味陰冷の腥風を生じ撫でて予が鼻を驚かす。忽ち頰を掠めて去るの怪物あり、冷かなること氷の如く、鋭きこと刃の如し。蓋し岩燕の飛び去りし也。

（五）芳醇を鯨飲す洞奥の庭

此邊の處にて食事を爲すは甚だ妙なるべしと、幸四邊に樹枝あるを（波に運ばれたる寄り木）山の如く集めて火を點じ、背上の大餅を下ろし豚肉を炙る、餅を嚙り豚を食ふ已に趣味津々たるに、尙ほも赤垣式の德利を口にあてて瀑布の如く流るる正宗の芳醇を鯨飲す、豪氣昂進して禁ずべくもあらず、即ち滿胸の巨音を發し鐵杖を揮ふて演舞す、焰々たる猛火鬼魅魍魎の狀をなせる周壁の岩面を照らし、熟視すれば諸皺皆動き躍々として予が演舞に參加するかと疑はる。

（六）燐光閃き怪蛇躍る

破天荒の晝飯終るや、再び洞奥に向ふ。

忽焉として前面暗黑の裡に怪光現る、其の光青色を帶びて大さ拳の如く、暫し佇立して凝視するに、怪光は肅として其の行衞を失ひ、微かに物の水中に落つるが如き響ありと見る間に、又々突乎として怪光は暗黑の中に漂ふて再び影は消え、寂寞たること舊の如し。さては蛇龍の棲めりてふ洞奥は間近しと覺ゆるぞ、彼の燐光の如き怪しき火の玉は予を誘惑せむと欲する奸手段にはあらざるなきかと、尙も前進せむとするに、兩脚は磁石の如く堅く地の面に吸ひ着きて一歩も動かずなり、心臟の鼓動は半鐘を亂擊するが如く、上下の齒はカッ〳〵と合擊し、全身絶大の恐怖に襲はれしものの如し。これではならずと氣を取り直し、勵聲一番すれば、其の聲洞奥に響き行きてゲタ〳〵と魔の笑ふが如き反響す。光の數は益々增加して二のものの三となり、三のもの五となり、五のもの分れて八となり、八のもの離れて十二となるの奇觀は宛として不知火を看るに異らざる也。

折角此處まで來りて、其の何物なるやを探究せで歸るも口惜しと勇を鼓して五六歩進むに、忽ち驚く我が右脚は深泥の中に落ちたるが如く意識して朽木の如くに倒れたり。右手を伸して徐ろに脛を檢するに、氷の如き冷やかなる粘質のもの指さきに觸れて氣味惡るき事限りなし、燭を探り點火して四周を見るに、噫！何等戰慄すべき無熱の地ぞや!! 怪魔の不平、海魅の怨を藏せるかと疑はるる巨大の池は、物凄きまで暗褐色の光を湛え、風もなきに小波は予を嘲けるが如く波頭を騷せて、洞奥の方へと寄せては返し、返しては寄せける也。

尙も凝視すれば、物あり！物あり!! 太さ青大將の如く、黑き二尺餘のものS字形に水面下三寸の處に遊泳し、或るものは沒し、或るものは浮び、或るものは何物かを追ふが如く、或るものは嗽喁するが如く、千態萬狀規矩あるなし。忽ち更に物あり、大いさ盆大の怪魚鱗を閃かして遊泳すると認むるや、俄然として水底より以前の長き怪物湧き出でて怪魚を追ふこと電光の如く、忽ち潑として怪魚は身を倒にして空に躍る、其の躍るや以前に等しき燐光暗中に閃き蕭として聲あり、ここに於て

予は初めて怪光の疑問を解きぬ。乃ち獨語して曰く『怪しき光は池底に棲息する小魚が、海蛇？の難を避けむとて水面上に躍らむとする瞬間、全身の鱗は燐光を發するもの也』と。

成程これては蛇龍ケ窟とは眞實名詮自稱也。いて更に前進して秘密の底を敲きくれむと前路をすかし見るに、既に陸地は盡き、加ふるに是れよりは洞奥狹長となり、盥の如き器具に乘りて行くにあらざれば、到底前進すべくもあらず。さて如何がはせむと暫し躊躇する折しもあれ、倏忽として洞口の方に當り鞳鞳の聲を聽く。さては神靈予の縱ままなるを嫉み、風師に命じて海波を激蕩せしめ、以て裸石を此の洞内に閉塞せむと欲する奇謀と見えたり。道の我輩も濤の大敵には勝ち難く、遂に歩を轉ずるの已むなきに至りぬ。

靈怪將に佳境に入らむとして此の厄に遭ふ。裸石の殘念さ加減、海魔も推したか。

（七）斷崖を震はす奔馬の怒濤

洞口に歸り見れば、果然!! 浪は奔馬の如く暴れて斷崖を震はし、粉の如き吹雪は

◎深夜ルーランを踰え

狂ひに狂ひて咫尺も辨じ兼ねたる大修羅場。幾度か此の窟に宿らむかと躊躇せしも。何ッ糞と。猛然勇を鼓し。この重圍を破りて歸途に就く。

ポンピラの坂に來る頃。前路より四五點の提灯。今は明るく。今は滅せむとして。吹雪に苦しみつつ來る人語あり。近よりて見れば皆顏を知れる鄕が人。予が歸りの餘りに遲きを案じての厚意と知られたり。

深夜ルーランを踰え

裸石。ルーランの千疊ヶ窟に宿り。孑然として獨り詩味に耽け。轟轟の聲に俗腸を洗ふこと爰に數日。轉た三界の火宅を遁れたらむ心地し。自ら神に近き人と化しぬ。されど赭く禿げたる巖山三重の彼方の浮世に殘せし糟糠の妻は。予をして永世この窟に宿るを許さずして。日々彼女が最も親密の交際を結べるシャマニ。メノコに托し。歸を促し來ること甚だ嚴格也。

◎深夜ルーランを踰え

弦月プトシマナイの一角に懸りて。縹渺たる蒼波皆閃々として銀を走せ。金を碎き詩人の所謂『瀧々隨波千萬里』と謠ふの良夜也。いて此の月のあかさに。ゴキビル山道を踰えて深山幽谷の夜景に接觸し。兼ねて歸宅の途に就かむと言ふ。一舉兩得の野心を起す。

素より一簑一笠の身の。何の造作もなく。瓢々乎として住みなれしスウヰトホームを拔け出づ。時は岩燕の夢圓ろき午後の九時也。

斷崖の下。數百の奇巖怪石皆黑うして。宛も海魅の群をなして此處に集會し。何事をか議するに似たり。巨巖の間を盤廻すること一時間餘にして。有名なるチャラツナイの廻廊に出づ。翼なきものは斷じて躋攀すべからざる絕崖の表に。夜月にもしるき蜿蜒長蛇の廻廊。歩み度れば身は天風に乘じて雲上の閣に登るの思ひあり。廊漸く盡きて傾斜稍緩慢なる高原に入る。滿境の群嶺沈々として聲なく。其の靜寂さ加減。歷史以前の夜もかくやと思はる。

月は今彼方のポンキヌプリの直上に昇りたれど。綿の如き廣き雲は。將に浮動し

◎深夜ルーランを踰え

來りて月を呑まむとす。月の隱れざる中に路を急がむと。左の小徑に入れば、虎杖。タランポ。熊笹等の榛莽肩を沒し、漕ぎ分くる毎に宿れる冷露骨に徹す。斯て進むこと約三町餘、辛じてチトカニの絶巓に達す。海を拔くこと二千八百尺。四周の奇峰を跪座せしむること十八座。騁望甚だ壯快。空晴れたる晝は遠く札幌を遙望すべし。俯して下瞰すれば、千仞の深谷萬古斧鉞の入らざる密林也、谿底丈餘の巨熊、五丈の大蛇或は棲息しつつあらむ。

四邊荒涼たるに、風がもてくる怪禽の聲は一層の凄味を感ぜしめ、轉たこれ魔の世界ならざるかを疑ふ。噫。靜肅。寂寞。幽邃の氣。何ぞ然く予を嚇するの甚だしき、予や胸中一塵の邪念忘想なく、寂然として身は直ちに涅槃の境にあるが如し。

月は彷彿として微雲の中を行き。ドクロカモイ巖の影は婆娑として眼前に落つ。忽ち巨熊の咆哮する聲、般々として山谷を震はして聞ゆ、裸石亦之に應ぜむと、腰に帶せる尺八を拔き。歌口を潤して管も裂けよと吹けば。獸聲と竹聲と相和し。悽冷の音は夜の重き空氣を煽りて。一種の凄音乾坤に滿ちぬ。

天近うして雲霧の徂徠すること頗る快速。月は再び黑雲の懷に入りて、世は全く如法闇夜となり。小夜嵐熊笹渡る音は怪魔の囁きに似て。寂寞の氣侵々として襲ひ。予を幽瞑界に誘はむと欲す。平常呆るる程奇を好むの裸石も。あまりの恐怖さに。唯譯もなくワアーと二三聲叫べば。其の聲山を渡り谷に入り、木石皆應じ、妖鬼怪魔の徒啞然として大笑するものの如くなるに益々恐怖心を增長し。四邊の黑き巖も皆躍然として舞ふが如くに見ゆ。これはたまらずと奮起しャソセ街道に出てむと。石を蹴り小樹を倒し。闇を衝きて疾風の如く下る。草を漕く音、樹枝の折れる音。岩石の墮落する響は正に山魈石魅の類を驚かせしめしや疑ひなし。

漸くにして瀧の澤に出づ。此處よりは極めて安全にして極めて慣れし道也。暗を横ぎる栗鼠と道を爭ふて村端に着きしは。鷄鳴曉を告ぐる頃なりき。

◎深夜ルーランを踰え

姫蔦の紅葉衣を裸石哉

倉田松濤

ルーランの蛇

(一) 大トコタンの概觀——蛇類のパラダイス

ルーランの地に大トコタンあり。(トコタンとはアイヌ語にして蛇多く住むとの義也)遙かに天鹽山塊の餘脈を受け、蜿蜒として濱、厚二郡の境上を走せ、此處に怪魔の行列を爲すが如き奇峰怪巒を起し、萬峰悉く火成岩の肌を露はし、日本海の怒濤を蹴つて天を穿つこと二千尺。峰頭は常に白雲凝つて水晶の如き清列なる水を湛え、古往將來幾萬歳。細微の光明だも透徹せざる千仞のドン底、皆蠢々然として動ける蝮蛇、烏蛇、糞蛇のパラダイス也。

予一日偶然としてこの魔境に入り、數萬の猛蛇に包圍され、奮鬪群蛇を擊ち破りたる壯絶なる經歷を有す。以下記述する所のものは乃ちそれ也。

(二) 踏み迷ふルーランの幽谷——絶谷を警邏する猛熊

時は何時なんめり、西暦一千九百十年六月五日『かのとうし』午後の二時。處はラフ鮫住むてふ石狩川より北の方八里の山險、名にし負ふチャラッナイの棧道にて道を失し迷ひ入りたるは、蝦夷アルプスの稱あるルーランの幽谷、右も左も峰も尾も、千仞の絶壁蹠然として晴れ渡る紺碧の大空を摩せるを仰ぎ、攀ずるも這ふも、到底人類の力にては絶巓を越えて棧道に出づべくもあらざるに嘆息し、奈何がはせむかと暫し思案の頭を練る。

滿峽の群山沈々として聲を收め、怪鷲の栗鼠を劃く音、ピリリと予が腸に響く。神が鬼を役して彫刻せる絶壁の表は、自ら怪魔の如き面貌を呈し、再視すれば笑ふが如く、嘲るが如く、怒るが如く奇觀人を醉しめむとす。僅に壤土を保存せる岩表には、北海特有の馬鹿蕗生えて其の大さエンバネスの如く、其の間を點綴せる黒百合の花は寂しき媚を呈し、たとへば妖魔の精、凝つてこの凄冷なる花と化せしにはあらざるなきかと疑はる。

四周の靜寂さに、心身澄みて氷の如く、無限に深呼吸をなせば仙骨のメキ〳〵太

るが如く意識す。されど際限もなく創世紀時代の世界に似たる此の幽谷のドン底に豪嘯を續けて僊仙人を氣取り居らば、絶谷を警邏する猛熊の一喝に逢ふやも知れざればとて、太き自然木のステッキを突き鳴して幽谷の東へと進む。

（三）知らずや此處北海の大魔領——脚下一面蛇の海

忽焉として雲外より聞ゆるラッパの聲あり、耳を澄まし且つ手を翳して音する方を見上ぐれば、劒戟を列ねたるが如き南方の峰に、袋に似たる物を背負ふて動ける一個の旅人らしき影見ゆ『熊を驅逐するラッパの音、背負へる袋、ははあ讀めたり。彼は郵便遞送夫なり、さらば道は彼の峰と覺えたり。』と、乃ち奮然として起ち、紫褐色をなせる絶壁の肌膚に蝸附し、繩の如く垂下せる葡萄蔓に縋り辛じて山道に這ひ上り、遞送夫の辿り行ける方向を背にし羊腸の山道を南へと縫ふて進む。

須臾にして岩松疎らに生えたる無名山の絶嶺に達す。バロメートルを以て高度を測るに、此の地、海を拔く三千五百尺、前は直ちに狂瀾傲れる淼漫たる日本海、水は遠く高麗、靺鞨の雲に迷ひ、左は予が今より二時間以前に、仙骨を養ひし絶谷を

下瞰す。ドン底暗々として大さ井戸よりも小也。

黑き岩に、白き斑紋ある奇巖の一角に腰を下ろし、敷島を拔き、紫の煙を吹きて人類の往還稀有なる棧道の寂寞たる風物を眺む。

俄然として臀のムジ痒くなりたるに驚き、脫兎の如く飛び上りて後を顧みれば、寒毛林立す。何處よりか湧き出でけむ、脚下は一面の蛇!! 初めて知る、曩にカスリの如き巖と見しは、蛇の大塊なりしことを。

看よ〳〵、卷きつ、躍りつ、匍匐つ、狂ひつ、或物は繩の如く、或物は羊腸の如く蠢々然として友を呼び、類を集めて爬行せる態の氣味惡さよ!! あゝ何ぞそれ蛇の多きや!! 知らずや、此處こそ即ちルーランの大魔領、大トコタン也。

呆然として靜かに蛇の狀態を觀ずるに、長さ孰れも一尺より三尺に及び、扁平なること飯篦の如く、背は一面に黑色にして白き斑紋を有し、頸極めて細く、豆粒よりも小なる鋭き眼光の底には冷やかなる凄氣を藏せる也。思ふに其の身軀の扁平なるは、岩塊を爬行するに便せむが爲め、白き斑紋を有せるは、自己の住める火成岩

の色に擬して、猛鳥の難を避けむが爲め、頸の細きと、眼の鋭きとは、危き絶巓にあるの故を以て、常に左右を顧みて警戒するに便せむが爲めならむ。

感嘆す、造物者の厚き惠みは、かゝる姿醜き蟲にまでも及べることを。

（四）寒毛林立——蝮蛇の大群

人肉の香を慕ひ來るにや、或は岩塊の間より、或は窪く水を湛えたる岩の皺より、集り來れる大中小蛇の數々、今や幾千とも知れざる程となりぬ。マゴ〳〵なさば蛇の大群に屠られて了ふべし。いてや片ッ端より叩き殺して呉れむと、携へ來れるステッキをうち揮り、力を込めて撲殺を開始す。未だ曾て人類の迫害を知らざる蛇の群は、この降り湧けるが如きシタタカ者の我輩が襲擊に遭ふて驚動斜ならずして反抗する暇を失ひ、ノタクタと銀色の腹を上にして、死蛇累々異樣の臭氣を發しぬ。

附近の蛇、我輩の勇に辟易し、既に其の影を失ひたりと北叟笑を洩す瞬間、こは何事ぞ、白刃の飛ぶが如き現象空に現るるよと見る間に、斑なる蛇は戰慄すべき蝮蛇の一群を誘ひ來り、鱒の如き鋭氣と、モルヒネの如き毒氣を吹き、得意のカマ首

を上げて、予を中心にグルリと包圍の陣を敷きたり。『む、この蟲けら奴、その毒舌を我輩の身軀に觸れて、人間樣の生血を奪取せむと欲するのだな。宜しい我輩にも考へがある』と、咄嗟の間に例の糞度胸を据え、こちらよりも大氣焔を吐きて、まづ南の方の一群を粉になれよと電光の閃くが如くに打撲す。何にしろ、俎は鐵よりも堅き火成岩のこと故、忽ち數百の蝮蛇の身體は刺身の如くに寸斷され、壯快極まりなし。されど熟視すればする程蝮蛇の群は湧き來りて、殆ど際限を知らざる也。撲殺する毎に氷の如く冷かなる血液の飛沫は、顏面と言はず、衣服と言はず、雨の濺くが如く降り掛り氣味の惡さ加減お話になつたものにあらざる也。

（五）山妖？狐狸？——あらず、小國民

道の我輩も是れはたまらずとなし、ソロ〳〵尾を捲き掛くる折しも、密雲鎖す瀧の澤の峰上に、蟻の列なるに似たる無數の人間現はれ、一齊に『箱根の山は天下の嶮。萬丈の山、千仞の谷。』と高聲に謠ひつつ、今し山道を轉回せむとする也。山妖か、但しは狐狸の類かと、聊か心中疑惑を生じ、一方の蛇群を打ち破りて、稍蛇の

疎らなる巖頭に立ち、更に雙眼鏡にて觀察すれば、豈計らむや、蟻と見しは數十の小國民にて先頭に立ちたるは引率の教員と覺しく、鼻下八鮮明にレンズに入る。『何處かの小學校の遠足だな。よくあんな處へやつて來たものだ。』と感心しつつ、ふと思へらく、あの生徒さんの力を借りて、この蛇を退治して貰はむと、蟲のよき考へを起し、奮然として約二十町餘の地點なる峰へと走りぬ。

突如としてアスナロの藪より予の姿の出現せるに駭然たる兒童を尻目にかけ、ズカ〳〵と引率教員の眼前に進む。

『ヤツ、裸石君！意外ですなあ、君がこんな處に居らうとは。』

『ヤー、これは北浦訓導！』

奇異なる思ひに眼を光らせゐたる生徒は、先生と予との間投詞を交はす對話に耳欹てて、『探檢世界。裸石。熊』などの低語する聲頻りに聽ゆ。北浦訓導はこの地より二里を去る、アッシ村高等小學校の先生にて、予と顏を識れる間柄也。

（六）豪快なる蝦夷ッ子——征蛇將軍

予は今トコタンにて蛇の大群に包圍されしことを告げ、君の生徒の力を借りて一疋も餘さず征伐したき由を演說すれば、

『成程、そいつあ面白い。』と快諾せられて、直ちに生徒に對し、嚴格なる口調にて

『汝等は今裸石君のお話になつた事件を聽いたか。ほらあそこに劒のやうな山が三つ聳えてゐるだらう。其の中の一番高いのが先日理科の時間に敎へた、有名なトコタンだ。それで今から裸石君に隨つて彼の峰へ登り、蛇の奴等を悉く退治して來るのだ。汝等の中で、若し行きたいと欲する者は手を擧げて見ろ、先生も行くぞ。』

さなきだに事あれかしと待ち構へたる兒童、騷ぎ盛りの十五六、而かも北海の深山や荒磯にて熊の吼え音に身を育ちたる荒くれ子供、蛇を見ること繩の如くに感ずる豪快なる蝦夷ッ子、今や先生のお許しの出でたるに何ぞ躊躇やすべき、七十八名の生徒は兩手を林立し、足拍子をうちて躍り狂はむばかりに喜ぶ。見る〳〵兒童は相談せしかの如く、其の邊の樹木の枝を伐り來り、今にもトコタン目がけて逸走し去らむとす。

予は聲を嗄し。制して曰く。

『君等も知つて居らるる通り。蝮蛇に咬ひ附かれると生命はないのだから。若し過ちがあつては。僕が君等の先生や父兄に對して申譯が立たぬ。だから厭でもあらうが。すべての行動は決して自分勝手を許さぬ。必ず僕の命令に隨はねばならぬ。了解りましたか。』

『了解つたです〳〵。』と云ふ聲急霰の如く生徒の口より迸り出づ。

さらばとて。征蛇將軍裸石大阿闍梨は。黑旋風李逵に似たる性格を有せる。七十八個の小國民と。一個の老先生とを卒へて。巨龍の昇天するが如き隊形を作り。トコタン峰へと引き返したり。

（七）奇絶!!怪絶!!!蛇の山。毒血の川

難嶮なる山路に熟せる。輕捷猿に類せる生徒は殆ど平地を走るが如く。忽ちトコタンの九合目に達す。裸石一喝して曰く『止まれ!!』更に先生に對つて『蛇の居る處は直きこの上ですから。生徒を以てこの峰に鉢卷をさせて下さい。』先生は何とかと言ふ號令を掛くると同時に。七十八名の生徒はグルリと九合目を取り卷きぬ。それ進め。なぐり殺せと叱咤しつつ。決河破竹の猛勢を以て一氣にトコタン山巓をなぐる。そら縞蛇が行つたぞ。蝮蛇だ谷へ叩き落せと口々に罵り騷ぎ。數十本の太き棒の上下すること。宛全農家の麥を叩くに似。棒に絡りて碧落に飛ばざるる烏蛇あり。谷に蹴落さるる蝮蛇あり。奇絶。怪絶。豪絶。愉絶禁ずべくもあらざる也。

かくて包圍の圈は直徑約八尺に及ぶ頃。絶巓にありて餘命を維持せる蛇は全滅し。死せる蛇は巨大の山を築きぬ。未だ死きらぬにや。肉を動かし。尾を掉はし。四周の岩面ヌラ〳〵せる毒血の海と化したり。

幸にして一名の負傷者もなく。勝利の聲を絶叫したるは午後の六時半なりき。兒童の歡喜譬ふるにものなく。中には是れより深山に分け入り。熊の子を捕獲したしと志願する者さへあれたれど。日既に沒せむとする時なればとて。一同歸村することに決す。先生は蛇の見本なりとて。死せる蛇の山より。最も肥大の奴を三十許り楡の皮にて束ね。枝を通して生徒に擔かしめらる。予も同じ方向に行くこと故。道

◎カナ蛇の奇

連れとなりてトコタンを發す。

偶然とトコタンの蛇を退治すと雖も、其の退治せしはトコタンの全部にあらずしてほんの一小部分に過ぎざる也。

カナ蛇の奇

カナ蛇は奇なる動物也。

初夏、蛙の子肥ゆる頃より、溪流細る秋の暮かけて頻りに出でて山野を匐ふ。

白雨一過して滿眼の新綠戰ぎを競ふの時、出でて里道を漫歩すれば、土色の尾を長く曳けるカナ蛇は、名も知れぬ雜草の間より走り出でて人と道を爭はむとする也、一喝ステッキを揮へば、カナ君自ら身を寸斷し、潑溂として空に躍る。四邊沈默に歸するに至れば、頭、胸、尾など皆叮嚀に整頓し、舊に復りて暫し低徊し、聽て思ひ出したるが如くコソ〳〵と藪中に姿を沒する也。

カナ君の身は是れ電氣の凝結體歟。

北海の自然と人

濃畫の奇燕

◎濃畫の奇燕

（一）北海有數の險道——趣味深き哀史

北海有數の險道として、古より旅人の心膽を寒からしむるは、南に雷電（らいでん）、北に增毛（ましけ）の兩樓道である。そして電雷峠の關門には、一の趣味ある說話が附帶してゐるが

如く恰も增毛峠の關門にも、型を同ふした物語が附帶してゐるから面白い。

雷電の說話とし云へば、北海道と云ふ觀念に冷淡でない人は皆知つて居られるであらうが、增毛の方の物語は少數の人を除くの外、憚りながらお知りにやなるめえと信ずる。そこで、あたら趣味淺からぬ珍話を、自分と少數の人だけが味ふてゐるのは何だか罪が深いやうな感じがするので、世の中の人にも分けて聞せたいと言ふ。誠に殊勝な佛心から御紹介申す次第。どうか次の行から刮目して御閲覽を願ひたい。

前座の長口上は御退屈の基、いざや場面一變眞打正座までへと控へさせます。

(二) 衒然たる一大洞窟——紅頭の奇燕

抑も、增毛山道の關門と謂ッバ、北海の首都、札幌を北へ去る二十里。ゴキビルと云ふ落寞たる一寒村の西北に儼然として聳えてゐる山險を指すのである。此處は此の山道の南の下り口、アッタ村から四里の行程で、其の間、道は幾多唐畫風の奇峰の頸を縫ふて開鑿されてある。世にゴキビル峠と稱するのは、即ちこの峻嶮を云ふのである。旅人の多くは山險の難と、猛熊の爪牙と、猛鷲の嘴と、毒蛇の舌とを

恐れて、多少にても紳士素を加味した人物は皆、舟で峰下を御通航召さるのである。濃霧の村、戸數簇々數十家、住民すべて春の鰊で生計を營むでゐて、たまさか旅人の宿を乞へば木枕蒲團、一夜の宿を快諾してくれる。

宛も此の浦を潛ぎ出でむとする南に、高さ五十丈餘の一大峭巖が、日本海の怒濤を蹴つて欹立してゐて、頗る豪壯な奇觀である。村人に其の名を問ふと、マッカ岩と甚だ簡明な答へに接する。成程巖の名が渥丹のやうで、眞に其の名に背かぬ。巖を過ぎて、更に血の池地獄の丸木橋を匍匐して行くと、譎怪なる巖脚に於て、衒然たる一大洞窟がある。翹首企足して縱に洞內を窺ふと、怪魔が穿ちた斧鑿の痕の皺文が、いかにも精巧を極めてゐる。洞の奥は物凄い程闇黑で、到底究むることは出來ないが、什麼やら造化の秘密が藏されてあるらしく思はれる。村人の話によると、何でも洞奥には銀髯美しい翁が居られて、光風霽月の夜などには、龍に駕して虛明に遊ぶを見ることがあるさうな。巖面の絕妙なのに、恍惚としてゐると、突如人の顏を掠めて飛び去るものがある、これぞゴキビルの紅頭の奇燕であつて、此の物

◎遠藤の奇燕

語の御本尊様である。

奇異なるは此の岩燕、頭が眞紅なるばかりかは、七百年以前の昔から此のマツカ岩の洞窟に巣を構へてゐて、そして其の飛翔區域が、この洞窟附近を限つてゐるから一層奇怪の觀念を增長せしむるのである。

さて是には聊か仔細のあること。

一日友を增毛へ送るとて、中途此の村で日を暮し、とある民家に一夜の宿を乞ひ、其夜粗朶うれしい爐邊に圓居し、そして此の家の老翁から計らずも奇燕に就て情緒いとど哀れな次の如き奇譚を聽えた。

（三）夜半の警報——戰慄すべき女性

今は昔、建仁の春の暮れとかや、九郎判官源の義經は、兄賴朝の忌憎に逢ひ、逃れ遁れて奥州は藤原秀衡が宅に、暫し世を忍び居たれども、詮議なか〳〵に嚴しき儘、遂に津輕海峽を押し渡つて後志の國に入り、さる酋長の女婿となられたが、素より本氣の沙汰ではなく、一時衆心を得むとの計略に過ぎないので、謂はゞ物騷千

萬なるお婿どんであつた。

既にして廷尉、雄圖勃々禁じ難く、機もあらば此の家を脫出して、胸中の畫算を遂行せむと、只管時の來るを待つて居られた。一夜風雨晦冥の機に乘じて、私かに壯卒を率ゐ、周章して纜を斷ち船の針路を北にむけ、海原遠く船出なされた。

夜半の警報、妻の驚愕、女の一念やはか戀夫逃すべきと、宛も古へ清姫が安珍を追ひしが如く、夜叉に似たる凄き女性は、萬籟絕えたる夜の闇を衝いて、長驅シマキの濱まで來たが、メノコとて矢張纖弱い女ぢやもの、心ばかりは燥急つてゐても、悲しい事には身體が然うは續かなくて、遂に此の濱に挫つて了つた。折から壯卒の一群が歸るに遭ひ、其の由を訊ぬるに、公には我等の嘆願もお聞き入れなく、來年來るとの一言を殘されて去られたと、涙ながらに語り聞せた。蓋し雷電は來年の轉語、これに起因したものであらう。

◎遠藤の奇燕

忍路、高島およびもないが

せめて歌棄、磯谷まで。

も。お伴したやとメノコの悲嘆、日夜ただ泣きに泣きて。遂に一塊の岩と化したといふことである。現今同海濱（後志の國島牧郡）に女郎巖なるものは。其のメノコの化巖であるさうな。

（四）　やまと神の子――吐味波勢の愛嬢

さる程に烟波漂渺たる大洋に。多情多恨の人を乘せたる船は。何れ行衛は白浪高き雄冬の沖に航せし頃。俄かに風浪吠え發して。船は見る〳〵流され。終に此處ゴキビル浦に漂着した。

其の頃石狩川以北隨一の豪酋に。吐味波勢と言ひける者あり。所有ありてゴキビルの山莊に滯在してゐたが。廷尉の急報に接し『すは。やまと神の子。ヨシチネ來れり』と。テンテコ舞をなし。早速判官主從を己のが山莊に導き。美釀珍肴の限りを盡してねもごろに歎待した。

然るに波勢氏の愛嬢にアイヌ民族に珍らしき。秀眉豐頰一目身も魂も溶けむばかりのビリカメノコがあつた。初めて拜顏の光榮を辱ふするシャモ（日本人）の容貌。

而かも。シャモの中にてのニシバ（旦那）たる廷尉殿。勿論ヤンカラフッテ臭き同族のそれとは比較にはならない。人の子の熱き血潮の兎角狂ひ易い鬼も十八のメノコは。あはれ勿體なくも公をラブした。

されど月と鼈。鹽と砂糖程の差ある公とメノコとの懸隔。戀は思案の外ながら。この戀の成否だけは。算盤とるまでもなく。二に八足すの五であつた。そこでビリカの煩悶は日一日と向上し。果ては自己の血を異にせるを嘲ち。徒にシャランペの袖を濡してゐた。

（五）　飛び來る二個の怪物――ビリカメノコの悶死

春去り。夏來り。秋の浦風身に沁むの頃。廷尉には何時しか疲れも癒えたれば。何日まで斯くて在るべくもあらざれば。愈々明日は濱益さして御渡海と決した。此の由を聞ける薄幸戀に惱める。ビリカは什麼な心地がしたであらう。

碧膏を湛えたらむが如き海は。鹽の水よりも靜かに凪いだ小春日和に。廷尉には幾多惜別のアイヌ民族に圍まれて磯近う進む折。老へたるメノコの手に鳥籠を携へ

◎濱雀の奇燕

たるが。公の御前に馳せ來り。恭しく跪きて言ふやう。

『この鳥は。おらが御嬢さんが可愛がつてムる。世界にも稀れな頭の眞紅な岩燕でムんす。今日お前さんが遠い所へ行かしやんすと言ふことを。お嬢さんがお聽きになつて。それては記念に是をヨシチネ樣に上げてくれろと言はしやつたすけえ。どうか取つて下つさろ。』

とて其の鳥籠を廷尉に獻じた。千萬無量の思ひの餞。公にはニコと笑はせられた。

舟は順風に帆を孕むで。矢を射るが如く進航したが。間もなくビシャベツの岬に隠れて見えずなつた。

釣瓶落しと言ふ秋の日は。忍路。高島あたりの峰上に傾きかかつた頃。不思議や沖の空から陸地さして飛び來る二個の怪物がある。形豆の如く小に。速力彈丸のやうと見るまに。忽ち接近し來つて拳程の大さとなり。遂に波勢氏の庭園に落下した。怪しむべし。そは正に今朝程ピリカが公に獻じた筈の。紅頭雌雄の岩燕であつた。

◎濱雀の奇燕

されど。岩燕の歸つて來たのは遲かつた。長へに己が懸想を遂げ得べき望の綱の絶えたるピリカは。今朝公の發せられる間もなく。哀れ春秋長き身を。あたらブシユ（アイヌの熊を殺すに用ふる毒草）を食ふて悶死したのであつた。斯くて奇しき兩個の燕は永く主を失ふたのである。

其後。廷尉には波穏かに濱益村に着せられたものと見え。現今。同郡フトムナイ。原名マリフトフンナイ（饗應の意）には當時の古蹟が殘つてゐる。

何と言ふ趣味深い哀史であらう。自分は唯もう何とも知らず。胸の奥底までも沁み入る樣な感に撲たれて。この一場の物語を聽き了つた。是にてピリカメノコの恩を忘れないで。他國へ飛び得ぬ奇しき紅頭なる岩燕の子孫が。今だに殘つてゐることを明瞭に了解した。

◎本誌の寄稿にして、氏名のみを記憶せるは多々あり、されど余の親しく知れるは、吉田熊次氏と河合裸石君となり。吉田氏には其留學せらるる前、風擧なる教授を受けたる一人也。裸石君とは例のルーランの法窟に一年有餘を送れり、君は文才に富む少壯の好漢也。（露言裸言の一節）……武藤回山……

山賊の一夜

（一）洞山翁＝赤禿の谿谷

銀髯美しき洞山翁。來り訪ふて曰く。頃日來赤禿の谿谷に狸公の徘徊すること夥し汝翁と俱に征伐に出かけずやと。裸石は何でも變つた事ならばやつて見たき男也。それ甚だ珍妙なるべしと即座に躍諾す。

洞山子。さらば今直ちに出征すべしと言ふ。時計を見るに最早午時二時に垂なんとせり。今日は遲し。明朝にせずやと商れば。狸は魔の動物也。夜ならでは出現せず。今宵は月夜（三月十日）好機を逸して臍な噬みぞ。速く疾くと短慮一徹の老翁。崑崙山式の巨頭を振り。嚴として承知すべくもあらざりける。龜の甲よりは歳の功には勝たれず。そんならお伴仕るべえかと妻君に用意を促す。

兩個等しく山刀を腰にし。洞山は特にブシュ矢を携へたり。例の貴重なる赤垣式

の德利。白米は裸石自ら背負ひ。比較的輕量なる。茶碗。箸の如き我樂多道具は。老人の餘德。洞山子に一任す。何とて斯かる仰山な用意を爲すぞ。問ふまでもなく。山の中。谷の底に宿泊する覺悟なるが故也。

グヅ〳〵して居らば日暮るべし。疾驅せずやと叫ぶは洞山翁。それ突貫と言ふのて二個のシレ者は。明鏡の如き氷路を東へと眞一文字に走る。雙眸ライオンを欺く洞山子。其の長き銀髯を亂麻の如く忍路颪に靡かせて疾驅するスタイル。一と際異樣也。一歩々々に背上の我樂多道具の鳴る音。雪路の面白き響。交々相和して奇也。

（二）巨熊の咆哮冷雲を裂く

シペトロ澤（石狩川口より東北七里の山中）に達せる頃。遉に二里の長驅。咽喉の渴を促すこと頻り也。乃ち一農家に入りて水を乞ふに。主媼予等が異裝せるを怪み。呆然として暫くは躊躇せしが。漸にして土間に在る水槽を指さしたれば。勝手に呑めと言ふ事なるべしと其の意を解し。鯨飲して滿腔の鋭氣を吐く。謝して家を出で。左折して進む。凍雲を穿ち。童然として怪醜なる赤禿の氷嶽も。秀麗無限の趣あるペッチャロヌプ

ッの連峰も。玲瓏玉の如き雪衣を裝ひ。げに冬は平等の天地也と。一味の感想に耽りしに。忽焉。唸りを生じて碧落を飛ぶの長蛇あり。顧みれば洞山翁。手にプシュの大弓を持ち。一箭放ち了り。今將に二の矢を番がむとて。弦を滿月の如くに引き絞りつつありし也。裸石一喝して曰く『何ぢや』翁曰く。前山に怪物ありと。手を翳して遥望すれば皎々晶々として表に白光を放てる。ルペシュペ山の中腹に一點黑色の怪獸あるよと認むる刹那。空氣を貫く第二の飛箭は確かに怪獸の背上を掠めたりと意識せるモウメント。咆哮三呼。寒嵐冷雲を驚かしめ。悠々として徐ろに深谷の方へ逃げ去るの面憎き振舞は。正しく北海の家獸熊也。

翁。嘆息して曰く。吾れ未だ壯なりし時。會津の落城に勇敢なる白虎隊を援助せむと。瀧澤の嶺より板垣退助が率ゐ來れる。雲霞の如き官軍に。大弓を張つて百發百中の妙を誇りたりし吾腕。あゝ老へぬるかなと。

暮色漸く迫らむとして。赤禿峰上。白雲二三片徂徠し。鸞鶴の翱舞するかと疑はる今し虞淵に沒せむとする夕陽と煥發し。白雲一變して猩紅となり。再變して燕脂

となり。三變して卵色となり。千變萬化。絶巧絶妙の加減を爲す自然の手腕の大なるを羨み。精力の有らむ限りを盡し。萬斛の繪色を揮灑するも。此の變幻極まりなき彩雲を到底畫くこと能はざる人間の小なるを嘆じつつある間に。彩色の薄衣夢の醒むるが如く消え果てて。群山蒼々として乾坤俄かに薄暗くなりぬ。

(三)　凄絶奇絶人間の仕業に非ず

峰嶂兩側に連亘せる谿谷を辿る。壑底みな千古の樹木。枝幹紛密して此處ばかりは暗夜の領也。仰げは一枝〳〵骨を刺して。寒さを覺ゆる樹枝に降り積れる雪は。宛然大群の銀鳩來りて老樹に蟠れる玉龍の背上に遊戯せるものに似たり。此の邊の地理に詳しき翁は。左せばシャモマイ澤に出づべしと言ふに。唯々として隨へ行く。

山愈々深くして怪禽の聲。恍として梵唄を聽くが如し。歩すること約三町。樹木次第に疎らとなり。身は何時しか四山環抱せる谿底に入りぬ。黄昏の寒威殊に劇しく。蓬々然たる薄刃風穹窿を拂ふて兩個の鼻を殺がむと欲す。

洞山翁。嚢中より獵網を取り出し。大呼して曰く。狸の出づるは此の澤也。今宵の好肴を獲るも獲ざるもこの一舉にあり。汝努力せよと。言ひ捨てて何處ともなく疾驅し去りぬ。予乃ち與へられたる獵網の兩端を樹間に結び。狸敵の來るを待つ。看よ。看よ。ローラー山の中腹より奔馬の如く雪を席捲き。長杖を揮ふて大虛を劃しつつヒユーヒユッと怪しき唸りを發しながら下り來る洞山翁の光景は。宛然惡鬼羅刹の憤怒の牙を鳴らして雲外より降り來るかと訝まれ。其の凄絶奇絶の仕業は殆ど人間以外のもの也。刻一刻と翁の吶喊の聲は增大し來りぬ。凝視すれば翁の前路に當り。何處よりか湧き出でけむ。數個の大兎。驚愕狼狽して道を失ひ。或るものは倒れ。或るものは毬の如くまろび。或るものは雪塊の如くこけつ。漸々と予が戰線の範圍內に近づきぬ。時こそ來れと。予は忽ち風に觸れたる風車の如き活動を始むるや。追たて。追つめ。暴れに暴れたる洞山翁は雷聲一番『和尙裸石其處だ!!』聲未だ了らざるに。三個の兎は早くも生檎られぬ。兩個舞躍絕叫して曰く『已に兎を獲。何ぞ狸を獲ざるを愛へむや』と洞山子二個を背負ひ。予は殘れる一個を抱きて此處を發す。

暮色愈々深く。彼方の連峰漸々と暗黑の中に見えずなりぬ。翁が背上に縛せられたる長耳君。身を藻搔きて奇聲を發すること甚だし。是より谿底兩岐す。左すれば赤禿の斷崖に出で。右すれば左股の澤に出づ。乃ち左に從ふて急步すること二十町ならざるに。一絕崖の下に來る。

夜既に滿谷を鎖して。咫尺も辨ずべからざる也。

(四) 狐啼狸躍の場

奇怪なるは洞山翁。一刻も早く露營の地を選定すべきは目下の最大急務なるに。平素の急性に似もやらで。悠々寬々背上の兎を。己が愛孫にてもあるかの如く。からかふ樣こそ心得ぬ。而かも曆を見誤りて今宵は月夜也と予を欺ける罪さへあるに。

重荷漸く肩を苦しめて。行路難を覺え來る。時に先達せる洞山子の足は俄かに停まりぬ。暗中聲あり『此處だ〈』と。近寄りて闇をすかし見るに一軒の茅屋らしきものあり。翁說明して曰く『此家こそ今を去る三年の昔。一夜巨熊に襲はれ。無

惨一家三人悉く爪牙に罹りて死絶えたる空家也。今宵予等は此の茅屋に宿借るべし』と。そは甚だ快也と。雪を排し。鞠躬如として入り見れば。主なき荒屋何日しか狐啼狸躍の場となり。雪は全屋の過半を埋めて見るに忍びざるの頽廢也。

忽焉として北方の森林とも覺しき方に當り。戰慄すべき一種異樣の物凄き叫び聲斷續して起る。彼の聲はと翁に訊けば。

『あれや熊さ』と平氣の者也。

『然し熊としては聲がチト變挺だネ。』

『歳を經た奴は皆なあんな聲を出すものぢや。』

『この小屋へやつて來るのぢやないかネ。』

『やつて來よつたら。プシュてャッッケてやるさ。』

と。笑ひながら戸外へ出て行きぬ。

（五）駭然として驚く爆發の音

聽て翁は枯れ枝を伐り來りて點火しぬ。一大猛焔茅屋將に烏有に歸せむとす。兩

個各〻背上の厄介物を下ろして嚢中より鍋を出だし。米に雪を和して火焔に懸く。赤垣式の德利も亦正體を現しぬ。洞山翁は土間に在りて三羽の中。最も肉肥えたる一を割きつつあり。程なく飯も出來。酒も温り。兎も炙られぬ。怪しう物狂るはしき二個の山賊的人物は圍爐裡に相對して。牛飲馬食の宴を張らむと欲する折しもあれ。倏忽。耳朶を劈く一發の巨聲は屋内に轟く咄嗟。一團の巨火は洞山が臍下三寸の要塞地帶に飛び込みぬ。駭然として膽を消したる翁は。跳び上る途端。不幸にも梁木にて滑らかなる頭をシタタカに撲ち。見る〳〵馬來半島大の長き瘤は湧き出で。見るも氣の毒の程也。ああ珍事〳〵。僅か數秒の間に於て此の由々敷大事を惹起す。さては山靈天狗の徒。予等が此の家に宿るを豫知し。爐中にダイナマイトを忍ばせ。仙山更闌けて。萬籟聲を收むるの時に當り。俄然爆發せしめて。予等を屠らむ謀略の計と推したり。いでや化の皮をヒンむきくれむずと。爐の中點を搜索すれば。何ぞ知らむ。何時か火中に紛れ入りけむ。密閉せるプシュの藥瓶の破裂せるものならむとは。翁頭上の瘤を靜かに撫して曰く。赤禿峰下に宿り。期せずして奇

◎山賊の一夜

峰の標本を得と。哄笑屋を震はす。

斯て淋漓暴啖の晩餐は始まりぬ。餓腸に注げる大白忽ち醉ひを發し。兩個の山賊渾身朱に等しく。翁の如きは一本の角さへ生ぜしことなれば。宛として赤鬼に似たり。豪懐大に發揮し。洞山まづ立ちて跳躍す。裸石亦足拍子を合せて之に應ず。既にして兎肉盡き。赤垣式の德利も横はりぬ。されど山賊の活動は益々猛烈。洞山虎の嘯くが如き聲を張り上げ『音に聲きし我々は。千人餘りの其中で。極印打つた首領分。太へか布袋か盗人の。腹の大きい膽ッ魂』と怒鳴れば。裸石ドラ聲もて『ならば手柄に搦めて見ろ』と絶叫するの大騒亂。茅屋爲に動搖して。今にも倒潰せむかと疑はる。

漸にして疲勞を感じ來るや。二個の山賊はバタ〳〵と板敷にうち仆れ。死したる兎を枕とし。梁山泊に遊ふべく眠りに入りぬ。

無緣の濱

◎無緣の濱

（一）戰慄すべき波動

鮭漁に名高き石狩川の右岸。ワカオヒ村より川に沿ふて。沙白く。玫瑰の花紅き軟路を遲遲として西へ二里程進むと。忽ち荒涼たる砂濱に出づる也。南。石狩口より來れる旅客も。北。厚田口より來れる旅人も。一度此の濱に差しかからば。必ずや一味蒼凉凄酸の情に魅せらるべし。

そは四邊の風物極めて物寂しきと。海の波動が極めて格段なる音調とを傳ふるが故也。長さ十里の海岸線を有する厚田郡一帶の海面の凪ぎし日にても。未だ曾て此の濱の海が平靜なりしことを見聞ししことなし。而して其の波動は。斷じて浮世にては聞く事能はざる戰慄すべき音調にして。宛も海魔水妖の群をなして。此の海底に集會し。絶大なる聲を發して哀歌を齊唱するものの如く聽きなさるる也。

◎無縁の濱

洵や此の濱こそ。海に。川に死せる土左衛門の漂着するを以て有名なる無縁の濱也。

（二）鬼哭啾々

チツク臭く。パール臭き當世の男女に言はせたなら。それや潮流の然らしむる所。何も不思議はない。と仰せらるるならむも。さばかりはのたまひ給へぞ。古來より漂着せる老若男女の死人は。實に多數に計上され。そして是等の八分通りは。縁なき佛樣方にして。雨黑く。月なき夜半などには。偶々磯一面燐火低迷して。鬼哭啾々の聲を聽くこと珍とせざる也。さてこそ或は人類の智識の程度にては。容易に解すべからざる何等かの仕業の手傳ふにはあらざるなきかと？を附する譯也。

借問す。幾千の土左衛門諸君。諸君はそも過世何の因。何の果ありて。斯も同じ死の魔手に運ばれて。斯も同じ濱に其の冷たき骸を横ふるのにや。

（三）老法師

今。十一月の暮れ。友を訪ふて石狩町よりの歸るさ。一望寒景蕭條たるシユップ

の沙原に霜枯れの玫瑰を踏みて微吟しつつ進む程に。初冬の日脚は餘程西へ廻りて。諸峰已に雪を頂ける稻穗山に。黄色を帶びたる薄弱の光線を直射し。四邊淋然として鳥の影だに見えぬ。是よりアツタ迄は四里の道程。急がずば途にて日暮るべしと歩む行手に。頭陀の袋に麻衣を纏ひたる老法師あり。伴に行かずやと我に乞ふ。人間と名のつく者ならば。乞食をも道連にする裸石は。何の異議のあらう筈なく快諾す。

法師は歳の頃耳順に近く。永く剃らざる毬栗頭。白七黑三異樣の光澤あり。頗骨ステキに高き底に。キヨロリとせる眼を光らせ。什麽やら木賃宿の爐邊に胡座して常に磐若湯を傾けたまひさうな。鐵鑠たる出家樣也。

君よ。僧になりし理由を語り聞かせずやと云へば。老僧は呵々と大笑して。理由など人に聞かする程の價値あるものでなし。强て問へ給はゞ。唯坊主がして見たさの道樂にて巡錫し歩くまでのこと也と。予は又戯れに。弟子の僧として伴はずやと問ひば。御身の如き洋服など召す人には。瑜珈三密の行はむつかしゝと手を振る。

◎無縁の濱

（四）一視平等の佛眼

此の種の會話を爲しつつ歩むうちに。日は何時しかトップリと暮れて。一痕下弦の月は底氣味惡ろき灰色の雲に蔽はれて。野も山も辨じ兼ねたるが中に。獨り路傍の蘆狄のみは。早くも霜に包まれて氷柱の如く目だちて見ゆ。耳と鼻とを殺ぐが如き夜風は吹き荒み渡りて。老法師と予とに幾度か蹴を促しぬ。

暗の中を流れ來る波動の旋律は。寒冷なる空氣を傳ふて。歩一歩と明瞭に予が鼓膜に響きぬ。物凄き無緣濱の波動!!と意識すると同時に。予はヒタと僧に寄り添ふて。無緣濱の奇しき物語をなしぬ。法師は或る感想に撲たるるものの如く熱心に聽きゐたりしが。聽て話の終るや。低聲佛名を連唱し。

『あな哀れにも。奇しき物語を聽くものかな。濱に出でなば。一遍の回向を捧げ進ぜむ。南無阿彌陀佛。』

げに。一視平等の佛眼には。四海兄弟と見ゆとかや。今この名もなき一杖一鉢の老法師の見かけによらぬ殊勝さよ。

（五）振鈴の響

かくて無緣の濱に來る。唯見る凄然たる黝黑の海は。百萬の魔軍が怒れるかの如く千丈の底より鞳鞳と鳴り吼えつつ。千波萬波猛り狂ふて寄せ來る。偉絶凄絶の光景は海魅空に嘯き。鬼妖躍るかと疑はる。

老法師は海に對して佇立し。徐ろに法衣を整し。さて音吐朗々として經を誦し始めぬ。裸石も亦僧と雁行して立ち。俛首靜かに經を聽く。經聲轟く波動を刻みて一段の凄酸を加へ。坐ろに氣退き。情遠ざかり。悲哀の心油然として發し。娑婆を忌み。寂黄土を樂むの心願身魂を奪はむとす。

月を鎖して微光だも見せぬ黑く怪しき暗澹たる雲の海面を壓迫せるか。或は滿腔の情熱もて誦しつつある。沈痛無限の經の音を憚りてか。波動一時低調となりしを覺ゆ。經漸く進みて。聲愈ゝ澄み。振鈴の響き轉た寂寞の濱に冴えたり。

噫過古幾千歲。三寸の息絶えて此の濱に漂着し。身は冷砂の下に埋れたる。蓋世の英雄も芙容の美人も。あはれ。今宵の讀經。そもいかに聞きしや。平常物に頓着

◎無縁の涙

なき裸石も今宵は悲痛の涙を止め得ざりき。

（六）暗寂佳境に入る

泡影無常。彌陀方便。一念唱名。頓生菩堤。彌陀佛々々と經全く終りし後。老法師に對ひ。幾千の緣なき亡者を代表して。厚く回向の禮を述べ。共に此處を發す。

願みれば。滾は冥寞漸く熟して。暗寂まさに佳境に入りて。燐火所々に燃え。青白き海坊主。髪長き妖女。白衣の老魔。彷彿として出現徘徊せむとする準備に忙しき氣配す。

午後九時。望來の村に入りしに。奥床しき老僧は。此の村に宿借ると言ふに。さらばと再會を約し。正直に予の名を告げて惜しき袂を分ちぬ。

無緣の滾。日毎に荒れ行く今日此頃。老法師健なりや。（四十年十二月稿）

『無緣の滾』の稿。紙上に現れて三日の後。札幌區に悶むべき情死事件起る。其の顚末は掲げて當時の『北海タイムス』紙上にあり。聊か予が『無緣の滾』と相關聯

せるを以て。左にその頃の三面記事を拔錄す。

○明日中に情死仕り候

……場所は岩見澤溫泉附近……

……悲痛慘憺たる遺書……

昨日午後二時、本社編輯員の一人に宛て、左の如き遺書を送り越したる厭世の青年男女あり、其文章より察すれば、何れは墮落學生の果てらしけれども、其情死を決意したる經路、宛然小說を讀むが如きの感あれば、全文の儘左に掲ぐる事としたり。

拜啓厳寒の候、益々御勇健奉賀候、小生はたゞ北海タイムス紙上、貴下の文名を知る者にて、未だ御面接の榮もなき貴下に、突然手紙を差上ぐるは恥しき事ながら、小生等今明日中、岩見澤溫泉附近にて、自殺致すべければ、何れ貴下等が鮮にて冷罵せらるる事と存じ候まゝ、貴下に御依頼致したき事ありての故に候、小生には親の定めたる婚約せる小女あり、從妹にて京と申候、小生等戀情に理性も失ひ、交通など致し居り候節、既に從妹はさとり居り候ひしが、貞實能く事へて多少も小生を恨める樣子を見せず、去月二十七日小生事故里出發の前、小生にして家出せば、如何と尋れ申候處、いつまても待ち居る旨を答へ、待つも〳〵歸らぬ時にはと再び問へば、冒藥なく號泣仕候、小生は今死せむとするにあたり從妹に謝すべき辭なく候。小生と共に死する女は、從妹の親しき友にて、兄弟姉妹もなき者にて候。

願くば貴下、小生等の死にして、北海タイムス紙上に記さるる事の候はゞ、其際何卒右從妹の心情御察

◎無緣の涙

◎無緣の涙

し下されて、其貞操を賞し下され度、餘りに從妹のいぢらしさに未見の貴下に我儘なる依頼申候。

小生等の死は如何に罵倒さるるも、素より世間の哄笑を受くべき事と知ればあきらめ申すべきが、何卒〳〵從妹が貞操御賞賛下され度、繰り返し〳〵して御願申上候、尙ほ此の手紙は決して紙上になど御記し下されざるやう願上候。無識なも願みず懇願仕候。貴下の御健康を祈り申候　草々　（原文の儘）

十二月十二日

辻　兵　藏
同　こ　と

河合　裸石　様

○辻兵藏 長島琴 情死を決行す

……昨紙所載道番の主……

一昨日午後七時頃、北四條西四町目一番地、旅人宿武藏屋方に於て、後志國瀬棚郡瀬棚村大字會津町六十五番地平民藥種商、兵右衛門長男、辻兵藏（二一）と、同村雜穀商、兵藏長女、長島琴（一八）の兩人が劇藥を仰いで情死を企て、女は死せるも男は死に切れず、札幌病院に收容せられたる樣なり。

▲男は早稻田大學生　先づ情死の狀況を記すに就て、男女の素性より說んに、兵藏は數年前より上京し、目下東京牛込早稻田大學に籍を有せるものなり（中略）

▲琴子の死顏　前號に掲げし兩人の手紙は本社内裸石氏宛なりしが、氏は社員に非らざれど、平素本紙に寄稿せらるるより氏の名宛と爲せるものの如きを以て、裸石氏と親善なる本社エム氏は、氏に代りて此の

憐れなる兩人に會はんと欲し札幌病院に赴きしも、面會を禁ぜられたれば、武藏屋に至りて死者を訪ひたり、琴子は銀杏返に髮を結び、其の死顏は實に悲艷とも云ふべく、色徳迄皓く身には白の肌襦袢紅縮緬の長襦袢、紬格子縞の羽織、同立縞袷、黄八丈の綿入等を着けたるままにて四角の棺に納めあり、帶は繻珍と縮緬の腹合せにして之もショールと共に棺に納めありたり、（中略）

▲『無緣の涙』に感ず　兵藏、琴の兩人は、瀨棚出發の後、岩見澤溫泉場王泉館に宿れるが、本月、六、八、九の三日に亘りて本紙に掲載したる、河合裸石氏の叙情文『無緣の涙』を琴が讀みて、甚く其才筆に感じ、情郎に向つて『どうせ死ぬなら涙迄が宜しう御座んす』と、語りし程にて、其の結果死後の依頼を裸石氏に宛て發したるものなりと。

▲病室内の幻怪　兵藏は十三日午後十一時頃、殆ど夢心地にて札幌病院第四號室に引取られしが、稍正氣に復すると共に、一昨夜の如きは類りに琴の姿の幻怪を催し終夜眠ゆえて眠ること能はざりし由なり。

▲タイムス紙を待つ　兵藏が本社裸石氏に書を寄せし趣旨は、許婚のお京が兵藏と琴の關係を知りながら密も嫉妬がましきことなく、他迄溫順貞節の婦人なることを說へ呉れよと云ふにありし、（下略）

◎無緣の涙

卷頭に挿入したるは。俳畫禪寺の和尙倉田松濤禪師が。薄幸の佳人。琴子の菩提を吊へよとて。特に予が爲めに般若心經を書寫せられしものの也。中央の畫像は。現今幽冥界におはす琴子女史最近の肖像なりとぞ。

膽振行脚

（一）

昔の先生。おかしな女。羊蹄の山。

原稿賣りて少々ばかりの錢手に入りぬ。羽織よ。帽子よ。布團よと新調すべく。日頃心掛けたる品は數々あれど。どうせ帶にや短し。襷には長き錢。ままよ飯よりも好きな旅行に費して了ふが上分別と決斷し。即日膽振行脚の草鞋を穿ち。瓢然として、ルーランの法窟を拔け出でたり。

小樽中央驛。午前九時五十分發の列車にて狩太まで乘り。それからは脚に任せて行ける處まで行かむと停車場に行く。停車場の前に白立縞の背廣を着。ハーバーと形の夏帽を少々横に冠りたる四十前後の男あり。段々近づくに及べば什麽やら見覺えある顏也。はてなと首傾けて。

『失禮ですが。もしや貴君は僕の少年時代の先生ではありませむか？』と問へば。

『おや上田さん……木村さん……でもなし……さう〳〵山本さんでしたねえ。大變大きくなられたので。一向心付きませむでした』と云ふ。

先生其の後。小學校の教員では喰はれぬとやらにて。今はさる保險會社に通勤したまふとか。

汽車は定刻にキチンと發したり。車内はまるで人間の重詰也。立往生の厄に遭ふて罵り騷ぐ者二十有餘名に及び。押すな。踏むな。小さくなれなどと悶着頻りなる中に鹽谷を過ぎ蘭島に來る。汽車は三十名ばかりの小學生と。三人の女學生と。一人の老婆とを卸して發車しぬ。韃靼の聲汽車の響きよりも凄く聽ゆ。三十餘名の彼等海水浴客は。嘸や力を落し居るならむ。

此の邊は矢鱈にトンネル多き所也。明けたかと思ひば暮れ。暮れたかと思ひば明け二時間ばかりにして五盡夜を過ぎたり。

倶知安にて車内の六分通りは空所となりし爲め。至極安樂になりて横臥するものさへ出てたり。予と背中合せの十八九ばかりなる。色白く。髮黑き佳人。何を悶ゆ

るにや。時々長太息を洩らして後を向き、予が顔を穴のあく程熟視す。おかしな奴也。

廂殿と背中合せの寒さ哉

これは木曾殿をもぢつたる也。

窓より羊跡山を仰ぐに、あな憎や、灰色の雲低く峰胸より上の方を包みて、崇高の英姿に接するに由なし。先年唯獨り、彼の峰上に宿り、奇花を纏へる巖角に胡座し、天狗の如き銀髯童顔の翁に逢ひ、盃よりも大なる星斗を數へ、互に長嘯して夜を徹ししことを追想し、感興頻りに湧きてありける中に、何時の間にか汽車は倶知安驛を發して、今し機關車は急勾配の軌道を上るべく、大に推挽を力めける也。

（二）　糞風颯々、黄餅粉、瓢箪街

史蹟ある比羅夫を過ぎ、狩太にて下車す。これから得意の行脚也。

背廣の左り肩から雜嚢をぶら下げ、洋傘を手に携へて、飛ぶが如くに東をさして逶迤たる街道を走る。途中にて思へらく、これは大變也、この途が果して予の目的

の地へ行けるのか不知案内也。誰か來さうなものだと、楢の木蔭に佇む。突如左の燕麥畑より仁王の如き大男、醤油にて煮しめたるが如き手拭を冠むり、糞滿々と充たしたる肥桶を擔ぎて現れたれば、

『おい親仁さん。向洞爺へ行くには。此の道路を行けばよいのかネ』

『さうじゃ。あんにも曲らずに、この道行つしやれ』

と言ふ。まだ訊きたき事もあれど、何分糞風颯々として鼻を刺し、一分時も顔を向けられたものにあらざれば、倉惶として鐙を拔きて亦走る。

道路は幅八間もありて結構なれど、サッパリ手入せざる爲め凸凹甚だしくして足を噛み、加ふるに數日來の炎天は土を燒きて深さ五寸位の灰と化したれば、歩む度毎に身は雲の如く、煙の如き黄塵に捲かれて、宛然黄粉餅の如くなりたり。是れではたまらずとて、こん度は速度を緩ふす。路は何處迄も羊蹄山の麓に沿ふて行く也。

約半里も歩みし頃、狩太の市街地目の前にぶらさがれり。地形宛として瓢箪形をなす、東の方の小さく脹れ居る所は舊狩太にて、西の方の大きく脹れ居る方は新狩

◎瞻振行脚

太也。舊市街と新市街とに通ずる道路の兩側に對立せる人家は、丁度瓢簞のくびれめ也。而して、舊と新との市街の形が大小をなすは、亦興廢の意味をも現す也。函樽鐵道通じてより。停車場の方に接近せる、尾花寂しき原野は忽ち市街と化し、撲つた所の廛れたるが如く人家櫛比せる也。新街と反比例して、日々に寂れ行くは舊街也。

（三）五人殺し、眞狩の村、さのさ節

耳を聾するばかりなる蟬時雨を浴び。幾曲りせる山路を上下して、午後四時五人殺しに名高き眞狩の村に着きぬ。マカリヌプリ巍然として市街の北方に聳え、シリベシ川の清瀨其の山脚を洗ひ、山村水廓甚だ氣に入り。こんな村に一晩寐ころんで見たいとの野心を起し、歩を停めて右顧すれば、恰も北海館と云ふ宿屋あり。これはお誂なりとて、草鞋を解き、五十餘りの爺むさき男に導かれて樓上に上り込む。

近來この村に、製麻會社の設置せられしより、だいぶ各地より移住し來りて、人家簇々增加し、現今は御覽の通り。かなりの村となりぬ。今より五年の昔は、白晝

◎瞻振行脚

五六頭の大熊、其の邊に徘徊し居たりきと、宿屋の主媼は、村での銀座街を指示して物語る。

夜、書狀五通を認め投函すべく、如法闇夜の道を縫ふて郵便局に行く。局員、集配人等晝圓を爲して明笛を吹奏し、亂舞頻り也。耳傾けて謠ふを聽けば。

二人して、蕨狩りした伊香保山、思ひ出しては忘れかね、夢にうつつにネ

まぼろしに、啼て血を吐く不如歸、サノサ。

窓口に佇み、呼べど叫べど應答なし。大喝戸を叩くに及むで『何ぢや、切手が欲しいのか』と拔かす。『さうだ』と言ひながら、一尺平方位の窓から頭を差し入るれば是れは見慣れぬ鴉とや思ひけむ、聲を改て曰く『これは失禮しました』とさ。

（四）羊蹄の麓、物識り爺

夢さめて枕頭の時計を見る。五時也、篦棒に早し。今一度睡らばやと眼を閉ぢたれど、神氣興奮して、如何に勉むれども、夢圓やかに結べず。乃ち床を蹴つて起つ。

窓を排して山村の黎明を眺む。朝霧深く立ちこめて、家も、山も、野も、總て見

えず。遙かに東雲の歌を唄ふ鶏の音。シリベシ川の瀬聲に和して夢の如く聽ゆ。

午前八時。宿屋を辭して洞爺街道に出づ。羊蹄山の英姿は依然として雲の帷幕を垂れゐける也。褐色の街道は。夜來の微雨に濕りて。塵埃の少きは儲けもの也。道の兩側畑遠く連りて。彼方の山蔭。此方の谷合に炊烟うすく揚る。畑といふ畑には。雜樹の燒け株夥しく殘りて。恰も熊の伏臥せるものの如く見ゆ。人間の生活は。かかる山奥にまでも其の範圍を擴張し來りぬ。この調子にて進まば。今後幾十年の後には、北海の地、皆田畝と化せむ。

二里にして留寿都村に來る。近年開けたる村らしく。新しき人家軒をならべたり。村の東方にルスツ嶽聳ゆ。これが本當のマッカリヌプリなりしを、何日の頃か其の名は今の後方羊蹄山に奪られて了ひ、眞正の羊蹄山は閑却せられ、僞物の羊蹄山獨り世人の寵愛を一身に負ひ、はばをきかせ居る也。其の怨恨綿々として忘れざるにや。嶙峋高く雲表を貫き。嶢兀たる圭角稜々奇骨を怒らして僞物を瞰みゐけり。

道は從是直角を爲して東へと通ぜり。朝來よりの雲霧名殘りなく晴れて。眞夏の

太陽は蒼空に照りて暑さ甚だし。山姫の頭髪の如く生え繁れる。茅萱の中に。淡黄の女郎花と。淡紅の百合と。點々相交りて。天つ香に匂ひて咲き亂る。

三の原を越え。二の原より爪先上りの坂路を辿る頃。ヨボ〳〵馬を曳ける五十餘りの老農士と道連れになる。頭に馬糞木の子の如き帽子を阿彌陀し。口に雁頸の曲れる煙管を脂下りに啣へ。時々南瓜の種子のやうな齒を見せて笑ふ。この親仁餘程此の邊の水に沁みてゐるやう也。附近に聳ゆる山々の中。いくら地圖を調べても判明せざりし名を。この老人に尋ねなば。必ず判然すべしと先づ岩内の方角とも見ゆる方に。秀然として聳ゆる高峰を訊ぬれば。爺さん『く』の字の腰をのばして『あれや昆布嶽さ』と苦もなく答ふ。昆布嶽の左の頂の赤く禿げたる二個の山は。即ち硫黄山にして。先年さる會社が。三井へ二足三文に捨て賣りせし山也など語る。爺さん懷中深く秘め置ける。白銅製二十形の時計を出して『時計を見てつかはされ。文字が唐の字で讀めんけぇ』と云ふ。見るに短針は三時を指して平氣也。この時計、どけ也とて予の時計を見るに正午也。龍頭を捻りて正しやれば『あんたは時計屋さ

んですけえ」と云ふ。さうぢや〳〵。

（五）洞爺の湖。有珠の山。異邦人

上り〳〵て路は頂きに出てける折。潤然として洞爺の湖は眼下に展開せり。ハハアこれだなあと見渡せば。周回九里餘の大湖は。湖心に翠色滴るばかりの老樹の森を擡へる大小三個の島嶼を浮べて明鏡を磨しぬ。湖を繞つて皆な山。就中湖南に聳ゆる有珠嶽は。雌雄兩峰に分岐して天を摩し。雄有珠獨り蒼空に白濛々の煙を吹きて怪奇の風姿湖上に映じて奇絶を極め。群巒の淡翠一抹の筆を掠めたり。此處にて何時までも感嘆の辭を唸らば。其のうちに日が蔡れて夜が明けて了ふべければと。暗夜の領なる夏木立の坂を下りて急ぎ湖畔に達す。こゝが向ふ洞爺といふ部落也。

何はさて置き。宿を定めて萬事はそれから後の事と。唯一のホテル。ミツハシといふに投ず。この宿は湖の波うち際を去ること僅に十間許。庭園潤く。樹木繁り。櫻の老幹と。オンコの巨枝との間に湖を隱見し。景色甚だ佳也。

明け放ちたる樓上に。ゴロリと横だはれば。有珠の嶺や。湖中の青螺や。皆わが

腹側に入り來り。習々たる冷風浴衣の袖に孕みて快いふばかりなし。突如として隣室より燕の囀ずるが如き聲す。耳を欹つれば二人の異邦人會話しゐける也。聽くともなしに其の片言隻語の耳に入るを判ずれば。一人は英の婦人らしく。一人は米の淑女らし。頻りに湖の美と。地の幽邃なるとを嘆賞せる也。

山上にて鏡の如く見えたりし湖面は。接近して見れば大なる相違にて。波頭二尺より三尺に及び。怒濤岸をうち。白泡雪を飛して鬱然たる中の島を呑まむと欲する勢也。何のへちまと浴衣を假松の枝に掛け。ザンブと抜手を切つて沖遠く泳ぐ。水晶の如く清く。氷の如き寒冷の水。五體にビリリと染み渡りて壯快極りなし。約二十分時にして皮膚粟を生じ寒骨を削る。倉惶として磯に上り。全身を拭摩すれば。社會的煩雜に疲れたる頭惱悉く洗ひ淨められて。心身共に神に近き人間と化しぬ。

（六）靜寂の夜。人三化七

浴後亦豚の如くゴロリと横だはれば。何時しか疲れたる心身は夢路を辿りたるものらしく。下婢が運べる晩餐の膳に驚き起ち。亞字の欄に恁りて外を眺む。夕陽既

に已に湖西の峰下に沈み。模糊たる夜色は嚴肅に靜寂に天地を包み居る也。しまつたり。夕榮の洞爺を見る目的なりしをと。臍を噬めども詮なし。

午後八時。睡るには早しとて磯邊に佇む。

先程の波。忘れたるが如く凪ぎて。手を伸ばさば達せむばかりの島は。巨魔の睡れるが如く沈默を守り。島上に根を張る幾千百の苔生えたる老樹の蔭に。木精石魅の輩群をなして密議を凝せるが如く。湖畔に欹つ十重二十重の群嶺もまた窃にうなづき。窃に物語るかと疑はれて。人を嚇するの靜寂四周に滿ちたり。

五千里外三年客。十二峰前一望秋。無限別魂招不得。夕陽西下水東流。

と。唐詩を微吟しつつあるうちに。こは奇也。次第に人間の智。情。意が遠く遠く去り行くが如き心地し。自然に腋下に羽翼を生じて。ふはり〳〵と湖上を飛び居るやうな感に耽ける。ポタリと頸に白刃の落ちしが如きに。愕然として顧みれば。化けさうなる巨松の葉に宿れる白露の滴りし也。對岸を眺めながら。磯をつたへば。湖村の燈火五六。星の如く瞬きて淡し。

とある別莊の裏路より。虹田街道に出づれば。闇に佇む浴衣の人あり。近づけば。

『先生でなくつて？』

となまめかしき聲す。自分は夜目に村の先生樣と見誤りたるなるべし。一體什麼奴が。什麼面をして。かかる妙音を出すにやと。好奇心に驅られ顏をべタリと合はすれば。何ぞ知らむ人三化七のお面相。恐ろしとも恐ろし。遠く塵寰を離れしこと仙境に妖婦何故あつて迷ひ入りしぞ。

（七）ページ君。戀情禁ぜず。壯麗の瀧

五時目醒むれば。隣室の異邦人。夢は今やユダヤのベツレヘムに通へけるにや。鼾聲幽かも也。座敷の外に在りて。徹夜警戒せる異人の下僕たる犬は。予の目醒めたるを喜び。尾を障子に掉りたてて身近く來る。茶褐色の毛は强き光りを有し。肉肥えたり。名をページ君と呼ぶ也。

楊枝を啣えて湖畔に立てば。水蒸氣深く湖面を壓し。女神ゐます中の島も。四周の山々も。等しく聲を收めて霧の布圍被て睡れり。澄明にして靜かなる水を。攪亂

するは重大なる罪悪を犯すやうなれど。さまよと赤裸になり。百間ばかり沖へ泳ぎ脚を下ろせば。水平線乳のあたりをとり卷き。圓波擴り行きて盡る所を知らず。口を嗽ひ。顏を洗ひ。頭を淨む。周圍九里の洗面器を使用せしは。これが初めて也。

食を了り。ページ君に名殘を惜み。宿を辭して壯麗に向ふ。何處までも湖畔に沿ふて行く也。道路は八間幅の。砥の如き道にて。兩側には千古斧鉞の入らざる楓や。椴や。桂等。空を蔽ひ。清風徐ろに顏を掠め去る。

西湖畔を過ぎ。湖に斗出せる一大森林を拔け出づるに。忽ち轟轟たる音す。近づけば湖の水溢れて初めは川となり。忽ち石を割りて素練直下すること十丈餘。幅五丈に及び。勢は奔龍の如く雪崩れて中腹に突出せる巨巖に激瀉し。雪となり。絮となり。烟となり。聲は有珠嶽を震撼し。響は萬雷を轟かし。遂に濃碧染むるが如き深潭に投じて。飛沫溪間に滿ち。空濛霏微たる中に。斷虹斜に老樹に懸り。峭壁の萬木皆な披靡して。豪絕の眺め人の心膽を奪はむと欲する也。

飛瀉奔騰せる瀑布は。聽て瀨となり。渦となり。潭となりて沃々滔々として流れ

去る也。この川に沿ふて行かば。身は自然に俗界に出づる也。

顧みれば。神仙の幽境既に山下に沒して辨ずべくもあらず。戀々の情禁ずべくもあらざる也。不圖。右方を見るに海拔五百尺ばかりの小山あり。一走して登れさう也。かの山に登らば必ず湖に今一度逢ふこともがなと思ひ。日は暮れなば暮れよと。雜草班なる山に匍匐して登る。

やれ〳〵と腰を据え。さて眼下を望めば。慈母の如き懷かしき湖は小波の笑を湛えて『止まれよ。お身は何を苦しむて塵の世に急がむとはする』と私語ものに似たり。眸を轉じて碧落を仰げば。今まで心付ざりし有珠の嶽は。赭き頭をぬつと擡げ。口より火を噴いて立てる大魔王に異ならず。而して『咄。汝サッサと去らぬか。この女々敗やつめが』と大喝一番。予を叱り飛ばさむが如き有樣なるに恐怖し『さらば慈しみ深き母君よ。幸に健在なれよ』と男らしく山を急下して。瀧の名に等しき壯麗の村に達す。時は午下二點鐘。碧空雲なく。風冷やかにして蟲聲頻也。旅思覺えず愴然!!

脚が棒のやうになり。折れてクタバル所まで行けと。斜陽を負ひて長流の平野を辿る。蕎麥雪の如く茅屋を繞り。百舌鳥の聲耳に滿ち。秋色既に野に遍し。

午後五時。膽振の國。有珠郡。西紋鼈村に着す。網代町阿部旅館に投ず。

（八）紋鼈の村。干潮の難

西紋鼈の村は本道隨一の模範農村也。稻穗の遠く綠波をうちたる。杉の並木に白壁のちら〳〵と見えたる。香氣十里に漲る藍田の美なる。山村水廓の雅趣を帶びたる。殆ど身は內地に在るかの如き感想に撲たるる也。

人も知る。本村は明治二年。舊仙臺の藩主たりし伊達氏。己が部下を引率して此の地を開拓して今日に及べる也。其の記念なるにや。村の本名は今は字となりて、此の邊一帶を伊達村と稱する也。市街は七分の小樽素と。三分の札幌素とを加味したるが如き觀ありて。商業頗る活潑也。凡そ近村數里の農民は。皆此の市場に集りて用を便ずる也。

噴火灣定期汽船は。毎日午後二時ならでは入港せぬとのこと也。今は午前の八時。

それまで便々と待つてたまつたものにあらずとて。草鞋堅く結ぶ。

出發するに臨み。宿料を拂はむとて。ポッケットに錢を探る。思へらく。昨夜以來潑として皿上に躍る新鮮の魚肉と。柔かきこと鵞毛の如き絹布の布團と。チョコレット。クリームの茶菓と。清淨にして春の如き快感を與へし浴場とは。必ず多大の宿料を要求するなるべしと蕊度胸を据え宿料はと訊けば。いえ。眞に高價やうですが。六十錢頂戴致しますと言ふ。あんまり安價が。間違ぢやないのですが。いえ決してと言語甚だ明瞭也。乃ち宿料の外に四十錢を賞與して去る。

道は遥透として室蘭の田畝に連る。瑠璃を展べしに似たる蒼空に。燒き付くばかりの太陽懸りて。塵埃に光澤を失ひたる雜草を照りつけ。土よりは土の香。草木よりは草木の香を放ち。二つの香はこんがらかりて人を蒸し殺すばかり也。

ウコンシベ。ピックリベッなどと言ふ奇轉烈なる名の村を過ぎ。輪西に來る。是より道は大畫圓をなして目も遙か也。海は干潮して淺きこと盈寸。正直に圓形の道路を縫ふて迂廻するは馬鹿の骨頂ず。若。直徑に海を渉らむにはと。草鞋。足袋、

脚絆を脱し左手にブラ下げ。ズボンを背にくくりつけ、褌をキュッと締めあげて、陸を去る一里餘の沖を歩む。軟沙足に適して心地よし。時々。予が足裏を噛む堅き或る物體あり。底の沙を一握し。仔細に檢するに。アサリ蛤の老いたるやつ也。凡そ此の邊一帶の海。アサリ貝の棲息すること甚だしく。チョイト四斗樽の二三本を採取するは。譯のない話にして。嘘のやうな事實也。

三十町も歩み來る頃。俄然として海水脛に及ぼし。膝に及ぼし。肢に及ぼし。遂に臍に及ぶ。これは大變也と左に右に歩を轉ずれど。奔龍の如き水勢甚だ獰猛にして進退殆どタニまる。蓋し。時恰も正午。潮が滿ちて來りし也。クヅ〳〵なさば身は海底の藻屑とならむと。直ちに衣服を脱却して赤裸となり。手早く一切の携帶品を頭上にくくりつけ。身を斜にして。波を切つて陸へと眞一文字に泳ぎ出したり。漸く陸に上りてホット息をつく。是れある哉。古人言あり。急がば廻れと。

既にして輪西の村に入り。汽笛一聲室蘭に着さしは午後六時。

夜。埠頭に佇みて蘭港の夜色に對す。指導標あり。各地に至る里程を刻す。曰く。

狩太まで二十三里二十八町と。狩太は予が行脚の草鞋を踏みし最初の村也。

顧みれば積氷千里山影微茫として。來路を辨ずべくもあらざる也。

絶壁を下る北海の猛熊

石狩川から十三里北にアイカツプといふ海岸がある。此處は北海有數の難峻たる送毛山道の入口に方つてゐるのだ。

試に北海道地圖を展開て見たまへ。增毛山脈といふ連峰が。北より南してこのアイカツプに達すると、一躍海拔二千尺、三千尺の高峯を起すのである。高峰の西。即ち日本海に面してゐる方は。孰も怪奇が巨斧を以て一氣に裁斷したやうな絶壁をなしてゐる。絶壁の直下は無數の奇巖怪石が散在してゐて。到底人間の通行し得べく。住居し得べき所ではない。

されど。アイヌは鰊を漁獲する爲に。其奇巖の上や下に小屋を建てて。平氣の平左と澄しこんでゐる。一朝千仞の絶壁上から。巨巖が墜落すれば。無論家屋もろとも彼等の身體は粉微塵になつて了ふのだ。

吾人が彼等の豪膽なるに驚くよりも。更に驚倒すべきことがある。それは毎年鰊漁期になると。其千仞の絶壁を下つて。アイヌの小屋に鰊を盜みに來る巨熊の智惡である。自分は曾つて。アイヌの小屋に宿つて。仔細に其熊の行動を觀察した。

◎絶壁を下る北海の猛熊

◎絶壁を下る北海の猛熊

その日は、月明かなる春の夏夜であつた。午後の八時頃、宿の主婦たるメノコが窓から絶壁の直上を望むで、

『ニシメー、おやじ(熊)が見えるでや！』

と、予に警告するので、同じ窓から首を出して、仰いで絶巓を望むと、成程一大黑色の動物が我等の方を見下ろしてゐる。先生什麼な輕業を演じて下るのだらうと、思ふてゐる中に、スル〳〵と難作もなく下つて來る、ハテな下りられる道はない筈だがと、心中に疑問を生じて、畫よりも明るき月の光りで、仔細に巖面を見ると、絶巓からロープのやうな山葡萄の蔓が幾本ともなく垂れ下つてゐるので、熊公はそれを抱きつつ滑り下るのだ。一寸說明する、北海道の葡萄蔓は鐵の鎖よりも丈夫なもので、千石船のやうな巨船の錨綱などに代用されてゐて、什麼な怒濤の日でもビクともしないだから、今五六十貫の熊公一個位ブラ下つたつて、切斷するやうな心配はないのだ。

さて熊公は巨巖の間を、ノソリ〳〵と、小屋へ肉薄して來た、熊と自分等の見てゐる窓との距離は、もう五六尺に過ぎないので、自分は息を殺してソツト見てゐると、先生は廂の下に列べてある、鍊を濱た大樽に接近し、忽ち人立して雙方の前脚で、其重石と蓋とを取り除き、中なる鹽漬の鍊をタラ腹喫つて、亦蓋の如く蓋をなし、壓石を乘せて、知らぬ顏してノコ〳〵と、以前の葡萄蔓に縋つて。絶壁上を歸つて行くのである。

折角漁獲つ鍊を、殆ど毎夜熊の爲に盜られたのは馬鹿げたことではないか、片ツ端からブス矢で殺つけたらどうかと、メノコに訊れたら、

『アンプラ掛つてから殺すてや！』と、笑ふてゐた。

註し。今は鍊を勝手に喰はせて置いて、熊の身體が脂肪に富むのを待つて殺すとの意味である。

◎奥尻奇譚

奥尻奇譚

一　奇なる知友。　毛脛の勇左。
寛　島。　クレオパトラ。

予。平素好みて異彩ある人物を愛し。常に會して談笑する事を喜ぶ。其の人物には生命を屁とも思はざる密獵船のキャプテンあり。或は十數人の男を尻に敷ける女丈夫あり。或は勳八等の馬糞拾ひあり。或は女子大學出身にして詐欺師の妻となれる者等孰れも予が珍重せる知友の見本也。是等の奇なる知友中、遠きに在る者とは手紙の交換をなし。近きに在る人とは互に相往來して。未だ曾て人の知らざる趣味と智識とを獲得し。以て無限の歡樂となし。無上の誇りとなせる也。

弦月物凄き一夜。ルーランの海を生命となし。彼の地の洞窟に歲久しく住める毛脛の勇左と語る。美醉將に佳境に入るの頃。彼は得意の追分節を止めて。突如『旦

那は奥尻へ行かれたことがあるけえ』と甚だ嚴格に問ふ。予は『否』と簡明に答ふれば『御承知でもありませうが。奥尻の島は。ありや魔の島でありますぜ。什麼してと言つてお前樣。蛇と鼠とより外。動物と言つたら蛞蝓一つ住まぬ不思議があるんです。イヤそればかりではない。其の鼠と蛇とが一年毎に交代するのだから面白いです。』

恁う聽けば予も想ひ當る事あり。一昨年の暮れ。奥尻島の水て産湯を使つたと言ふ容貌クレオパトラを欺く式部が。雜誌發刊の相談にとて遙々と訪ね來りし際。話の中に『妾の島では。年毎に鼠と蛇とが交代してよ』と物語られし事あり。然れど。性來女の言など容易に信ぜぬ予は。そんなべラ棒の事があるもんかと一笑に附せしものの餘りにクレオパトラの論鋒の鋭き儘。遂に烟に捲かれ。そを確むるべく在島の一村夫子に向つて質問狀を發せしに。間もなく眞實なる旨を言ひ越せり。爾來予の好奇心を刺戟せる此の問題は。其の解決を得るべく何等かの機會を待望しつつありし也。

今宵。何等の僥倖ぞ。計らざる人より。貴重なる解答に接せむとす。是も偏に。奇俠なる知友を有せる餘德なりと雀躍し。乃ち魔島奥尻の由來を聽くべく耳を澄ます。

二

佳人久代。　鮫の餌食。
不屈至極の奴。　龍飛の岬。

何年の頃かは存じましねえが。陸奥の國は北津輕郡小泊村の漁師の娘に。久代と云ふ佳人のがあつたと承知しておくんなせえ。それが素敵の美人で。お前樣が常々仰しやる。天の爲せる麗質てえ奴を持つて居るので。別段手入をせずとも色が拔ける程白いのに。切の長い鈴張つた黑瞳勝ときてゐる上に。丈なす黑髮は一筋だつて曇を帶びたことのないと言ふ。それは〳〵無類飛切の別嬪さんてムいました。

こんげえな神樣のお姫さんの樣な。心も身も潔い女でも。戀はあるものと見えまして。久代。何日の間に什麼ネッバッタものか。時の城主の息子なにがしと云ふ。ド豪い若樣と割ない仲となられたのてムいます。誠に戀てえものは變なもので。今

も昔も變りは御座いませむや。御覽の通り私などは今じや胡麻鹽となりまして。根ッからものになりましねえが。是でも若けえ時や鶯の二三羽は鳴かせた事もあるんです。

去程に父なる城主と漁師とは二人の間の戀を嗅ぎつけて。不屈至極の奴。以後の見せしめ。流刑に處するとあつて。可惜兩人を筏のやうな小舟に乘せて。今の龍飛の岬から沖へ流したのです。一時は界隈の者も。あんまりなされかたと。涙の袖を絞らぬ者はなかつたと言ふことです。

わつち等の樣に、年が年中海を生命の荒くれ男でも、星一つ見えぬ眞夜中に、海坊主の頭を揃へて來るやうな白い涙の穗頭を相手に、陸から三十里も離れた大灘に浮むでゐるのは、あんまり氣持ちのよいものではありませむ、それに雨でもポツリポツリとやつて來る日などは、畫でも凄うムいますのに、御誕生以來、風にも觸れたことのない若樣と娘ッ子、沖中一里と行かぬ間に、鮫の餌食となるのは必定の事と思ふてゐました。

三。配所の月。仕末にや負ひぬ。孤島の夜。大蛇の怪。

然し天道樣も。いとしいとしと言ふ兩人の心をお汲み取りになりましたものと見え五日五晩續けて。お誂ひの辰巳の追風が吹いたので。宛然舟遊びでもするやうに。難なく着いたのが。蝦夷の奥尻島でした。

現今でこそ。あんなに開化た島になりましたが。其の頃の奥尻と云へば。鬼も恐がる離れ小島であつたのです。微の生えた古い文句ですが。竹の柱に萱の屋根。好いた同士の仲ならばとか申します通り。戀の熱てえものは何處迄も妙なもので。二人は通ふシカベ（鷗の一種）の鳴く聲に。幾夜寢ざめの物憂も感ぜずに。毎日チヤンチヤラ可笑く。配所の月を眺めてゐたのでした。

斯くて鮭去り鮭來ること兩度。何日しか久代は啻ならぬ身となりまして。產褥に唸るやうになつたのです。若樣の心配は一方ならず頭を痛めました末。是は到底身共一人ぢや仕末にや負ひぬ。誰か女の力を借りにやなるまいと。考へ付いたが吉日。其の日から島中を狂ふて人を探索に出掛けたのです。素より自分等の他には。人ッ子

◎奥尻奇譚

一人居らぬとは百も合點はして居りながら——。

若樣の出掛た其の夜。孤島の夜は最う際限もなく更け沈むで。萬物皆聲を絶えたのに。獨り荒磯に狂ふ涙の音は海魔の笑ふが如く。吼ゆるが如くにド。ドーと巖に激するのが。一段の凄味を增す最夜中頃。何處から集つて來たものか鼠の大群が押寄せ來つて。姫君の寢息を窺ふて居るのです。スルト一聲帛を裂くやうな悲鳴が。物凄い寂寞の暗を破つて聽えました。マア驚くまい事か!! 可愛や姫は鼠の爲めに雪を欺く玉の腹を喰ひ破られたと見る間に。頸から下は身の毛も逆立つ巨蛇と化けたのです。其の紅黑い生々しい血が鯨の潮を噴くやうに迸る後から。ニョロ〳〵と這ひ出だした長いのが數限りも知れぬ程連がつて。紅い舌をペロリ〳〵と。

四。逕の末。親の仇。魔性の子孫。高價なる奇譚。

道。十二支の長と崇めらるるだけあつて。鼠は賢い者。疾に魔性の女と目星を付けて。何時かは巨蛇の肉を屠り啖はむと油斷を狙つてゐたので。今宵情人の不在は逕の末。巨蛇と知らず。美人ぢや戀ぢやと騷ぎ廻る萬物の靈長の愚さ。いや人間程

◎奥尻奇譚

馬鹿な者はありやしません。

と。勇左は何事か深く感想に沈むが如く俛首て。冷えたる盃をグイと乾す。自分は唯もう息を殺して。結果いかにと先を焦る。

上弦の冬月破窓に冴えて。鞳鞳の聲は。一入に沁みて聞ゆ。

いや。話がずんと側道へ外れましたが。勘辨しておくんなせえ。扨て。神ならぬ身の若樣は。妻の椿事を知らう筈もなく。歸つて見ると此の慘狀。見るなり氣絶せられたが。素より無人の境。誰とて看護する者もなく。惜むべし青春二十有三歳の美男子は。世を去られました。其の夜。現今のアオナイと云ふ砂岸の岬で。鼠と蛇との珍無類の合戰が開始りまして。蛇は親の讐。鼠を呑ふとする。鼠は魔性の子孫。蛇を嚙ふとする。それや上を下への大騷動でしたが。東がほの〳〵と白む頃。什麼嬉和が調つて。何處へ退去したものか。兩性の生物は孰も姿を見せないのです。

斯て其の年は暮れまして。鷗も徐々と北の海へ去るといふ四月の中旬。何處に隱れて居たものか。去年の蛇が擧つて島中の最高峰。カモイ嶽に現れまして一旗擧げ

やうとする鹽梅式なのてすが。肝腎の鼠は一疋も見えないのてす。相手のない喧嘩は出來ないと相場を定めたものか。又何處ともなく消え失せて了ひました。翌年になると。此度は幾萬の鼠がアオナイ川原に集りまして。日夜驅け廻つてゐるのてす。敵なる長蛇を探すのてしやう。

其の翌年は蛇が鼠を探し。其の次の年は鼠が蛇を探すと言ふ工合に。幾百年の昔から同し事を繰り返してゐるのてすが。今日に至るまて未だ一度も雙方が衝り會ねえのは。何と云ふ不可思議の事てはありませむか。此事ばかりは。いくら文明開化のお學者樣方ても分りませむや。

と。長き神秘的物譚は爰に盡きたり、奇怪なる奥尻島の秘密よと。予は無限の感に撲たれて。暫しこの高價なる物語の餘韻を味ひぬ。

鰊漁夫の山間生活

（一）山上り、奇なる行列。

暦が『啓蟄』を告げると。北海道西海岸の漁業家が。夢寐にだも忘れる事の出來ない『清明』を迎へるのだ。『清明』とは。鰊が頭を揃へて日本海の沿岸に群集し來る時期を言ふのてある。それて漁獲に使用する樣々の器械や器具の製作を急ぐのて。大概の漁業家ては。漁夫を附近の山間に籠らせて。そして彼等をして需要の道具を作らせるのてある。是が即ち『雇の山上り』と稱するのだ。

山上りの早い漁場ては、一月の下旬頃から開始する。併も普通は內地（南部。津輕）の雇が來てから始める。即ち三月の上旬だ、此頃になると最う『彼岸』を目の前に控へて居るのて。吹雪も多くは暴威を逞うせぬのて大いに都合が好い。さて親方（營業主の代名詞）が。人數が何人、米が何日間て幾何と言ふ胸算用が出來ると。愈々彼等を山へ送るのだ。其の出發の光景が中々面黑い。唯見る異樣の風姿（スタイル）をした人間が一列縱隊に通る。必ずしも一列と定つた譯はなからうなどと茶化す人がある かも知れぬが。之は道路の幅が帶のやうに狹いからだと說明したら。成程と合點さ

れるてあらう。

先頭に熊の皮の陣羽織然たるものを着てゐる男がある。時々鹽風に磨かれた立派な顔を。後方の列に向けて。注意深い眼を射る。胸と手首と脚とを包むだ赤毛布のシャツや股引が馬鹿に目立つ。この人が總軍を指揮監督する司令官。所謂船頭樣だ。それから二三歩づつ後れて各々鐵瓶。米俵。樽。大鍋。夜具。鋸などと言つたやうな我樂多道具を背負ふてゐる雇が二十人程連なつて行く。下を向いて行くのもあれば。白い息で空を吹いて行くのもある。孰れも二十歳以上四十歳以下の。巖のやうな屈强の男ばかりだ。

（二）深山の春、ホッタテ小屋。

漁場と山との距離は。年に正比例して行く。換言すれば年一年と伐木地は遠くなるのだ。老人の話によると。明治の初年頃は海岸の後から直ちに密林てあつたさうだが毎年濫伐の結果。現今てはチョイトした樹を伐るにも。二里。三里と行かねばならぬやうになつた。今後幾年、或は幾十年の後には。鰊の爲めに。北海の沿岸到

る所禿山の奇觀を呈するのてあらうとは。我輩一人の頭痛てはあるまい。自分の居る村の伐木地はハッタリと言ふ谿谷だ。此處は海岸から約三里の山奥て。北にはアソ岩山脈と。マシケ背面の連峰とが。恰も襟を合せたかのやうに。山又山と重疊してゐて。南に横たはる蜿蜒長蛇の如き石狩山彙と呼應し。東方は巨熊山を以て行き止まつて居る。されば其の谿谷の地形は。宛然『月』字狀をなしてゐるのだ。谿底は楡。楓。椴松等の千古の密林で。光と言へば僅かに西の來路から送る一道の光明が。寂寞の暗を穿つてゐるのみだ。

素より人跡を絶ちたる北海の深山のこそてあるから。曆が春を告げやうが。此處は未だ嚴冬の最中てあつて。積雪は三丈四丈の楢の樹の中程迄にも達してゐる。彼等『山上り』と稱する一團の猛者は。この寂しい熊吼ゆる林間に。十日乃至二十日間。居をトさねばならぬのだ。居をトすと言へば。什麽やら煩雜の社會的生活から逃れて浮世の事は白菊の花と濟し迄む人の言葉のやうに聽えて。建つる家も何となく床しいやうに思はれやうが。是はそんな詩的のものてはないので。四周の樹の枝を

伐り拂ひ。藤蔓で縱横の梁を結び。床も天井もない創世紀時代風のホッタテ小屋を造るのだ。雇は這麽仕事には妙を得てゐる。見る間に人數に應じて二軒も三軒も建築して了ふ。家が出來上ると。こん度は火を作る、家の周圍に生えてゐる椴松の巨幹を惜げもなく伐つて來て。是を山のやうに積み重ねて點火する。驀て濛々たる白煙は。一大猛焔を揚げて。家の全體を甜め盡さうとする。火は實に彼等の生命であるから。山に在る間。終日終夜決して消すことを許さぬのだ。

（三）斧の音。ソマートーゼ。

風雪を防ぐ家も建てた。暖を採る火も作つた。まづ其の日一日は火を圍むで。種々樣々な雜談哄笑に夜を徹して了ふのである。

翌日になると船頭君は。一々仕事の役割を申渡す。假令ば津輕は船の胴にする木を挽けとか。南部は飯籠を百本作れとか。越後は鰊粕の臺皿にする木を選めとか。秋田は樽を作る木を伐れとかと言つたやうな事を。其の人の腕に應じて命令するのだ。一寸說明する。漁夫の眞實の姓名は滿足に呼ぶ者はないので。大概其の出身地

を渾名にして置く。だから局外から聽いてゐると。宛然封建時代の所謂殿樣同士が呼合つてゐるやうだ。以上の命令が出ると。漁夫は皆な林間に姿を隱す。暫くすると。斧の音や木を挽く音などが谷から谷へと傳はつて。混み合つた反響が返つて來る。たまには悠長な追分節なども聞える。木の仆れる音もする。鋸の齒を鑪て磨る音もする。恁うした音は彼等の山籠してゐる間。一日として聽えないことはないのだ。

此の邊の日沒は極めて速い、午後の二時と言へば。何日も太陽は彼方の山に隱れて了ふ、すると彼方の森、此方の林から『おーい、仕舞ふべや!!』と言ふ聲が起る。雪を踏む足音がする、漁夫の影が現れる、二人三人と小屋に集る。孰れも頭からモヤモヤと湯氣を立たせて、汗を拭き〳〵來る、箱の中から自分の茶碗と箸とを探し出して今伐つて來たばかりの生木の香匂ふ圓柱形の腰掛に腰を下ろす。火を包圍した彼等の顏の數が揃ふと、猛焔に包まれてある飯鍋が取りはづされ、蓋が取られる。隣から『おい鰊が燒けたぞ』と云ふ聲がする。『よし來た』と一人が脂の滴る數尾の

『すし鰊』（生鰊を糠と鹽とにて漬けたるもの）を受取つて來る、プーンと不快な香が漂ふ、すぐ飯が始まる。餓えたる彼等は舌鼓を鳴らして。見る〳〵數椀を平げる。漁夫の常食は。米と鰊と香の物との三者に定つてゐる、こんな粗食をしてゐても、身體はメキ〳〵と肥滿して行く。彼等には絶對的ソマートーゼの必要を認めぬのである。

（四）猫に睨まれた鼠。古びた毛布。

晩餐後の彼等は火の畔で夜業にとり掛る。作業は晝間伐木して置たのを。削つたり。割つたりして受持の器具を製作するのだ、皆な悪命なもので。夜嵐が强く吹いて怪禽がけたたましく鳴いても、側目も振らず働く、それも其の筈だ。仕事は總て切り渡して。渡された丈の仕事を濟せば後は遊むて居やうが。轉がつて居やうが自分の勝手だ。だから一刻も早く仕事を切り上げようと精を出すのである。

折々船頭君が巡視される。時々滑稽な事を言ふて皆んなを笑はせる。世の人は常に言ふ、船頭も隨分辛い役だ。人の言など屁とも思はぬ。主人の命令でも。帝王の召にても應ぜぬと言ふ荒くれ男を統御して行かねばならぬと。然し世の中の事は良くしたもので、一筋縄では行かぬ鐵幹銅身の彼等でも。船頭君に逢ふとカラ、駄目、まるで猫に睨まれた鼠同然。グーの音も發し得ぬ。そして船頭君の命令一喝となれば。唯々として盲從し。よしや火の中。水の底でも辭しはせぬ。何と面白い奇骨ではあるまいか。

閑話休題。かくて彼等は夜の八時前後に作業を卒へて寢仕度をする。莚を敷くものもあれば。古びた毛布を羽織るものもある。十人十色の寢具に包まれて彼方の隅にゴロリ。此方の横にゴロリと。宛然熊でも寢たかのやうに伏し。攝氏氷點下十度前後の奇寒に。何を夢見るのか。忽ち雷の如き鼾聲が聽え出す。ブス〳〵と生木の燻る音がする、かくて深山の夜は更けて行くのである。

月明かに北斗淡く。寒光谿谷に滿つるの良夜などには。白兎群をなして漁夫の寢息に耳を澄すことがあるさうな。夜が明けると。雪で顔を撫でて。亦昨日の作業を繼續するのだ。

（五）奇拔な碁石。河童の子。

◎鰊漁夫の山間生活

以上は晴天の日に限つた一日の生活を述べたものであるが。吹雪の日などになれば多くは業を休むで。山居一唯の娯樂たる圍碁を鬪すのである。

碁盤は彼等のお手の物。オンコの面を平げ、圪墨で縱横の線を引く、石は頗る奇拔なもので。小屋の畔から徑三分位の釦に似たる兎の糞を拾ふて來て。色の黄色を帶びたのを白とし。暗黄色の奴を黑と定める。臭くはないかなどと言ふのは。只想像に過ぎないので。實際は臭いどころか鶯の糞同樣。寧一種高尚の香氣があるとは斷じて駄法螺ではない。

吹雪が連日に亘ると。必ず酒の阿彌陀籤が始まる。甲が三錢。乙が五錢と錢が集まる。使に當つた者が貧乏徳利を下げてテク〳〵と出て行く。なんにしろ酒屋へ三里の山奥だから。彼等は喉を鳴して六時間以上も待たねばならぬ。其の間昨夜ワナを掛けて置たのに。幸に兎か狐でも落ちて居れば。それを料理して置く。軈て使者は。雪達磨然として歸つて來る。孰れも酒と聞けば。眞夜中でも跳ね起る連中の事だから。サア大騒だ。呑む。謠ふ。躍る。舞ふ。食ふ。殆ど赤鬼が仙谷に在つて酒

宴を開いてゐるやうだ。唄は多く秋田音頭と言ふハヤシ唄を歌ふ。其の一例を紹介すれば。

『橋の下で。河童子が河童子産た。其の子も河童子で。親河童。
子河童子だ!!』

と言ふやうな類だ。彼等のやうな荒くれ男には。喧嘩が通有性でありさうなものだが。是はまた格別。いか程呑むでも騒いでも。決して爭論が起らぬから嬉しい。一つは船頭君の眼が恐いからでもあらう。兎に角。彼等は無邪氣の者だ。故郷を離る幾百里。熊伏す北海の深山に在りて。妻も子も忘れ果てつつ。一杯の濁酒に『河童子』を謠ふて眞底から愉快に踊つてゐるのだもの。

◎鰊漁夫の山間生活

斯て今日と暮れ。明日と送つて。豫定の作業を卒はると。棲み慣れたスウキトホームを後にして。各々櫂に其の製作した器具を積むで。海岸へと下るのである。是が所謂『雇の山下り。』と言ふのだ。漁夫が山から歸る頃は。三月も暮れなむとする頃で。空には鳶が輪を作つて。磯の小波も鰊の群來迫れりと私語くかのやうに。女

波男波が長閑に寄せては返すのである。

行雲はがき便

第一信

昔男ありけり。一日春を尋ねばやとて。日暮るるまで山野を踏遍しけれども。一向春に逢ひ申さず。失望して歸りけるに。恰も庭前の梅花滿開なるに心動き。花一つ折りて其の香氣を嗅ぎ申候處。春は指頭に在りて既に十分なるを覺り。兼ねて深遠なる哲理をも發見致し候由は。抹首臭き黄表紙にて承り候へども。現今の若き凡人等にはなか〳〵そんな事位にては我慢がてきず。さてこそ遠くゴキビル棧道を越えて。春を尋ね參りたる譯に候。

連は斯く申す裸石の外。秀麻呂。涙川。聲外の三名にて。孰れも村の若き先生樣に御座候。申すまでもなく。小學校の先生は國民教育の重任ある身なれは。勿論授

業を廢して呑氣なる旅行の閑など。決して得難きことに候。されば三君は土曜の午後より翌日曜にかけて此の旅行を企てたる次第に御座候。

過ぎにし月。火。水。木。金の五曜は。極めて快晴にて候ひしものを。强顏なのお天道樣は。土曜の朝より濛々たる灰色の雲中に隱れ給へて。少しもお顏をお出しなされず候故。我等四名の獅子鼻は幾度か天に朝して。雲脚を觀測致し候も。暗澹たる意地悪の雲奴は。遂に一分の綻びも見せ申さず候へき。されば一時は『行うか棧道。廢めろか旅行。ここが思案の胸の中』の議論。區々として容易に決し兼ねしも。僞天文學者然と構えたる裸石が尤もらしき觀測の喝破に。有繋の先生等も煙に捲かれ。結局男らしく出發に決したる次第に候。

ヤソセ街道に沿ふて。北を指し參り候處。海岸より吹き上ぐる西北の風は。鰊粕の異臭を運び來りて言ふべからざる不快の感に撲たれ候に。獨り涙川のみは。總て臭き物に味ありなどと。飛んでもなき奇言を吐き澄ましけるには。皆々ホウ腹致し候。

◎行雲ばがき便

瀧の澤。大曲りを越え。チヤラツナイの峠を望む頃。雲低く垂れて我等と親しみ。衣帽に微細なる霧を吹きて悪戯致すには閉口致し候。この邊の谷と言ふ谷。峰と云ふ峰には數十の鶯。頰を脹らして啼き居り候。中には。まだ乳の香失せぬ小兒の鶯なるにや。ホーとまて悠長に啼きて。後口ごもり。稍ありて。あはただしくホケチョと續けたるなど愛らしきものに候。（ブトシマナイの峽中にて）

第二信

白雲は益々地表に接近し參り候。今は山容水色すべて漠々たる濃霧の裡に裹まれ申候て。凡そ一間以内の世界は更に見え判かず。唯々煙の如き中を漕ぎ分けて突進いたすのにて候。されば無論四周の風物など。更に目に映じ申さず。あたら春を尋ぬるとて參り候目的は。越褌と外れざうに相見え候。

ゴギビルの長坂を下りける頃。其の名に似通ひる濃き霧は。層一層に增加して。身は宛も飛行機に乘りて雲外に在るかの如き感想湧き。什麼やら脚もふら〳〵致し候樣に覺え候。四個の者互ひに徑を迷はじとて。折々相呼應致し候へけるに。頭上

の老幹に宿れる鶯らしき大鳥の羽音凄く飛び過ぎ行くに。幾度か驚き申候。

羊腸たる小徑を。綾鈞り人形の如く辿り行きけるに。忽ち小生の身體は或る堅き物體に衝突すと意識する間もなく。雲中より時ならぬ白雪紛紛として全身に降り積り候を。手もて拂ひ候處。こは意外。雪と見しは花瓣にて。自分はゆぐりなくも老櫻の下に佇立しあるを漸く覺りて。眞に春に逢ふとはこの事なりなどと大笑ひ致し候。古來より此邊は櫻花の名所にて。天晴れ。氣澄めるの日は。右も。左も。峰も尾も。櫻花ならぬ隈なく。滿峽の櫻樹は陳腐らしき形容詞ながら。紅雲の低迷せるが如くにて候。されど地は名にし負ふ。蜀の棧道も斯くやと思はるるゴキビルの險にて。且つ都邑を去る甚だ近からず候故。五日に一遍乃至十日に一度。棧道を往還する旅人の心目を娛ましむる位が關の山にて。惜や艶麗の櫻は。人に知らるることなしに。爰に幾春秋を經申候。（赤岩の一角にて）

第三信

◎行雲ばがき便

鷄の音。犬の吼ゆる聲など。白雲を破りて聽え來り候故。さては村落近づけりと

て急歩し。坂を下れば。身は雲霧れたるゴキビルの村に入り申候。來路の棧道を顧みれば。峰の七合目あたりよりは。依然として雲に包まれ居候。

村は豊漁にて。寸地も餘さず鰊を乾しならべ。褌をも纒はざる赤條々の漁夫。赭熊の如き頭髪を。藁もて結べる女など。鱗光れる筒袖姿にて働き居り候て。予等の洋裝を眺め。世にも珍らしげに凝視致し。何事か呼き居り候。驛遞所に立ち寄り。鷄卵數個を啜りながら。柱時計を見るに最早午後五時に近きに驚き。前進すべきや否やと衆に協り候に。乘り出したる舟。今更更引き返すも女々し。いえ構ふもんか。行ける處まで行けと。それてはとて。シリナイの急坂に顔面を摩するばかりに攀ぢ上り。左折して海岸に出て。漁舍蜃莊のほとりを通り候。

この地。東は火成岩の絶壁を負ひ。西は渺茫たる日本海に面し。磯は直角。斜角。扁。圓。平等の巨巖亂礁累々壘々として。歩行頗る危險。屢々曲藝を演じつつ進行致候。されば。春の海も。漁歌も。櫓聲も。帆影も。ヘツタクレもあつたものにあらず冷汗を雨の如くに降らしながら。約半里近く跳び渡り候處。漸くオクリケの村に達し申候。(オクリケの村にて)

第四信

草鞋を穿き替へばやとて。とある荒物店に腰を下ろし候處。人珍しき里の子の。忽ち店前に蝟集して。兵隊さん〳〵と拍手して。益々へのへのもへじ連を喚び集め候。おかしきは涙川に候。この人。何の因果なるにや。鼻下八に霜を置きて。何となく歳更けて見ゆるに。面貌幸か不幸か。平八郎氏に似通ひてありけるを。鋭敏なる兒童等は。兼て石版摺の繪にて見たる肖像の記憶を喚起して。

『エッ。東郷大將が來たよ!!』

道は再び棧道にかかり。再び雲中の人と化す。中腹に至る頃。濃雲遂に凝つて雨滴の墜ち來るもの一點二點路傍の蕗の葉に音す。愈々雨かなあと。天を仰て嘆息しける程もなく。バラ〳〵と降り始め候。

憶ひ出せば去年の夏。單獨にてハママスまて旅行せし時。恰度この棧道の。而かもこの地點にて雨に逢ひ。進退谷まりて。餘儀なく傍の地藏堂に雨宿りせむとて。

中なる石佛に退去を命じ。屋内に辛じて頭を差し入れ。尻を高くして雨を避けぬけるに。亦しても。雨の眷顧に預るとは。或は地藏尊者のお罰なるやも知れ難しと思ひつつ歩むに。怪しや。身は電氣に觸れしかの如く。一歩も前進出來ざるやうになり。眼はクル〳〵と廻轉して。變な調子となり候を。君顔が蒼いぞ。什麼したのかと。秀麻呂に問はれ。聲外に寶丹を飲ませられ。涙川に握飯を食はせられて。始めて夢より醒めしが如く。茫然として二三歩歩みけるに。奇也。珍也。妙也。精神爽快なること別人の如く。滿身の英氣颯然として生じ。熊と一番相撲て見たき心地と變じ申候。段々考ふるに。こは不思議でも糸瓜でもなき事にて。全く胃袋の中味。皆無となりたる次第に候ひし。（チトカニの深林にて）

第五信

一里のだら〳〵坂を。不相變雨に濡れ。雲の海を潜り拔けて疎林に來る頃。麻呂は前面に見ゆる人家を指呼して。何村たりやと問ふ。あれは我等が今歩きつつある草鞋の音に等しき名なりと答ふれば。それてはビシャ〳〵かと言ふ。然り其の下にベッを附けて。ビシャベッと云ふのなりと敎ゆるに。最後に續ける涙川。何だか嘘のやうな名だねえと拔かす。嘘であるもんかと大喝すれば。雨にやビショ濡れ。草鞋はビショ〳〵。そしてビシャベッの村に入るとは。實に奇轉烈至極なりとて。哄笑致候。

此處にてせ思ひ出ださるるは。去年の旅也。乞ふ其の紀行の一節を拔錄せしめ候へかし。

『森林漸く盡くる處。濶然として雄大なる江村を望む。前面突乎として聳ゆる芙蓉峰は。郡中第一の名山。黄金山にして。形狀富士に酷似せるが故に。土地の人は濱益富士と呼べり。この山の後方より。增毛山彙の嶺峰峻嶂。蜿蜒として連れるが中に。屹然群山を挺いて天を摩する崇高の三峰鼎坐せり。左の方なるはウクイヌプリ。右の方なるはクンペッヌプリ。後なるはショカンペッヌプリと知られ孰れも海拔五千尺以上。千秋峰上銀雪を宿し。恰もいとど潔き白帽を冠けるもの の如し。迚山延びて海に沒する處は。天狩二州の境なる雄冬岬にして。雲濤漂渺

◎行雲はがき便

として。高麗。靺鞨の煙波に走れり。眼下には濱益全郡の長汀曲浦。皆指顧の間にありて。秀色眉端に來るを覺ゆ。

蕗の葉のインバネスを着せる。奇なるゼントルマンは。意氣揚々として坂を下り。ピシャベッの村に入りぬ。村民各茅屋の窓より。赭黑き顏を差し出し。裸石が異裝を駭視し『何だらう〳〵』と私語す』（濱益行脚記の一節）

去年は雨とは言へど。山水鮮明にして。恣に觀望せしも。今日は。東も西も北も南も濃雲鎖し。山村水廓更に辨すべくもあらず候。（ピシャベッの村にて）

第六信

七農三漁の黄金村に着せしは。午後の八時。夜既に暗し。路傍に平家作りの人家あり。表の硝子戸に。奥より漏るる燈火照りて『名物こがね饅頭』と朧げに讀まれたり。おい食ふぢやないかと發議すれば。皆々異議なしとて戸を排し入れば。五十前後の男出て來り『おや〳〵。この降りにまあ。』と予等を見廻し呆れ顏也。三十ばかりの饅頭を美味のやら不味のやら。味もわからず呑み込み申候。

店を出でて。切り通しを過ぐれば。遙かに星の如き人家の燈火。眠むさうに瞬けるを望み。サア來たぞとて。漸く茂生の村に着きしは九時近くに候へき。

聲外は友の家に宿り。我等三名は山の手の旅館に投じ申候。

雨に濡れ。鎧の如く重き衣服を脱ぎ棄て。褞袍を羽織り。冷えて氷の如き肌を溫めむと。手拭をさげ。錢湯へとて玄關に出づれば。宿の妻君周章して參り。

『湯屋は今晩休業ですよ』

『何にッ。休業だ！そんなら他の湯屋は』

『當地には一軒よりないのです』

やれ〳〵と室に歸り候處。宿の主人入り來りて。宿帳の記入を乞ひければ。尋常に書記して渡すに。主人帳簿と予が容貌とを暫く對照して。貴方はルーランの裸石先生と同名て入らしやいますなァと申候故。そうだ〳〵と答へしに。傍に胡座し居ける涙川。突如として。なあに此のお方がねえと。將に素破拔かむとする危機一髮。シッシッと辛くも口を止め申候。（丸正旅館にて）

◎行雲はがき便

第七信

夜更けて。此の地の郵便局に奉職せる佐藤某と申す男。我等の來りしことを。いかにして嗅ぎ付けけむ。訪問し參り候。

此の人は涙川と知己なりとやらにて。盛にビールを呷りつつ愉快に物語を致され候ひしが。其の中にて稍〻要領を得たるは。このやうな事に候。本年當村の鰊魚は概して平年の半漁なりしこと。北隣りの幌。群別の兩村は豐漁なりしこと。先日鰊の群來たる時。北洋丸と言ふ汽船が沖合にて。トロール網を使用して密漁をなしゐたるを。雙眼鏡にて發見し。直ちに厚田丸。日本海丸の兩汽船にて追航せしめたるに。北洋丸は蚤くも。水や空なる水平線下に消え失せて。到頭逃がせしは殘念なりしこと。本朝君等の通過し來りたる。ビシャベツ棧道に。大熊が出沒せし事等に御座候。

三時間ばかりの後。佐藤氏歸り去り。麿も亦舊友に誘はれて。宿を出てたれば。涙川と予とは睡ることと致し候。

襟垢冷たき薄蒲團の中より。目ばかり出し。笠の傾ける薄暗き洋燈の光にて襖を

眺め候に。春蚓秋蛇何やらのたくりある文字を判じつつ讀むに。

風捲沙濤夜不收　數聲征雁喚故鄕
新寒徹骨眠難就　月白九郎詞畔秋

と云ふのに候。御承知の如く此の詩の作者は。先般本紙紀念號第一頁に掲げありし。靈秀聳天表云々の作者と同一にして。即ち有名なる。東久世竹亭伯に候。伯が曾て北海漫遊の途次。日高國沙流村に於て。アイヌが義經の靈を尊崇すること神の如くなるを見て。ものせられたるものの由に候。さるにても伯をして。この牛の糞の如き文字を見せしめなば。嘸かし熱き涙を墜さるるなるべしと哀れに覺え候。

涙川はいかにと。枕を覗けば。憎や早や眠りに落ちて。何やら。むにやゝと寢言を申居候に。耳を澄ませば。卒然として『お花とお千代とが』と大聲を發せるには一驚を喫し申候。心魂は夢の國に遊べども。猶ほ兒童の教育を忘れずして。この讀本中の語を誦じたるには感じ入り申候。（旅館にて）

第八信

◎行雲はがき便

夜は明けたれど。霖々たる雨は依然として濤聲に和し居候。さりとて月曜を明日に控へたる先生等は。悠然として滞在すべくもあらず。假令槍が降つても。鐵砲彈が降つても。今日を限りの休みにあなれば。是非〳〵歸村せざるべからざる次第に御座候。

一體。何等の用事ありて。九里の此の地に參りたるや。譯が判らずなと。涙川の呟く聲を耳に致し候。聲外は昨夜別れしより一度も顔を見せず。麻呂も出たつきり雀にて未だ歸らず。そのうちに時間は遠慮なく經過致し候故。徒に曇り勝ちなる空と。時計とを見較べて焦心致し候。斯くて八時となり。九時を報ぜども兩人は見え申さず候。今は詮なしとて。涙川を促し歸途に就き申候。

黄金村にて。兩名ヤット馳せ參り候。

棧道に上れば。またしても身は雲の世界に入りて咫尺も辨じ不申。皆々。馬鹿天氣糞天氣など罵りながら。大笑談話しつつ歸り申候。

こんなことならば家に居て。庭前の栽花を捻り。春は指頭に在りて既に十分と澄し居る方が。遙に上分別にて有之候ものをと。凡人のかなしさ。今更臍を噛み申候。

匆々敬具。

◎猛熊海上に躍る

猛熊海上に躍る

（一）

月下に聽く沈痛悲愴の嘶
爪牙鋭くして敵し難し仔馬の嘆

記憶す。明治四十一年は。風伯雨師のいかなる算違ひにや。百雨千風して氣候の不順なりしこと二四が九なりき。されどこは北海道のみの話也。かるが故に。熊の菓子たる山葡萄。コクワ等の秋の果實山野に乏しうして。飢に咆哮する巨熊の聲。日毎夜毎に哀れなりき。まさか『熊の仔と云ふものは。腹が減つても饑うない』と氣取つて居られもせぬ處より。日を經るに從ひて。豪獸共は空腹を抱へて。食を求むべく〳〵と人里近き處までも徘徊し來る也。

忘れもせぬ。同年の十月五日、月清く、雲稀れに、星の瞬も露を帶びたる良夜。何地より逃げ來りけむ。一頭の奔馬、厚田警察署（石狩國厚田郡）の門前に至かて停止し頻りと嘶く。ポリス諸君驚き出でて、仔細に馬體を檢するに、全身極めて鋭利なく白刃を以て斬り付けしが如き重傷許多發見しぬ。こは何者の仕業ぞやと私語けど、馬は唯沈痛悲愴の嘶きを揚げて鬣を振ふのみ。時恰も一名の壯漢、燕の如く馳せ來り、報じて曰く。兩頭の野馬、熊に奪はれたりと。又一人の老爺忽として來り只今別狩の高原（厚田市街の東南）にて、一頭の母馬熊に啖はれ、一頭の仔馬負傷して逃げ失せたりと。注進頗る急也。

この兩人の言と、眼前に在る血染めの馬とを綜合し、さてはルーランの猛熊、別狩山頭に出現して、親馬を慘殺せるを、孝心深き仔馬は、死力を竭して仇を報ぜむとするも、爪牙鋭くして敵し難き儘、一方の血路を破りて一目散に逃げ來りて、其の急を先づ警察署に知らする者なるべしと斷定す。まるでお伽話の如く、嘘の如き話のやうなれど、眞に正札附、厘毛懸直もなき事實談也。否あまりに正直すぎて、元

價が切れさう也。

それはさて措き。この未曾有の大椿事は、其の夜の中に電の如く、市街三百戸の人々に傳へられ、孰れも安き心なく、各々戸締りを嚴にし、冷たき夢を結びぬ。

（二）銃聲頻に起る別狩の山
唯見る丈餘の猛熊

明くれば十月六日也。東の空ほのぼのと白み、燦たる七彩の香雲は宇宙に流れ、金輪漸く光明遍照の姿を現はさむとする頃、綿羊の眠れるが如き別狩連峰の彼方に當りて、銃聲頻りに起る。稍あつて人の罵り騷ぐ聲、叱咤の叫びも加はりぬ。兎の耳を澄ませば「熊々」「出たぞ」「走れ」「別狩」「ブチ殺せ」等の片言隻語絶え〳〵に聞ゆ。

異變を喜ぶ子は、何だかものになりさう也と、楊枝を咬えつつ階上の窓を排して街路を見やれば、銃を肩にして走せ行く人、長槍の如き武器を提げて勇み行く人、或は屋根に上る人、或は摺子木片手に門口に立つ女等、この朝、市街千餘の男女の

視線は一齊に別狩山上に注射せり。今は盥漱も、朝餐も、ヘッタクレもあつたものにあらずとなし、庭に轉げる棍棒を奪ふが如くに提げ、奔馬の如く土煙を揚げて、別狩山頭へと驅け付けたり。

唯見る丈餘の猛熊。戰慄すべき一聲高く咆哮を揚げ、鏡の如く輝く眼を怒らし、半ば口を開きて銀色の鋭き牙を現はし、鮮血を甜りしかと疑はるる程眞紅の巨舌を口外に斜し、盆大の前脚を揚げ、人立しつつ、今し疾風の如く谿谷に下るを、後方より鬼を欺く數十名の壯士、及び雪眉の老爺等を混じたる一隊、孰れも銃口を揃へて亂射亂擊すること急霰に似たり。忽ち膽慄く、北方の熊笹藪より鐵幹銅身の荒くれ男を以て組織せる援軍、手に電柱の如き丸太を以て空に唸りを生ぜしめ、或は長槍を閃かしつつ、閻魔大王の暴なるが如く、狂ひに狂ひて突進し來り、其の豪絶壯絶愉絶快絶の光景たる、殆ど人間の製造せし形容詞なきに苦しむ也。

今はグヅ〳〵して、徒らに傍觀の快を貪るべきに非ずと意識し、爰に裸石狂生は例の、風の劃れたる風車の如き、猛然たる活動を演じ、八尺餘の棍棒を眞向に翳し

て熊の前路に躍り出てたり。

（三）突擊は猛也、吶喊の聲

空中より降り落つ黑色の物體

銃聲益々加はり、叫喚の聲、熊の吼聲は交々相和し、一種異樣の音響を釀し、峰より谷に入り、木石の悉皆な應じ、般々たる山彦の聲、凄然として三千世界、今將に阿修羅道に墮落するかと疑はるるばかり也。

三發の彈丸と、一大打撲傷とを負ふても、殆ど毛傷の如く感ずる獰猛の熊は、怒りに怒り、叫びに叫びて、今は人立して雲を掴み、今は馳せて脫兎の如く、見る見る眞一文字に、厚田市街の中央さして逃げ行きぬ。

すはや、熊來りぬと、雲霞の如き、彌次馬、彌太牛の恐愕狼狽言語に絶し、右に左に人雪崩をうち、泣くあり、叫ぶあり、騷然たる大爭鬪は、宛として大叫喚地獄もかくやと思はれたり。『家を閉ぢよ。』『子供を出すな。』と大喝じつつ、銃隊と棍棒隊との突擊は刻一刻と猛烈の度を加へ、吶喊の聲、天地を震動し、今や熊の背後十

間に肉薄する折しも。倏忽として熊は大蟲圖をなして。進路を西方に轉じぬ。「それ。熊は海岸へ向ひたるぞ。坂口を喰止めよ」と。其の言語の了らざる中に。前路の急坂より。未だこの大變事を知らざるにや。一個の老爺。腰を弓にして悠々と登り來る。あな危し〳〵と見る間に。熊は忽ち其の老爺の全身を蔽ひぬと。認識する刹那。こは何事ぞ。巨大たる黑色の物體空中より倒しまに降り來りぬ。蓋し熊に蹴飛ばされし也。この老爺前世いかなる善根を積みしか。細微の負傷だもなかりしは。世にも稀なる果報者と謂ふべき也。

マジック的の奇術を演じて。突擊隊の目を眩ませたる熊公は。其の虛に乘じて盛くも海岸に下り。忽ちザンブとばかり海中に飛び込みたり。最早七分の勝利を占めたる銃隊と棍棒隊は。即刻數十の輕舸に乘じて。矢を射るが如くに追擊しぬ。

（四）　水煙海を蔽ひ。天日暗澹。
　　肉中に藏す十八個の彈丸

此の日波靜なること春の如く。溶々としてルーランの峰巒を涵し。紅暾一條の金龍を走らせて。閃々たる波の輝き眩きまと限りなし。熊は水雷艇の如く。浪を蹴立てて沖の方へと突進す。舟は遠卷きに艪を操縦して何處までもと追ふ。銃丸と。火繩砲の發射は空に百道の虹を描き。烟焰天に漲れば。突として數丈の水煙は一點の黑塊を包みて海を蔽ひ。忽として十丈の瀑布天より雪崩れ落ち。太陽之に煥發して。赫焉たる彩色。人の心膽を奪はむとす。是れ彈丸の命中して。熊の暴れ廻る光景の一微分也。陸上に蝟集せる見物の男女は。唯醉ひるが如く。片唾を呑み沖を注視して佇めり。

既にして包圍の舟は。其の圈を縮めたり。熊の吼聲も絕えたり。銃の音も稀になりたり。忽ち銃隊の方より聲あり。

『喜び諸へ！熊は遂に倒れしぞ!!』

海陸の歡呼湧くが如く。拍手喝采の音。全村に轟き渡りぬ。

艪を全舟協力して熊を曳き來る。檢すれば身丈九尺八寸。年齡七歳の牡熊にして。致命傷は左眼を射穿かれたると。頭骨を碎かれたるとの二にして。昨夜馬を盜みし

はこ奴也。

沖を見れば。一大紅濁色の水脈。縱横に流れて。血腥き風。習々として海を渡り來り。人の鼻を撫で去る。

午後三時頃より皮を破り。肉を裂き。骨を割るに。十八個の古き彈丸と。長さ尺餘の劒の折れたるものとを發見しぬ。過古に於て。いかにこの親爺の爲めに手古擦し人々の多かりしかを知るべき也。

鰊來

（一）北海の寶魚。連鎖の漁船

碧の膏とばかり湛えたる日本海は。微瀾の笑めるが如く。終日のたり〳〵の曲を奏してゐる。

後志の翠嶂長く斗出するところ。雲濤直ちにアリムルの空に入るかとばかり疑はる。シャコタンの盡頭より。此方弓狀の長汀曲浦には。今や北海の寶魚たる鰊を漁せむとする。無數の建網船をもて充ちてゐる。然し船は木の葉を散すが如き底の。ダラシなき浮び方の漁船は藥にしたくも見常らぬ。船は嚴格なる法の規矩に從ふて。陸から何百何十間といふ制限の下に。キチンと投錨してゐるのである。

春霞野に山に匍匐ふて。短草將に烟らむとする今日此頃（北海の四月春未だ寒し）海岸近くの峰頭に臥して波語を枕邊に聽きながら。海原に眸を放つならば。延長數十里に及ぶ漁船は。宛全連鎖の如く。縈回紛糾せる汀浦を包圍して。眺望眞に遙々たるものである。若し理想上の巨人があつたならば。西の方シャコタンの岬から。北の方宗谷の岬まで。舟から舟へと渡つて行かれやう。

（二）規律正しい習性。大騷ぎの心配

海に幾千の漁船を浮べた。西海岸一帶の漁業家は。鰊を待つこと。恰も花嫁子を待つかの如く。夜もすがら千々に心を碎いてゐる。鰊は鱗族の中でも。最も群集を好み。團結を愛し。且つ產卵期を決して違えぬと謂ふ。悠々する程。規律正しい習性

◎鰊來

があるので。古來より暦が『清明』に入ると。必ず一度はお顔を見せるのである。萬一『清明』を告げても。阿處に什麼じて仏るやら。何等の音沙汰もないと。漁業家の胸中は煮え立つが如くに焦り。騒ぎ。案じて。殆ど狂はむばかりの憂慮さに。飯も碌々喉に通らず。果ては易者を招聘し。正一位の君を優遇し。お寺のお闇を（鰊漁期中に限り各山の僧侶はお闇と稱して鰊の去來吉凶を佛に訊す）頂く等。あらとあらゆる手段を盡すと言ふ大騒ぎが持ち上るのである。

局外者から觀察したならば。いかに鰊が來ないからとて。それ程までに滑稽ぢみた心配をせずともよからうにと。嗤ふのは素人考へで。實際當局者の身になつてごらんじろ。漁獲をなす準備には。千兩や二千兩のバシタ金で出來るものではないので。從つて彼等の心配の大さも。此の費用金と正比例するのである。

（三）閃光陸離。群來。壯美の極點

一痕の春月。西伯利亞の空に落ちて。曉風海面を渡るの頃。水天髣髴たる沖の一方より。幅數町に及べる一大白濁色の巨流は。浪を振はし。泡を躍らしめて來る。

◎鰊來

凄まじき現象があるよと。未だ其の何物たるかを認識せざるに。忽ち見る。海面斜に裂け尺餘の氷刀倒に躍りて空を斬り。突として波に沒し。其の出づるや閃光陸離として人の眼を射。沒せむとして氷を撲つや。水煙忽ち虹霓を作るのである。際限もなきこの氷刀の出沒する奇觀は。漸次に增大し來つて。遂には沿岸近くまで押し寄せるのである。此の際若し多少にても鰊漁の智識ある人が。傍に看てゐたならば。必ずこの樣な言語を發するであらう「ハハア。鰊が群來たなあ」と。空は鷗の群が白扇の如き雙翼を翳して。半天に飛翔し。それが刻一刻と增加し來り。終には幾千とも知れぬ數に達し猫に似たる奇聲を發して飛び交ふ有樣は。眞に壯美の極點である。

（四）荒くれ男。實來々々

數日來より雲霧の徂徠と。波の色とのみを窺ふに忠實なる船頭は。忽ち海獺の嘯くが如き大聲一番。群來！群來！と喝破して。沿岸の高嶺も崩るるばかりなる一發の狼火は。碧落を破つて近海數里に響き渡る。と見れば陸上は既に猛烈なる活動は

開始せられ、北より南より、西より東より、鐵幹銅身の荒くれ男は、或は櫂を擔ひ或はタモを携ひ、或は網を負ひつつ、皆躍々として勇み狂ふてゐる。先程から赤毛布のシャツを着し、熊の皮の褞袍を羽織り、腰に大なるマキリ(小刀)をブラ下げてゐた、所謂副船頭なる監視の老爺は、電の如く、左に右に叱咤奔走して、幾多の荒くれ男を手指の如くに使つてゐる。

聽て數十艘の舟は、沖の舟をめがけて櫓を皷し始めた。十二人の荒くれ男が、一齊に十二挺の櫓を漕ぐ毎に、舵手の長閑な音頭に聲を揃へて、飛箭の如くに進み行くのである。かくてホーライ(賓來)々々の欵乃は天を搖がし、波を飜さしめる。

(五) 龍神躍る、弘安の海戰、蛸先生

見渡せば、海原埋む漁船の數は幾萬なるを知らぬ、行き交ふ舟は、縱に斜に横に亂れに亂れて、叱咤の聲、喜悅の叫、欵乃の聲は混交して、一種異樣の音響を生ずるので、水面では何事が始まつたのであらうかと、龍神も躍り出さうである。須臾にして漁舟の各々が、收獲高を誇示する、青、赤、紫等の大布に『大漁』と染め拔いたる旗は、林の如く立てられて、完全錦繪て觀る弘安の海戰もかくやと思はれる。波愈々穩かなれば、鰊は遂に海を蓋して了ふので、櫂の操縱を困め、舟の進航に多大の障害を與ふるのである。其の害は單に舟のみに止まらず、友義もあらうに、同族の呼吸までも妨げて、種々なる漁族をして、困迫の極、水面に浮び出ださしむるのである、中にも身體の構造が、頗る滑稽的に造化された蛸先生などは、最も多くこの奇禍を蒙るさうな。

(六) プラチナのピラミット、抹香臭さ頭

銀鱗潑溂たる鰊を滿載した數十の巨船は、沖船から磯へと、絶え間なく往還してゐる、百坪乃至二百坪の大苫屋は、忽ち鰊をもて充滿する、空地といふ空地は、滿目ただプラチナのピラミットが、山脈のやうに連る、この如き大漁の際、若し漁場の事情に暗き旅人あつて、海と反對の方面から此の村に入るならば、何人も寂寞として、秋の夜の如き村の靜けさに驚くであらう、更に一度海濱の方に歩を運べば、尙ほ其の驚きの度合を增加する、それは何も銀世界の如く陸揚された鰊の壯觀に驚

くのではない。其處に活躍してゐる人間の配合が、餘りに奇々妙々であるからである。凡そ人間と名の付く者は、坊主なると、娼妓なると、カイゼルなると、農夫なるとを擇ばず、小僧なると、巡査なると、痴愚なるとを問はず、悉く背にモッコと名づくる梯形狀をなせる、鰊運搬函を負ふて、大混亂の働きをなしてゐるからである。

併し、はい事には、猥令坊主が、抹香臭き頭に威勢のよい鉢巻をなすとも、決して村の人は兎や角も言はねば、嗤笑もせぬ、寧ろ之を奬勵するやうな傾向があるから面白い。

（七）死を喜ぶ、萬桑の櫻

漁業家の多くは、一種の迷信を墨守してゐる、それが皆な鰊から割り出されたものである。最も奇なる迷信は、出産を忌み、死を喜ぶ一事である。沖揚の眞最中、自分の婦殿が、出産でもしやうものなら、良人の落膽と怒りとは甚しいものであつて、叱咤の聲は、幾度が產褥の夢を驚かし、浦若き初產の戀女房をして、さても男

は無理なものとの嘆聲を發せしむるのである。鴛鴦の契も淺からぬ夫婦の間てすら、既にかかる、野蛮な事を言ふのであるから、況や他人の此の女に對しての罵聲は、推して知るべしてある。之に反して、村の誰かが、死亡したといふ報知がそれからそれへと傳はるものなら、足拍子をうつて喜ぶのである。

以上二個の珍奇なる迷信の起因を尋ぬるに、前者は漁期中に人が出產すると、鰊が早く產卵して去るから延喜が惡い、だから之を忌むといふのて、後者は村人が死ぬと鰊が群來るから、延喜が良いといふのださうな、さりとは荒唐極まる馬鹿〳〵しい話てはないか。其他、たつのおとしごを捕へて龍神と稱へ、日夜尊崇して大漁を祈願することや、申の年は鰊が早く去るから忌む等の、阿呆らしい迷信は一々數へ盡せぬ程多い。

かくて暦は『小滿』を報ずる頃になると、さしもに蜒蜿たりし連鎖の漁船は、一つ減り、二つ減り、三つ四つ五つ、終に渺漫たる日本海は、一艘の鰊船も見えぬやうになる。時宛も北海は陽春五月、沿道到る所萬桑の山櫻が、雪の如く亂れ咲きて、

猛熊もそろ〳〵活動を始むる頃となるのである。

洞爺の湖と有珠の嶽

（一）隱れたる名勝

本道には隱れたる名勝の地が頗る多い。就中。洞爺湖の如きは。殆ど閑却して顧みない程である、一には洞爺湖の位置が。都邑を去る甚だ近からざる所にあるのと。交通の機關が完備して居らない爲でもあらうが。一には『北海道名勝誌』や『北海道旅行案内』等の著者なるものが。あたら幽邃絶佳の湖景を。ま〻子視して。記述を怠つてゐるからであらうと思ふ。

拙作『膽振行脚』で發表した如く。自分は本夏膽振の國を横斷して。旅程の一夜を洞爺湖畔に明した。そして其あらゆる湖の勝景を探り盡して。是程天下に稀なる風光明媚の地を。棄てて置くことを甚だ遺憾に思ふて。これは什麼しても。一と肌

脱いで天下の人々に紹介しなければならぬといふ感じが。犇々と自分を刺戟したので。此の一文を公にするのである。以下洞爺八分と。有珠二分の割合で語ることにする。

（二）洞爺湖の生成

世界地圖を披展して見ると。北米大陸から來れる一大火山脈は。蜿蜒として大洋を渡り。アリユーシヤン諸島を經て。露領の勘察加に現れ。我が千島列島を噴起し。根室。北見の境上に上陸して。釧路。北見の境を斜に走つて。阿寒の二火山を起し。雌雄兩個の湖を生み。北より南する樺太山脈と交叉して。遂に膽振の國に入つて。先づ海拔七千尺の羊蹄山と。樽前。有珠などといふ一個の睡眠火山と。二個の活火山とを起し。此處に亦。支勿。洞爺の二大明鏡を磨するのである。

由來。火山脈附近にある湖は。多くは昔日の噴火孔に湛えられたる。所謂火口湖か或は火山爆發の際噴出したる火山灰。若くは熔岩等の堆積により。流水を遮斷して生成したものである。されば此等の湖は。大抵底深く。岸高く。水は清冽にして。

山は綠なるを常とするのである。水の清さは。底が岩石。若くば泥を釀さざる鑛物質を以て組織されてゐるからであつて。山の綠なるは。岩石を愛する常綠樹の繁茂するからだ。

洞爺湖は。即ち以上の地理的理由に因つて生れたものである。位置は膽振の國。有珠郡。有珠山の麓——。

(三) 探勝の道順

探勝の道順は。洞爺を中心として。凡そ左のやうに區分して說明する。

甲。旭川。札幌。小樽方面より行く人。
乙。根室。日高。室蘭方面より行く人。
丙。壽都。福山。函館方面より行く人。

甲の部に屬する人々は。函館線に乘り。倶知安。比羅夫を過ぎ。狩太といふ小驛で汽車と別れて草鞋を穿ち。癪に障る程。羊蹄山の麓を迂廻して行くこと四里で。彼の五人殺しに名高い眞狩村に着く。紳士素を加味した人は。この村で一泊するも

よからうが。健脚を誇るバンガラ黨は。宜しく尙ほ二里の平原と。三里の丘陵とを踏み破るべしだ。すると其の日の中に。湖畔なる向洞爺に達することができる。

乙の部に屬する人等は。室蘭より長曲汀浦の海道を西へと七里半。西紋鼈まで歩くもよからうが。頗る無趣味な道路であるから。それよりは寧ろ。五十一錢を投じて。噴火灣定期汽船に乘り。甲板上から陸上の景を眺めながら。西紋鼈に着いた方が。遙かに得策だ。時間は僅かに一時間ばかりで達する。西紋鼈は所謂北海道の模範農場として誇る伊達村のことである。此處から馬車に乘るなり。或は鞍上に煙草を燻すなりして。行くこと三里で壯鼈村。四里で向洞爺に出る。

丙の部に屬する人等は。森驛で汽車から下りて。汽船に乘り。西紋鼈を經て向洞爺に着くといふ順序だ。

甲。乙。丙三方面の人々を。無理に向洞爺に落ち合せなくとも。よささうなものだと力む人もあらうが。併し目下のところ。湖景を眺むるに最も卓越せる地點は。向洞爺を措て。未だ他に發見されないからである。其の他には。何等の理由はない

のだ。

（四）湖の外貌

三方面孰れの道順を經て來れる人も。先づ驚嘆して了ふのは。初めて湖の外貌に會した時である。中にも眞狩口から行つた人が。峠の嶺さから濶然として現れたる湖の面貌に接したなら。大概の人は『アッ』と言つたきり。開いた口が暫し塞らぬのだ。それは湖があまりの崇高壯嚴の眺望を呈してゐるからである。

周回九里の湖畔を繞つて。皆な翠色滴るばかりの山だ。湖心に不規則三角形をなした。一個の緑山と。二個の小さな島とが浮いてゐるやうに見える。水は清淨として水晶を溶したるが如くて。滅入るばかりの靜寂を保つてゐる。四周人煙甚だ稀に。住民の半ばは。近年移住して來たホヤ〳〵の農家である。

湖の全景を。仔細に觀察しやうとするならば。向洞爺唯一のホテル。ミツハシに宿るべしだ。此の宿は湖を壓して建てられた家で。庭園廣く。樹木茂り。樓上に寢轉んでゐて。湖の全景は悉く掌上に弄ぶことができる。

（五）湖の內容

湖上に棹さし。居ながらにして陸上の風景や。中の島の勝を探らうと思ふ人は。旅館の人に舟を出して呉れまいかと。相談を掛けるがよい。すると直ちに湖畔のボフラの老幹に繫いて置いた纜を解いて呉れる。舟を操縱する技能のないものは。舟子を雇ふのは勿論であるが。なるべくならば。異分子を含まずに。同行者連中と自分勝手に舟を水のまに〳〵漂すのが面白い。直徑三里に及ぶ大湖だからと言ふたとて。高が淡水湖である。お負に湖畔を繞つて二戸の村。三戸の人煙が散在してゐるから。決して一命を奪つるやうな心配はない。

綻藍を湛えたるやうな湖に。舟は悠々として漂ふ。煙草を輪に吹いて。陸上を眺むると。嵯牙重複たる連峰が。椴。桂。アララギ。アカダモ。イタヤ等の衣を纏ふて奔るが如く。伏するが如く。蜿蜒として湖を包圍してゐる。其の後方には。秀然として雲表を貫く後方羊蹄山が。裾を俱知安の廣野に曳いて。胸に銀雲の霓裳を纏ひ。芙蓉の面貌笑を湛ふるが如くに欲つてゐる。眼前咫尺の處に眼を移すと。是は

したり。一大赭山がぬつと頭を擡げて聳立してゐる。これぞ醜怪なる有珠嶽であつて。峯尖二分して南北に巨大なる頭顱を生じ。其の赭く禿げたる鼻孔より。口より悠然として。濛々たる灰色の煙を吹いてゐる。其の風姿が頗る怪絶で。恰も閻羅大王と。阿修羅王とが。洞爺湖を蹂躙しやうと言ふ會議を凝してゐるやうに見える。

是等の山姿に見惚れてゐる間に。舟は誂いたやうに中の島に漂ふてゐて。紫蓋翠柱既に眉端に達してゐる。島上の樹木は。過古幾百千年來。未だ曾て鋸の入らざる密林であつて。楢。桂。榛。椴等の巨幹が拗曲して。細枝悉くこんがらかり。一點の光明すら認むるに由なく。陰森の氣は常に磅礴してゐるのだ。萬一にも島に上陸して。一歩でも魔の領なる木下闇に入るものなら。化けさうな苔石が。蛇毒を吹いて其の人を氣絶せしめて了ふ。だから我等は島の外貌だけで滿足せねばならぬ。島の大さは一里もある。巡航して見ると。數仞の斷崖が暗紫色の錆を帶びて怒起してゐる處や。嶮巖肩を聳やかして。其の頭上から青龍水を呑むやうな老松を垂れてゐる處や。深さ奈落の底に通じてゐるやうな深淵に。銀鱗潑として躍る三尺のアメ鱒

や。腹側珊瑚の如き色を呈したる鰹などが。水中に群をなしてゐて。舟の人々を不思議さうに眺めてゐる處などがあつて。身は宛も小さきルーランの境に遊んでゐるやうな感じがする。

島には素より人類を始めとして。高等動物のカケラも棲息して居らぬ。たゞ下等動物の爬蟲類と。梵歌を謠ふ怪禽の二三とがゐるのみだ。されば建築物など在るべき道理がないが。唯一つ。藥にして飲まるるばかりの小さき祠が。島南の一角。奔馬に似たる巖頭に乘つかつてゐる。段々詮議して見ると。堂は觀音を祀つてあるので。寛永の昔。有名なる定山溪（札幌區外にあり）の開祖。法師定山が。颯然として來りて安置し去つたものであるさうな。

（六）快絶なる湖中の游泳

島を一周したなら。一と先づ湖畔に歸つて。水泳を試るべしだ。（無論夏期の話だよ）衣類を樹下の砂白き磯に奥て置いて。ザンブと水に入るのだ。約一町位までは。水平線が乳のあたりまでしか達しない。是より以上は綠礬の色濃くして。蛟龍でも

潜むでゐるやうに思はれ。東洋人特有の恐怖心が起るが。併し湖の中には。二三種の魚の外斷じて怪物は棲息して居らないから。ズン〳〵沖遠く游泳すべしである。何だか水魔水妖の類が。冷たい手を伸して脚を引き込むやうな心地がするのは神經の仕業だ。約十分も泳いでゐるうちに。水晶の如く清い水と。冷たきこと氷に等しき水温とは。渾身を刺戟して來て。社會的煩雜に疲れた心身は。清淨無垢となつて。胸中一の悶事なく。殆ど身は神に近き人間と化するのである。

浴後は亞字の欄に凭つて長嘯するもよからうし。亦潑溂として香脂鼻を躍らす鱒の吸物に大杯を傾くるもよからう。併し山水狂のヒーローにして。且つ探勝を急ぐ人は湖畔に沿ふて。壯觀の瀧を見物するべく。直ちに草鞋を穿つた方がよからう。

（七）有珠嶽と湖畔の風物

壯觀の瀑布は向洞爺と殆ど一直線をなした對岸にあるのだ。道は左右兩方に分れてゐて。孰れも五里にして近い。どちらの道を撰むも勝手であるが。併し飽迄風光の佳絶なるに醉ふと欲する者は。必ず右の道を採用するに限る。

道は鬱然たる森林の間を穿つて邏逶として。長汀曲浦を縫ふてゐるのである。兩側の老樹は。二人。若くば三人の大男が抱き廻しても。雙方の手が達しない程の巨幹であつて。もとより碧落を仰ぐよしもない。夏の最中などには。湖上から渡つて來る。習々たる風が袂に孕むで。壯快極まりなき中に。歩を運ぶことができる。併しあまり蟬時雨が甚だしいので。同行者との話聲が聽えぬ恨みがある。途中で疲れたなら。隨時呑氣に足を伸すことができる。樹木の下は柔きこと羊毛の如き。エメラルド。グリン色の草で織つた一面の芝生で。所々に紅黄紫白の野花で彩色までも施してある。この芝生の毛氈は周回九里に寸隙もなく敷きつめられてある。だから草鞋を穿つた儘。到る所で寢轉ぶことができる。時々銀鶴のやうな白帆が。樹木の間を拔けて。中の島に隱れたり。中の島から咿軋の櫓聲が聽えたりして。恍然として。隔世の思ひがする。

西湖畔といふ。七八戸の農村を拔けると。すぐ有珠嶽の直下に出る。近寄れば。近寄る程奇怪の山で。遠く赭く禿げたる頭顱と見えしは。龍蟠獅躍の怪巖が。爭ふ

て紫微宮に昇らむと欲するが如き有樣と變じてゐる。登山する者は。此處から彼の奇岩兀々怪石磊々たる峰上を匍匐して行かば。僅々一時餘にして絶巓に達することが出來る。

山上に二個の沼がある。一を金明。一を銀明といふのだ。富士の絶巓にある金明水銀明水の名を失敬したのであらう。沼はいふまでもなく。舊噴火孔に湛えられたもので。水は清冽にして。異草奇花等が沼を繞つて。嬌妖として咲き亂れてゐる。高山植物を愛し。且つ火山を研究せむとする者は。勿論一度は登山すべきであるが。そんな科學的研究などは什麽でもよいと言ふ者でも。是非一遍は登つて見なければならぬ。殊に洞爺湖に遊むだ者は。可厭でも應でも登山する義務がある。何となれば。造物主が。人間に洞爺を仔細に觀察させやうとて。鬼を役して特に築造させた觀望臺である。然るに。若しこの山に登らずして過ぎ去つたなら。それは或る一面に於て。天の恩惠を無にする罪人となるからだ。

兎に角。洞爺に遊んだ者で。若し有珠嶽に登ることを忘れて來たと云ふたなら。

其の人は宛も。リーダーの一の卷を讀むだ類に過ぎないので。殆ど洞爺を語る資格はないのだ。

（八）壯觀の瀑布

有珠の麓に沿ふて一里程行くと。はじめて轟轟の聲が聽えて。忽ち湖の水が矢の如く流るる處に達する。一體この湖は四山の谿間から流れ出づる千百の川が集つて出來たので。間斷なき水の集合は勢ひ湖に溢れて吐き落されのである。然るに。湖は海拔約千尺の山上にあるから。吐き落される水は急轉直下して。其處に一大瀑布を現出するのである。

瀑布は峽勢最も壓迫せる。壯觀村の直上に懸つてゐる。石を劃つて素練直下すること十丈餘。幅五丈に及び。初めは勢奔龍の如くで。忽ち中腹に突出してゐる巨巖に激瀉して風を生じ。雲を捲き。雪を降らして。遂にインチゴーを擲つたより濃かな深潭に投じて流れ去るのであるが。礬の絶大なると。溪間に滿つる空濛霏微たる斷虹の物凄さとには。何人も駭心驚魄して了ふのである。要するに此の瀑布は。華

嚴の雄大と。那智の豪宕とを。チャンポンして半分に分けたやうな觀がある。

此の日は瀑下の農村。壯麗の村に宿つて。よもすがら滔々淙々の聲に。枕を撼かさせて。女神ゐます。湖景を夢見するもよからう。

（九）洞爺湖の價値

以上は洞爺湖の梗概であつて。兼ねて突貫的探勝の方法を記述したのである。

金錢とタイムとに顧慮なき人等は。一週乃至數週。向洞爺に宿つて。朝は水蒸氣に映ずる日の出の美觀に接し。晝は湖上に舟を浮べて打漁し。夕には湖面に榮ゆる夕燒の彩雲に心を溶し。夜は明月中の島より。有珠の灘かけて冴え渡る幽韻の趣を味ひて。唯々悠々自適日を消しなば。身の人間界を去ること甚だ遠きを覺えて。幽邃靜寂の氣轉た五體に沁み渡るであらう。

多くの山水には。探勝の時期があつて。四季のすべてを通じて。遊ぶことのできぬのが通例である。殊に我が北海道に於ては。唯夏の一期あるのみである。然るに。この洞爺湖は。冬期本道の湖沼が。すべて堅氷を以て蔽はれるにも關はらず。

依然として冬を知らざるかの如く。處女の笑を湛えて舞ひ狂ふ白雲を受けてゐるのだ。されば。春に。夏に。秋に。冬に。隨時遊覽することができて。四季折々の風物に接觸するを得るのである。殊に將に來らむとする。晩秋の紅葉は。天下無比の美觀を呈するのである。

自分は從來。北海道で名ある勝景は。大抵探り盡したが。孰れも文章で見たよりは實地の方が。數等劣つてゐたが。洞爺の湖と。我がルーランとは。いかに文章を華麗に。且つ誇張して書いても。到底實地の百分一も表すことができぬのである。それも其の筈だ。全く意料以上なる。女性的洞爺湖と。男性的ルーランとは。實に本道勝景上に於ける。グレート。チャンである。未だ見ない人に話したつて分らない。

（一〇）勝景保護

自分が洞爺に遊むで。慨嘆の涙に咽んだことは。湖景が日一日と破壞されて行くことである。榮利の外。眼に一點の美を愛する光なき者等が。湖畔の森林に斧を入

◎洞爺の湖と有珠の嶽

れて盛んに枕木を伐り出してゐるのだ。或る會社の如きは。近年中に。中の島に一大木工場を建設し。湖を利用して水力電氣を起し。以て諸種の器械を運轉せしめやうといふ計畫であるさうな。

崇高にして壯嚴なる天下の仙境は。斯くして將に次第に。完膚なきに至るのであらう。いかに富源開發の爲とは云へ。がくまで審美思想の缺けた人間が。矢張我が日本人の中に在るかと思ひば。眞に情けなくて。涙が零れるよ。

自分は切に當局者に望む。洞爺は我國での『山湖』として誇る。蘆の湖。中禪寺十和田等の比ではない。實に雄大にして純美を極むる東洋稀有の湖であるから。是が勝景を保護すべく。今のうちに何とか方法を講じて。殘忍なる破壞者の斧鉞の入らないやうに。嚴格に取締つて貰いたい。（四十二年九月稿）

明治四十三年、七月二十三日、有珠嶽の爆發したことは、世人のよく知つてゐる所である、されど是が爲に、洞爺湖と有珠嶽の風光上の價値が、毫も減じないといふことを知つてゐる人は尠いやうである、是れ爰に爆發以前の記事を挿入した所以である。

春信申上候

四月二十九日の午後。まろ來りて其邊までブラ〳〵行かずやと誘ひ申候故。其邊とは何處の邊なりやと訊ね候處。唯その邊とのみにて。一向要領を得ず候へども。煙霞野に山に匍匐ふ今日此頃。深き詮議など致すは野暮の事と存じ。早速例の羽織をヒッかけ相携へて寓を出で申候。

『菓子を少し持つて行くべや』との。まろの發議に從ひて。スクール。バックとなんよべるニヤケたる袋に一杯詰め込み申候。一體我日本人程飲食に濫らなる國民は稀なるべしと存じ候。鳥渡花見に行くにも。觀劇するにも。山遊びするにも必ず飲食が附き物の樣に思はれ居候は。なんぼ古來よりの慣例なりとは言へ。餘りに濫らならずやとまろに語り候處。そんな屁理屈は廢せ。人間は食けと色けとが消耗すりや。死ぬるばかりぢやと。一向小生の迷論に耳を傾け不申候。但し食けにかけては。天

◎春信申上候

◎春信申上候

下何人もまろの右に出づる者なかるべしと存じ候。この事は他へ秘密に願候。

ポロナイの高原を辿り候處。石狩灣の長汀曲浦を圍繞せる。幾千百の建網船は。鰊の群來を今や遲しと待つかの如く。行儀よく浮び居候。漁期に入りてより。本郡一帶は。未だ思はしき漁に接せず。漁業家の痛心さこそと察せられ候。

どんよりと霞める空には。數百の鷗。白扇に似たる雙翼を翳して。猫の如き奇聲を發し。悠々と舞ひ狂ひ居候を看ては。精力の有らむ限りと。智力の一切とを盡して研究苦心しても。尙ほこの鷗の飛翔するが如き輕快なる飛行機の出來ざる人間の愚をつく〳〵情なく思ひ候。路傍には虎杖の紅き芽。紫の片栗。さては老いたる蕗の臺など春の復活は山野に滿ち居候。

電柱の如く。スラリと背高きまろは。予を小男と侮り。驚に等しき其の長き兩脚にて歩を運び候事とて。小生は斷えず後れ勝ちとなり。兩人の話聲は勢ひ大きくなりて幾度か海岸に働ける。漁夫の群を驚かしめ申候。

路傍到る所。正一位の君を祀れる堂祠これあり。其小なること。一人にて運べさ

◎春信申上候

うに相見え候。孰の堂の前も。赤き鳥居。白き旗など華やかに飾られ居候。つい十數日以前迄は。雪に埋もれ。枯草に穢されゐたるを。鰊漁期に向ひ候ため。競ふて堂を清掃致したるにて。是も偏に我家に豐漁の幸あれかしと祈る心願に他ならず候。漁期終れば。旗は撤せられ。堂の扉は閉ぢられ。後は野となれ山となれの待遇にては。正一位君もちと面白からざるべしと。まろと語り候。

ヤソスケの瀧に着き候處。數日以來の降雨にて。水勢頗る激越。十丈の絶壁より素練直下する有樣は。眞に壯絶を極め候。まろの『休むべや!!』と言ふに從へ。共に橋の欄干に尻を乘せ。飛瀑の狂ふを眺め候。瀑の落口には踞虎の態をなせる奇巖兩個これあり水は忽ちこの巖石に碎けて飛沫空に舞ひ。時に躍つてまろの額を撫て候。其都度。まろは豆大の涙を流せる人の如く相見え候。

よい加減にして又歩き出し。幾曲りせる山腹を縫ふて。北へ〳〵と辿り候。この邊一帶は保安林にて。辛夷。山櫻等の老幹枝を交へて繁り合ひ候へども。未だ春淺うして。蕾堅く結び居候。背高きまろは手を伸して櫻の芽を捩り。歩を停めて仔細に觀

◎巻信申上候

察致し候故。何を檢ぶるにやと訊ね候に。近々『木の新芽』てふ理科を兒童に教授するのなればと申候。身は散歩しながらも。心は國民教育の重任を忘れざる。まろの美しき心には只管感じ入り候。

不圖。右手の山より五六の少年。何事か悶着の發生せしものと見え。大聲口論を闘はしつつ下り來り候に。突如として、まろの姿の眼に入るや。其中にて眼の圓やかなる子が『おい〳〵先生が！』と衆に對つて警戒一番致し候。群童俄に靜まり。聽て前路に出て。身を低うして、まろ大明神に敬禮致し候。直ぐ感心する我輩は此處にも亦小學校の先生てふものは。斯も兒童の恐がるものかなあと感心致し候。

道は登り〳〵て千尺餘となり。海岸に動ける漁夫の姿も豆の如く小さく相見え候。まろは路の所々に轍の跡深く地表に溝を作りあるを不思議さうに眺め。こんな急峻の處を車が通るのかと予を顧み候。まろ知らずや。この轍こそ昨年の夏。旭川なる輜重兵第七大隊が食糧縱列を編成して。百有餘の車輛を曳き。この北海屈指の難嶮ゴキビル山道を通過したる。苦しき汗の記念なりと語り聞かせ候處『ひどかつたべえなあ』と牛の吼ゆるが如き驚嘆の奇聲を發し申候。

◎巻信申上候

苔空に聳ゆるゴキビルの初嶮を仰ぐ頃。まろはこの邊にて終點とせずやと弱音を吹き申候故。どうせ此處迄來たのぢやから。巨熊の澤の附近まで行かうと商れば。先生既に楢の根株に腰を据え。いつかな動かばこそ。金挺子にても尻が上らざる始末にて遂に我輩も此處に止まることと致候。

枯葉の褥に仰臥して碧落を眺め候スタイルは。宛全小杉未醒氏の畫中の人物に似たりなど笑ひ興じつつ。おもしろき銀雲の行衛を凝視致し候。脚下幾千仞の海岸より高低の欵乃。咿軋の櫓聲など雲雀の聲に交りて微に聞え。心魂髣髴として夢の國に遊ぶが如く感じ候。まろ先生。何時の間にやらバックの中より鼠の物を引くが如くケークを摘み出し。頻りにバクつき居るを發見致し候。驚起して袋を窺へば。はや其九分通りは彼が食道を通過し了り候。まろの健啖眞に驚き桃の木。山椒の木に候ふと予が曲げたる肱のほとりに瞳を落し候に。紫の色濃き鰯花(菫)兩點。媚を呈して咲き居候。都の式部に見せ候はじ。やれバイオレットよ。ラブの花よ。あらまあよ

◎巻信中上候

い匂ひだわと。頭髪に翳され。ブックの間に藏せられて寵愛淺からぬものを。あたら木念仁の乃公等に見付けられたが百年目。めちやくちやに弄ばれて。フッと一息空に吹き飛ばし候は。我れながら稚戯愛すべしと相顧みて哄笑致候。

折から神寂なる山道の空氣を顫はして聽ゆる鈴の音に兩人跳ね起き。耳を欹てゝ眼下の路を看るに。二人連れの遍路の此方を差して來りたるにて候。先なるはよぼ〳〵爺にて。背の高さ六尺もあらむかと思はるる長き蓋なき箱に。赤き袖。黑き頭髪。黄なる頭巾。白く愛らしき人形等を箱狹しと掛け吊し。其奥に菩薩尊者獨り慈眼を閉ぢて安座致し居候。思ふに其幾多の奉納品は。孰れ信仰深き男女の心願ありて喜捨したるものなるべし。男より五六歩後れて妻とも見ゆる老女の。腰を『く』の字に屈め。竹の杖に縋りて蟲の匍匐が如く。辛じて夫に隨へ來るを見れば。あな凄きことよ。鼻は其所在を失ひ。口は左に裂け。光澤を消せる眼は異樣の光りを放ちて。鬼女もかくやと思はれ候。過世いかなる業因にて斯くも醜き面貌を世の人に晒し歩くにやと。まゝに私語けば。彼とてこの世に生れ落つる時より。あの顏にてはあらざるべし。一時は鶯も來鳴ける華やかなる春もありたらむ。鳴かした鶯が身の不運となりて。猛烈なる梅毒は彼をして顏の美を破壞し了りたるものならむと。鹿爪らしく語り出て候。新藥六百六號も。あの顏となりては手の附け方もなかるべしと存ぜられ候。

時計を見るに五時に近し。乃ち歸路に就き申候。

遍路の振鈴の音。幽かに森林の暗に細り行き候。あはれ今宵は何處に宿らむと春寒う感じ申候。草々。

◎

裸石磊々北地より來る。

人かと思へば是れ石、而も其石は怪獸の牙、幾億萬年海底に潜む。怪！怪!! 裸石、我は常に汝の赤裸々なるを愛す。喝、（村上濁涙）

これ予が濁涙氏を驚かさむと、ルーランの海より、奇なる裸巖と、怪しき化石とを數個贈りたるに對してのの氏が返信也。

◎

◎巻信中上候